

IS × AC ガチタンが行く

ガチタン愛好者

一人目をきっかけに行われた男性操縦者搜索にて二人目が見つかる。元々ロボットが大好きだった彼はどのようにこの世界を生き、揺るがして行くのか。普通の人  
生はもう送れなくなった彼が目指す夢とは、、

# 目次

設定	1
始まりは突然に	9
好きでも勉強は辛い	15
準備	19
入学式	29
クラス対抗戦 前編	37
クラス対抗戦 後編	47
機体紹介	57
格納庫での出会い	69
お悩み相談	77
企業連。そこは変態どもの巣窟	85

理性との戦い

タッグ戦闘訓練

学年別タッグトーナメント

学年別タッグトーナメント 決勝戦

仲直り計画始動

仲直り完了

生徒会長戦

青春とは恋愛である(決めつけ)

臨海学校 準備編 前編

臨海学校 準備編 後編

臨海学校 1日目

臨海学校 2日目

暴走IS現れる

銀の福音戦

文化祭 準備編

文化祭 前編

文化祭 後編

企業連はやっぱりキチガイ

武装テスト

第二回タッグトーナメント 第一試合

第二回タッグトーナメント 第二試合

無人機襲撃

彼らの過去

修学旅行 1、2日目

修学旅行 3日目

世界が動く日

企業連 VS 世界	アメリカ編	1
企業連 VS 世界	アメリカ編	2
企業連 VS 世界	ロシア編	
企業連 VS 世界	イギリス編	
企業連 VS 世界	ヨーロッパ編	1
企業連 VS 世界	ヨーロッパ編	2
企業連 VS 世界	日本編	1
企業連 VS 世界	日本編	2
IS 学園襲撃		
束の間の休息		
大決戦前夜		
大決戦 その1		
大決戦 その2		

大決戦 その3

大決戦 決着

兵器解説

事後処理

未来への翼



## 設定

筆者が考え付いた設定をここに記録していきます。物語が進むにつれて増えていくかもです。

---

### 主人公：有澤隆彦

本作の主人公。有澤重工社長の有澤隆文の息子。父の影響を強く受けロボット大好き、ロマン好きになる。ISに乗れると分かってからは元々の憧れもありガチタンを操るようになる。

### 父：有澤隆文

主人公の父親。重装甲、大火力をこよなく愛する。職人気質で社員に混ざって設計、作成を行うことも。シミュレーターでの成績は企業連の中ではトップクラス。もちろん使うのはガチタン。

## 1 設定

### 企業連

主人公の企業である有澤重工も所属する複数の企業で成り立つ組織。女尊男卑の流れで解雇されたキチガイ職人が数多く存在する。現在はISの武器、スラスタール等を手掛けており、実弾からレーザーまで何でもござれ。国産と言いつ張るISにも必ずどこかに企業連が関わっている。世界中表裏全ての組織に諜報員を送り込んでいる。基本は監視するだけで裏工作等はない。以下企業連所属企業の紹介

### GA(グローバルアーマメンツ)

アメリカを拠点におく企業。実弾と装甲の技術に優れており、アサルトライフルやマシンガン等を生産する。ISだけにとどまらずその技術をいかした重機なども手掛けている。またブースター技術に秀でるクーガー、電子機器が得意なMSACインターナショナルを傘下におく。そのため自社でISが作れる。

### MSACインターナショナル

GA傘下の企業。ミサイル技術に秀でており企業連製造の全てのミサイル製造を請け負っている。リーダーも製造しているが完全にBFF社の下位互換な性能なので全く売れず在庫が大量に余っている。

### クーガー

GA傘下の企業。スラスター等の推進機の技術に秀でている。現在ISにはでかすぎる超大型外付けブースターを開発している。

#### 有澤重工

日本に拠点をおく企業。大鑑巨砲主義を掲げており、GAよりもさらに装甲と炸薬の技術に秀でている。なお他の技術はからっきしなので自社だけではISが作れない。また武装はグレネードのみであり世界中に熱烈なファンが存在する。GAと業務提携を結んでいる。

#### テクノクラート

ロシアに拠点をおく企業。ロケットの技術が高く、宇宙産業にも手を出している。武器としてのロケットはその命中率と特異な性質から人気はあまりない。

#### BFF社

イギリスに拠点をおく企業。スナイパーライフルの技術が高く命中精度は自他共に認める世界一。それにともないレーザーダーの技術も最高クラス。なにやら巨大兵器を作っているという噂もある。

#### インテリオルユニオン

北欧に拠点をおく企業。光学兵器の技術力が高くレーザー等が得意。なにやら有害物質を撒き散らしたがるトーラスを傘下におく。

トーラス

コジマ粒子を発見したはいいが健康被害を及ぼす汚染が確認され、企業連からは「コジマ粒子を人体に影響の出ないようにしろ。無理なら除染機を作れ。それも無理なら開発中止！」と言われ現在必死で無害化コジマ粒子と除染機を開発中。たまに建物から緑色の粒子が漏れ出ている。

オーメルサイエンステクノロジー

ヨーロッパに拠点をおく企業。何かに秀でたものではなくバランスの良い物作りを掲げる。変態揃いの企業連の中では割とマトモな企業。

アルゼブラ

中東に拠点をおく企業。ユーラシア大陸ほぼ全土に手を出しており、影響下にある地域の広さは企業連1。武器が安いのが特徴で人気のある企業。また知名度は低いがパイルバンカーなんかも作っている。

レイレナード社

既に存在しない倒産した企業。非常に尖った性能の武装を作っていた。今でも愛用者が非常に多い。

### 世界設定

基本は原作に準じている。ただ企業連が全世界に影響力を持つので戦争等は起こっていない。

### 篠ノ乃束

原作と同じく重度の人間不信。天才故の悩みで話を通じる者がいない。ISで宇宙を目指していたのに誰も宇宙を目指さない現状に不満を感じている。箒を助けてもらった恩で企業連に参加、思いの外居心地がよく自由を謳歌している。

### SE(シールドエネルギー)

ACで言うところのAP。大体25000ほどが平均。重さによって決まるので高機動な機体はこれが低く設定されている。0になるとISが解除されるが搭乗者を守るエネルギーフィールドが形成される。非装甲部に命中すると大きく削られる。

### IS適正

SS、S、A、B、C、D、Eまである。SSはブリュンヒルデクラスでEはISは反応

するし、かろうじて動かせるが、とといった具合。いわゆる粗製というやつ。処理能力が遅いだけなので、AIなどでサポートすればマトモに戦える。しかし普通のISはそのAIを載せる余裕があるなら適正高い人を乗せるのでこのことはあまり知られていない。

## IS学園

建築に企業連が多く出資し関わったため原作と比べ割と要塞と化している。主な変更点はアリーナの物理的天井。原作では観客席から天井まで巨大なバリアシールドを張っていたが非効率としてバリアシールドは観客席だけに。天井には有澤装甲とインテリオルの対レーザー塗装により傷一つ付かない。建物も短気な生徒がISで暴れたとしても壊れないほど頑丈。下手なシエルターより安全。

## 直接装填技術

ISの何もないところから武器が出るのを見た人が

「直接薬室に弾丸を出現させれば装填機構不要になるんじゃないかね？」と言ったのをきっかけに開発された。バスのロットから直接装填するためマガジンが不要に。本来なら使用後の薬莢もそのまま回収できるのだが「カッコ悪い！実弾兵器はばらま

かれる空葉莢がカッコいいんだ！」との意見から廃莢システムは残してある。排出された葉莢は地面をコロコロ転がった後バースロットに回収される。また、「マガジンの無い見た目はカッコ悪い」という意見からダミーマガジンが付いている。つまりメリットとしてはマガジンの交換が不要になることと、装填機構が無い分頑丈な砲身となり弾丸の初速が向上する点などだけである。

---

読んだら何でもいいので感想を下さい。それが励みになります



## 始まりは突然に

本編開始です。めっちゃ緊張してます。

俺の名前は有澤隆彦。年齢は16歳で高校受験は既に終わっている。今はIS適正検査の列に並んでいる。こうなったのは他でもない、織斑一夏という男性操縦者が見つかったため、他にもいないか探すためだという。非常に下らない。本来ならこの時間は社内でロマン溢れる武器の構想を練っている時間だというのに！受験も終わり思う存分妄想が捗るというのに！

「次の方どうぞー」

呼ばれたらしい。結果はもし適正があったなら後日家に届けるらしい。まあ何も届かんだろうが。

「ここに手を置いてください」と何やら不思議な箱に手を置く。

その時はっきりと見えた。検査官の表情が一瞬驚きのものに変わったのを。

「終わりです。結果は後日家に郵送します。では次の方へ、」  
声も少し震えていた。

「ただいまー」

会社の敷地内にある自宅へ戻った。居間では父が新聞を読んでいた。

「どうだった？」

「結果は後日家に郵送しますってさ。多分無理だろうけどな」

「IS 適正あるといいな。」

「あるわけないだろ。あるならこんな男の生きにくい世の中になってねえよ」

「お前に IS 適正があったなら我が社の IS を使って広報でもしてもらおうと思っただけだ、皆やれ「デザインがダサイ」などと抜かして使いもしない。使わず

に何が分かるというのだ！」

父の会社、有澤重工のISはお世辞にも美しいとは言えず全く売れないのだった。俺はとてもカッコいいと思うのだが、

「まあ気楽に待とうや。ダメ元なんだしさ」

「まあ、それもそうだな」

翌日、会社に多くのスーツを着た大人たちがやって来た。何なのかと思っていたら父に社長室に来るよう呼び出された。

「何があったんだ？」

「聞いて驚け隆彦よ。なんとお前にIS適正が出たというのだ。これでお前も自分の考案した武器を思う存分使えるぞ！」

一瞬間が真っ白になった。適正が？俺に？

「それは本当なのか!？」

興奮を隠しきれない俺に緑の髪色をした女性が答えた。

「適正といっても最低値のEなんですけどね。男性に反応を示すことの無いISが反応したんです。つきましてはあなたにもIS学園に入学してもらおうことになるのですが、」

「本当に！あったんですか！行きます。行きます。行かせてください！」

俺は間髪入れずそういった。当たり前だ。自分が夢見てきたロマンを自分が扱えるのだから。戦争の無いこの世の中で試すことができるのはISしか無いのだから。「では入学までにこちらの参考書を見ておいてください」

ドン！と置かれたのは厚さ5cmはあろうかという本だった。一瞬思考が止まった。

「ええと、これは？」

「あなたは一切ISの知識がありません。しかしIS学園に入学する以上最低限これらは暗記しておいてくださいね」

今何と言った？最低限でこれ？まあそりゃそうだ。兵器を扱うのだから。でもこれは、、、

俺は父を見た。父は一言こう言った。

「頑張れ！」

とてもいい笑顔であった。即答したのを少し後悔する俺であった。

ここでは適正検査の結果は後日ということにしました。そりゃそうでしょう。公の場でもし適正者がいたら大混乱どころの騒ぎではありませんからね。入学までは後1話ほどかかります。



## 好きでも勉強は辛い

編集に次ぐ編集。もっと煮詰めてから投稿するようにします。思い付きで始めたら苦勞することを知りました。

---

「ヴァーーーーー！」

俺は思わず叫んだ。原因は言わずと知れた目の前にそびえ立つIS参考書である。「こんなのを全部覚えてるのか現役女子は。いや、最低限ってあのと一言言ってたってことはもっとやってるってことか、」

取り敢えず俺は武器の設計をすることにした。現実逃避である。その時部屋のドアがノックされた。

「開けてくれ」

父の声だった。

「勉強はどんなだ。まあ絶賛現実逃避中のようだがな」

「見ろよこれ。これを入学式までにとって鬼か！」

そう叫んだ俺に父は言った。

「そう言うな。それにその勉強すれば新たな武器が思い浮かぶかもしれないぞ。何せ規格外の存在を学ぶのだからな」

確かに一理ある。今の俺の発想は既存の構想でしかない。これを学んで新たな扉を開くのだ！

「やったるぞおおお！」

「無理はし過ぎるなよ」

そう言って父は去っていった。

俺は今最高にハイだった。ページをめくれば新たな世界があるのだから。

隆文side

さて息子はこれでやる気を出したことだろう。後は息子へ最高のプレゼントをしてやれば良い。私はそう思い電話をかけるのだった。

「もしもし。私だ。相談なんだがうちの息子にISを作ってやろうと思っている。コアを一つ回してもらえるか？」

「いいですよ。その代わり、」

「分かっている。そちらのテストも引き受けよう」

ガチャ、電話を終え一息ついた。企業連はかなり大きい組織のためISコアをいくつか配分してもらっているのだ。そのうちの一つを息子に回せるかと聞いたところ快くOKが出たのだ。

企業連のテストパイロットになると言う条件で。さてこのプレゼント気に入ってくれるといいのだが、

「ヴァーーーーー！」

息子の部屋からだ。

「何か暖かい物でも作ってやるか」

そう呟くと隆文は台所へ向かうのだった。

企業連 side

「有澤重工の息子さんがなんとIS適正が出たらしい。」

「まことか？これで我々企業連の計画もようやく一歩進めるな」

「我が社の社員も大盛り上がりです。「女受けを気にせず作れるぞ。ヒヤッハー！」

「などと叫んでおりました。」

「貴様の会社は世紀末か？」

「どこも似たような者です。抑圧されてましたからね今まで」

「まあよい。テストパイロットの件も引き受けてくれたことだ恥ずかしくない世界

最高の機体を作るぞ。我が社はそのための協力は惜しまない」

「同じく」

ここに普段は競いあっている企業同士が協力することが決まった。

「ところでもちろんフレームは我が社のだよな」

「「いえいえ、我が社が！」」

協力にはもう少しかかりそうだ。

---

書き始めると止まらない。いつまで続くやら。

## 準備

文字数をもう少し増やそうと努力中です。

---

「終わったー!!」

俺は思わず叫んだ。なんとか入学式までに間に合ったのだ。

「さて準備しないといけないな。何でも学園は全寮制と聞く」

そう呟くと男子らしい数少ない荷物をまとめ始めた。

「おーい。ちょっと来てくれ」

「はーい」

父に呼ばれて居間にいくと机に何やら見慣れない腕時計があった。うちの会社のロゴが入っている。

「これ。なんだと思う?」

そう父は聞いてきた。

「腕時計か？入学祝の？」

「そうなんだがそうじゃない。この腕時計はなんと！お前の専用機だ！」

「えっ」

思わず声が出た。確かにISは待機状態にするとああいった小物になるのは知っていたが。

「俺に？なんで？」

「貴重な男性操縦者だろ？企業連が持つてる分を一つ分けてもらった」

「でもコアには限りがあるんじゃない」

「お前は分かってないな。女受けを気にしなくていい！と叫んで既にいくつか武器が制作されているのだぞ。今さら受け取らないということはできまい。それ以前は本来なら入学出来ないレベルの適正值なのだろう。専用機でないとマトモに戦えまい」

確かに俺の適正值は最低のE。出回ってる量産機はマトモに使えないだろう。しかしあいつらが欲望丸出しで作る武器か。どんな恐ろしい物が出来上がるのやら。「分かった。ありがとう」

「加えて言うておくがお前の立ち位置はこれから企業連のテストパイロットだ。他社とも仲良くしなさい」

「えっ企業連って企業同士の仲はよくないんじゃない？」

「確かによくないが「企業連の名を世に知らしめる絶好の機会だぞ。それに企業連として下手な専用機は出せまい？」と言ったらあっさり協力したぞ。機体のパーツはどうするとかで騒いでいたから「それらを決めるのは息子だ」と言ったら納得してくれた。お前もそれでいいだろう？」

「それでいい」

「それと入学式なんだが混乱を避けるため直接教室に行ってくれとのことだ」  
「分かった」

「最後に専用機を入学式までに完成させないといけない。そこにあるのはあくまでもコアだけだ。お前の好きなようにパーツを組み上げてくれ。ただし積載量には注意しなさい。過積載になると性能が大幅に下がるから」

遂にこのときが来たのだ。自分好みの機体を組む。考えただけで心が弾む。

今俺は企業連の本社に來ている。ここは普段企業連所属の企業が會議したりするのに使われているところだが今日は俺の専用機を組むために全ての企業の人間が集結している。ここで画面上で機体を組み上げ、後日實際に作り上げるのだ。企業の数だけ膨大なパーツが存在する。組み合わせは無限大だ。出迎えてくれた人がこう言った。

「あそこにあるパソコンに全てのデータが入っています。あなたの好きなように組んでください。分からないことがあれば我々を呼んでください。」

早速取りかかろう。脚部はうちのタンクとして、……

## 4 時間後

「出来たー！これでどうですか？」

「ふむ。積載量も問題なし。ブースターも申し分なさそうですね。いい機体だと思います。ではこれからシミュレーターで訓練ですね」

「は？ 今訓練って言ったの？ そんなのできるの？」

「シミュレーターとはどんなものですか？」

「VRゴーグルをつけて行きます。IS適正値によって挙動も変わりますがあなたはEランクということなのでそのように設定してあります。もちろんシミュレーターなので適正のない一般男性でも行えます。有澤社長も仕事の合間によく行ってます」

シミュレーターか。実際に動かすわけではないが挙動の確認は重要だからな。

そして俺はシミュレータールームに案内された。指示された通りにゴーグルを付けた。いつでも来い！

「では始めます。まずはIS学園に入学できる最低レベルで行ってみましょう」

そこは荒野だった。岩が点在するそこに俺はいた。

「聞こえますか？まずはシステムを起動してください。基本的にはイメージで動きます。ただあなたの選んだ機体はタンクなので移動には少し慣れが必要かもしれません。まずは指定された場所まで移動してください」

イメージか。よし。システム起動！

『メインシステム。パイロットデータの認証を開始』

いきなり頭のなかに声が響いた。

「うわっ！なんだこれ！」

「落ち着いてください。適正の低い人のために設計されたサポートAIです。音声は後でも変更できます。指示したいことをイメージしてください。武器の出し入れやマップの表示。相手ステータスの表示などが出来ます」

なるほど。これは面白い。よし改めて、システム起動！

『メインシステム。通常モードを起動します』

システム起動よし。これで動くのかな？ ふんっ、っ、何か違和感が凄いな。足が動いてないのに進んでる。タンクだし当然か。よし到着だ。

「指定された場所まで移動できましたそうですね。では次は飛んでみましょう。ISのメリットの一つはP I Cを用いた飛行です。やってみてください」

こうか？ ふんっ 飛べ。飛べっていつてるんだよ。このポンコツがああああ  
ふわり

「飛んでるうううう。物理法則に反しておるぞ！」

「P I Cで慣性を操作できますからね。物理的でない動きも可能です。次は一旦着地して武装の展開を」

イメージ、イメージ、今俺の手には武器がある！ 具体的にはグレネードランチャー

！  
シュン

「出た。これでいいですか？」

「はい。上出来です。では目の前に打ってください」

「どうか？カチッ

ドグオオオオオン!!

「なんじゃこの火力は!?的が吹き飛んでいる。さすがは我らが有澤グレネードだ」  
「基本操作は覚えましたがね？では実戦です。取り敢えず入学式までに代表候補生には勝てるレベルにしますよ」

「おいおいマジかよ。夢ならさm

「どうして俺は入学式当日にこんなに疲れているんだ。オペレーターの人も最初は入学できる最低レベルとか言っていたのに

「まさかここまでとは。シゴキがいがあります」

何て言ってたし。まあそのお陰でシミュレーターとはいえ3分の1の確率で代表候補生に勝てるようになったのだからいいか。初撃が当たれば勝ち。外れたら負けという火力任せだったが俺らしくていい。あの日から毎日訓練だったけど恥ずかしくないレベルにはなっただろう。ここから俺の学園生活が始まるんだ。さてどんな出会いがあるのかな？

---

ようやく終わりました。次から本格的に学園生活スタートです。



## 入学式

取り敢えず最低でも1500文字。理想を2000文字でやっていくことにします。

最終話までだいたい構成は練ってあるので文字起こしさえ出来ればという状況です。

今俺は1・4と書かれた教室の前にいる。入学式が一通り終わり既にクラス全員が揃っている状況だ。後は先生に呼ばれるのを待つばかり。それと女子高生はうるさいと聞いたことがあるから耳栓もバッチリだ。企業連の長い話が嫌いな連中が発明した小型でバレにくく聞きたいと思った音は聞こえる耳栓だ。技術の無駄遣いだと思うが企業連はこんな奴らが大半だ。

「有澤君入ってきて」

呼ばれてしまった。自己紹介とかしなきゃだよな、どうしよどうしよ、落ち着

けい！

そうだ。素数でも数えよう。1、2、3、5、7、8、9、、なんかちがう！ふう、行くか。

ガラガラガラ

きやああああああああああああ！！！！

それはまさしく音圧だった。後に有澤はこう語る。

「女子高中生集めたら最強の武器ができそうだ」

耳栓がなければ即死だったな、

「ええと、取り敢えず自己紹介お願いしてもいいかな？」

「ひゃい！分かりましたでございます！」

いかんいかん平常心平常心、

「初めまして。有澤隆彦と言います。色々と迷惑をかけるかもしれませんがこれからよろしく願います」

よしっ言い切った。台本通りだ。俺ってばやればできる子なんだっ！

「それじゃあまずは自己紹介からだね。有澤君はもうやったから出席番号順にやっ

ていこうか」

俺は緊張していて一人も顔と名前を覚えられなかったのだった。

「自己紹介も済んだところで細かいクラスの役員とか決めよっか。まずクラスの代表。これはクラス対抗戦とかに出る人のことね。推薦や立候補があればお願いね」

「はいっ！有澤君がいいです！」

マジかよ、、どうせ目立つからだろうな。

「いいね彼企業連代表として専用機も持つてるって言うし」

オイゴラァァ！て言うかなぜ先生はそれを知っている？まだ言っていないのに。やめてくれストレスが、、ん？約一名笑顔じゃなくあれは、、尊敬の眼差し？がいるな。珍しいな水色の髪色とか初めて見た。赤目で、、やべっ目が合った。気ま  
ずい、、

「他にいないなら有澤君でいいかな？」

「一応聞きますが拒否権とかは？」

「あるわけ無いでしょ。下調べもしてるよ。企業連の人が自信満々に「シミュレーターで訓練はバッチリです」って言ったし、実力が無いからは通らないよ。だい

たいみんなほぼ初心者だしね。知識はあっても普通はシミュレーターすらやってないから。じゃあよろしく」

というわけで代表は俺になった。まあ企業連の宣伝にもなるしいいか。よし

「クラス代表になりました。有澤です。やれる限りのことはやります。応援よろしくお願いします」

「「「よろしくね！」」」

### 放課後

「有澤君ちょっといいかな？」

「何ですか？ 休憩時間の質問責めで死にそうなんですが？」

「しゃべれるなら問題ないね。はいこれ寮の鍵」

「そういえばもらってなかったですね。ありがとうございます」

「部屋は一人目の子と二人部屋ね。男同士仲良くなさいな。あっそれと寮監と相手

の了承があれば部屋は変えられるから。恋人とか出来ても安心だよ」

「出来るといいですがね。俺と趣味嗜好が会う女子なんざいやしませんよ」

「そんなこと言わないの。世界は広いんだから」

俺だって彼女欲しいけどもこんなロマンたっぷりの趣味嗜好を理解してくれる人が果たしているのかどうか。いてほしいな。

### 寮の部屋の前

「ここか。一応ノックはしておこう」

コンコン

「どうぞー」

元気そうな声が帰ってきた。声的に男だし部屋は間違えて無いようだ。

ガチャ

「どうも。この部屋を使う有澤だ。よろしく頼む」

「俺は織斑一夏！男同士仲良くやろうぜ！」

うわあ。第一印象はこれである。凄いコミユカの高そうな男子だ。顔もイケメンって感じでモテそうだ。

「男同士とはいえプライベートもある。まずは色々とルールとか決めていこう」

「いいぜ！まずはー、」

男同士気兼ねなく話せるのが嬉しいのだろう。彼は終始ハイテンションだった。しかしこいつはやたらと距離感が近いな。これもコミユカお化けの特徴なのか？ただこいつはあの束博士と仲のいいブリュンヒルデの弟だ。仲良くしておくに越したことはない。

もしかしたら一夏繋がりで束博士とも友好関係が、無理だろうな。聞いた話によれば博士は天才であるがゆえに孤独で人間不信だと言う。あちらから接触してこない限りは干渉するのはよそう。藪をつついて蛇を出したくないからな。

「お前のこと隆彦って呼んでもいいか？俺のことは一夏って呼んでくれ」

だから距離感をだな、

そろそろ主人公を戦わせたいです。次辺りで行けるといいです。

---



## クラス対抗戦 前編

原作ってトラブル続きでマトモに1組以外が戦う描写が無いんですね。そのため今作ではアリーナを企業連印の装甲板で作っていて東博士の無人機は入れないという設定で行きます。そうしないと主人公の戦闘がいつまでたっても行えませぬ。ご了承下さい。このせいで企業連は東博士に目を付けられることになります。

「おはようございます。今日は待ちに待ったクラス対抗戦ですよ！」

遂にこの日が来てしまった。この日まで俺は毎日必死だった。IS関連の知識は頑張ったとはいえ基礎止まり。ついていくのがやっとだった。幸いクラスの皆は優しく、分からないところを教えてくれたりしてくれたりくれたお陰でなんとかなった。たまたも腹立たしい出来事が一つ。ルームメイトの一夏がやたらと絡んでくるのだ。勉強があるとしてもお構い無し。風の噂ではこいつ参考書を読まずに捨てたとか。なんとか。人のことは言えんが大丈夫なのか？こうして勉強している俺ですらギ

リギリだと言うのに。

「言っとなかったけど対抗戦で優勝したクラスには食堂のデザート無料パス1学期分が贈呈されるから頑張ってねー」

先生その発言の瞬間教室がざわめいた。見回すとクラス全員が俺を見ている。「有澤君！ 私たちのためになんとしても優勝を！」

やっぱり女子高生は甘いものが好きなんだな。ここでいいところ見せれば俺も少しはモテるかもしれん！ 頑張るぞー！

そして対抗戦なんだが1組VS2組、3組VS4組となった。1組VS2組

に関しては何組が勝った。何でも中国の代表候補らしい。平等を期すため俺は戦うそのときまで相手の機体を見ることは出来ない。さて俺の出番だ。行くか。そういえば実際に動かすのは初めてだな。シミュレーター通りにいくといいが、システム起動！

『おはようございます。メインシステム、パイロットデータの認証を開始します、メインシステム。通常モードを起動しました。これより作戦行動を開始します』

よし異常は無さそうだ。KAZAWA出るぞ！

結果は圧勝だった。唯一専用機持ちがない3組は量産機のラファールで来た。開口一番俺に向かって

「何なのその機体WダツサW専用機持ちって言うからどんなのかと思ったら。所詮男ってのはこんなものねW」

ブチッ 堪忍袋の尾が切れた。沸点が低い？自分の自慢の機体をバカにされたら誰だってこうなる。ぶちギレた俺は挨拶代わりに右手に構えたSAKUNAMIを一発撃ち込んだ。俺はまあ量産機とはいえ3発はかかるかなと思っていた。俺は自分の会社を甘く見ていた。

ボグアアアアアン!!!

相手は爆炎に包まれ次の瞬間俺の勝利が決まった。使ったのはSAKUNAMI I。開発中のグレネードと比べればかなり火力の低い武器なのだがまさか一撃とは。しかも俺はハイパーセンサーで見えてしまったのだ。相手は弾速の遅いグレネードと見るやカツコをつけたのだろう。ギリギリで避けようとしたのだ。そして近接信管が作動してボン！つまり直撃ではなかったのだ。企業連には大火力を好むと伝えている。うちのでこれなら他社のはいいじゃないかな武器なんだ？下手したら相手はトラウマものでは？まあでも申し訳なさは微塵も無いがな！

「決勝戦は2組VS4組だああああ三」

放送部の実況が響き渡る。

「2組代表。風鈴音！中国の代表候補生だー！機体の名前は某有名漫画とは一切関わりはありません！」

「対する4組代表は今一番注目されている二人目の男性操縦者。有澤隆彦だー！初戦は圧倒的火力で圧勝でしたが決勝戦はどうなるのか!?では入場してください！」

よし行くか。今度はまずは相手の攻撃を受けてみよう。この機体最大の特徴である耐久性をまだ実感出来ていないからな。では、システム起動！

『おはようございます。メインシステム、パイロットデータの認証を開始します、メインシステム。通常モードを起動しました。これより作戦行動を再開、あなた

の帰還を歓迎します』

帰還を歓迎しますといってもほんの数分前の話なんだがな。まあ音声は変更できると言うし気に入る音声に後で変えておこう。ふんぬ！やはりまだ慣れないな空を飛ぶというのは。おっあれが今回の相手か、ちっちゃー！可愛い！だが油断はしないぞ。シミュレーターでは代表候補生相手だと負けの方が多かったんだからな。

「あなたが噂の二人目ね。初戦は圧勝だとか言ってるけどあたしはそう簡単には負けないからね！」

この風という少女は初戦で慢心して挑んだ一夏に思いのほか苦戦したため相手が男でも容赦はしないと決めていたのだ。

「しかし見慣れない機体ね。企業連のオリジナルってことかしら。全身装甲だなんて初めて見たわ。それにその脚部パーツは戦車？見た感じ低機動、高火力ってところ？」

「ああ。その通りだ。初戦はあっさり終わってしまったからな。楽しませてくれよ！」

俺はハイだった。ようやく強敵と戦えるのだから。

試合開始！

その音声と共に機体に衝撃が走った。見ればSEがほんの少し削れている。

「何それ!?あたしの龍咆をモロに喰らってもびくともしないなんて。これは想像以上ね」

龍咆?今の衝撃か?おい、あれはなんだ。

「空間を圧縮しその衝撃を打ち出す中国の最新兵器です。砲弾も砲身も見えないのが特徴です」

なるほど。つまりはめっちゃ強力な空気砲ってところか。喰らっても大したこと無さそうだし無視でいいか。それよりは彼女が持っているバカデカイブレードに気を付けよう。あれを喰らったらヤバそうだ。

彼女は左右にブースター移動しつつ接近してきた。ちょうどいい。積んである近接兵器を試すでしょう。どれでもいいが、うーむ。これだ!俺は一番上にあつた近接戦闘武器を展開した。

「ええと。G A N O 1 S S W D ! 言いにくいな」

シユン

彼の両手に現れたのは巨大なドーザー、

「なんじゃこりゃー！」

確かに俺はロマン武器も好きだがそれはあくまでハイリスクハイリターンの武器に限った話。スペックを見る限りこれはGAの連中が載せたハイリスクローリターンの。いわゆるネタ武器というやつだった。

「ええい。ままよ」

俺はしっかり引き寄せてドーザーを放った。しかし！

「そんなトロい攻撃は当たらないわよ」

あっさり避けられた。唯一の救いは避け様に放たれたブレードの一撃が思ったより軽かったことだった。

---

調子にのって書いていたら文字数が凄いことに。取り敢えず一旦区切ります。

ドーザーって名前にドーザーって書いてないから初見だと絶対に分かりませんよね。

一撃でラファールが墜ちたことについては機動力重視のカスタムのため紙装甲低耐久だったからです。量産機とはいえラファールは細かいセッティングができそうなので。そういうことにしてください。それと今作の有澤グレネードには全て近接信管がついているので大きく避けないと被害甚大です。大きく避けても爆発半径がでかいので被害甚大です。

それと凰についてですが、例の一件で一夏に怒りがあるとはいえ初心者ということもあり侮っていました。当然でしょう。方やISに触れて数日、方や国の代表候補生ですからね。一夏に苦戦したお陰で主人公に対しては最初から侮らず戦っています。というか主人公の機体は初見殺しの武器だらけなので侮ると普通に負けます。当たれば必殺ってロマンですよね。



## クラス対抗戦 後編

後編です。思う存分戦わせますよー。ガチタンのいいところ見ていってください。

一旦凰とは距離を取れた。相手は高機動の近接戦闘が得意と見た。でなきゃ射程の短い空気砲なんか使わないからな。取り敢えず耐えつつ武装を確認していこう。さっきのようになったら不味いからな。武装データ展開っと

シユン

やめとけばよかった。こいつはタンク脚の特性上ラファールの3倍近いバスターレットを持っている。弾薬等で容量を食っているとはいえその武装の数は桁外れ。勿論展開されたディスプレイのサイズはとも大きくうつすらとしか前が見えなくなった。

「やべえよ。ええっと取り敢えずSAKUNAMI！」

シユン

手にあったのは初戦を一撃で決めた我らがグレネードランチャー。こいつなら多少は戦えると考えたのだ。呼び出しやすさもあるが。

取り敢えず時間を稼ぎつつ武装のチェックをば。なぜ始まる前にやらなかったんだ俺は！

## 鳳side

これは想像以上ね。龍咆も双天牙月も全然効いてない。その代わりあいつも慣れてないのかディスプレイで視界が塞がったりしている。これなら

ドグオオオン！

「きゃー！ー！」

おかしい確かに避けた筈だ。あれだけ弾速の遅いグレネード、かなり余裕を持って避けたはずなのにどうして？今のでSEは4分の1も持っていかれた。これは、単純にデカイグレネードってこと!?でもやりようはある。もっと大きく避ければいいだけ。それに横からダメなら真上なら！

間違っていないかった。彼は武装の選択に気をとられていたのと空を飛ぶのに慣れ

ていないため真上は無警戒だった。さらに適当で撃っているグレネードは爆風で多少はダメージが入るとはいえ有効打にはなっていないかった。

ガアアアアアン！

「うぐっ」

なんだ？いきなり真上からだど!?そいえばISって飛べたんだったな。だがここまでだ。一部だが武装のデータは頭に叩き込んだ！

こと好きなものに関して覚えの早い隆彦であった。

「来い！ええと確か、GAN01・SS・GC！」

ガンツ！

彼の背中に展開されたのはバレルが3本の巨大なガトリングキャノン2基であった。

「やっぱり言いにくいな。後で呼び出し名変えておこう。こいつならどうだ！」

ドガガガガガガガ

大口徑なのにこの発射速度と威力。クアッドファランクスなんざ目じゃねえ！

「うわっ何この弾幕！えっちょっと待っ」

グレネードの発射を見逃すまいと立ち止まって集中していた鳳はあっさり弾幕に飲み込まれた。辺り一帯は発射炎と硝煙で見えなくなった。

「やったか!？」

世間一般それをフラグという。次の瞬間

ザギン！ザギン！

その音と共に弾幕は止んだ。背後にはバラバラに切断されたガトリングキャノンと、かろうじてSEの残った鳳がいた。

「馬鹿な!?!なぜまだ生きている!?!」

「双牙天月を盾にしてなんとか生き残ったのよ。これ以上何か出される前にケリをつけさせてもらおうわね！」

ドガガン！

零距离での最大出力の龍咆を後頭部にモロに受けた。並みのISならここで終わるだろう。ISが無事でも搭乗者への衝撃で気絶する。ここで鳳は悔ってしまった。決まったと。しかし忘れてはいけない。ガチタンの真骨頂はタフネスにある。さらに、こと物理系の攻撃に対して彼のISは無類の強さを発揮することを。

「人が一番油断するのは決まったと思ったときだ。俺はそれをついさつき身をもつて感じた。食らえ」

バグオオオン！

「勝者、有澤隆彦。よって今大会は4組の優勝です！」

ウワアアアアアア！

会場は熱気に包まれた。この試合には誰もが惜しみ無い称賛をおくった。駆け引きを制したのは有澤だった。俺はISを解除すると嵐の元へ向かった。

「派手にやりましたが怪我はないですか？」

「保護フィールドのお陰で無傷よ。それより最後のやつ。あれ何なの？」

「あれは接近されてどうしようもなくなったときに使うグレネードアーマーです。機体の側面に仕込んだグレネードを起爆させる大技であれだけ実弾に強い俺の機体もSEに余裕が無いと相討ちになります」

「あれだけ攻撃したのにまだ余裕があったのね。完敗だわ」

彼女はそう言うのと俺に背を向けピットに戻っていった。最後に振り向き様に

「次は勝つからね。待ってなさいよ！」

「当然だ。楽しみに待ってます！」

俺はそう言って自分のピットに戻るのだった。

ピットには担任の先生が待っていた。

「最高だよ、有澤君。とてもいい試合だった。やはり企業連の報告通りかなりの実力のようなだ。後は慣れだけね。取り敢えず、おめでとう！」

「ありがとうございます」

表彰式等が全て終わり放課後。俺は勉強の合間にISのディスプレイを開いていた。武装の整理のためだ。

「今日は武装の呼び出しにかなりの時間を使ってしまった。俺の機体の強みは多種多様な武装を扱える点だからな。呼び出し名も分かりやすいものに設定しておく。後はAIの音声も変えなくては。取り敢えずこの男(主任)というのにしておう」

一方その頃

「やったぞこれが新物質コジマ粒子だああああ！これなら攻撃と防御を両立できる。レーザーなんざ目じゃねえ、ゲホツゴホツなんじゃこりゃ出血？全身が痛

い！やべえええ!!」

トーラス社内は小島博士の新発見に大騒ぎだった。

### 企業連 side

「報告によるとこの企業連のメインサーバーにハッキングの形跡があったとのことだったな」

「はい。ですが形跡だけでファイアウォール等は突破されていません。ギリギリでしたが」

「うちの技術者はみな優秀だ。一つの事しかできん代わりにその分野においては世界一を誇る。そんな彼らで作ったファイアウォールを破壊一歩手前までいくとは。まあ誰がやったかは察しがつくがな」

「やはり博士でしょうか？」

「他に誰がいる。大方今回のクラス対抗戦で目をつけられたのだろう。どうやら乱入を企てていたらしいがうちの誇るアリーナの天井が破れず撤退したらしい」

「大丈夫ですかね？相手は天才博士ですよ？」

「こちらには全てに秀でる天才はいないが一つの事に秀でる技術者を全ての分野に

持っている。いつか直接あちらから赴いてくるさ。その時は盛大に歓迎しよう」

ガチャ！

「大変です！トーラスの連中が、」

「取り敢えずは博士のことは保留でいいだろう。まずやるべきは奴ら、トーラスの変態技術者どもの説教だな」

「ですね」

そう言うと彼らは説教のためにトーラス社に電話をかけるのだった。

---

バトル終了です。戦闘描写はどうだったでしょうか？

遂に企業連は東博士に目を付けられてしまいました。これからどうなる!?

次回は主人公の機体の説明を挟む予定です。

コジマ技術もいつか出そうと思っています。トーラスの皆様には頑張ってもらい

ましよう。

## 機体紹介

主人公の機体の紹介です。恐らく物語が進むにつれて増えていきます。臨海学校2日目で機体の脚部が変更、それに合わせてSEも変化しています。また、背部兵器とVOBが追加されました。

KAZAWA SE:35000↓55000

今作の主人公、有澤隆彦の専用機。名前は群馬県の鹿沢温泉から。機体の特徴はガチタン

らしい高耐久と高い安定性である。適正が低いいため武装の展開はAI任せ。声に出す必要がある為展開する装備が相手にも知られてしまう欠点がある。専用機だがコア以外は取り替えが可能なため状況に応じたアセンが組める。だが主人公の趣味でガチタンであることは変わらない。実弾防御に優れるがEN兵器に極端に弱い。豊富なSEを持つ為実弾はもちろん、EN兵器でも削りきるのは一苦勞。サポートAIを

使って人並みに戦えるとはいえ適正が低いので腕武器と背部武器を同時に使用することが出来ない。同時に使えないといっても照準する必要の無い特殊兵器やASミサイルは使用できる。凄まじい量のバスのロットを有しており、これだけの武装と弾薬を積んでなお、大量の買った物をしまっておけるだけの容量がある。

パーツ構成(初期状態)

HEAD:KIRITUMI:H

CORE:GAN01:SS:C

ARMS:GAN01:SS:A

LEGS:KIRITUMI:L↓RAIDEN:L

FCS(火器管制):HUGAKU

多種多様な武器に対応させた管制装置。ミサイルからレーザーまで何でもござれだが重量が非常に重くタンク以外ではマトモに使えない。

今作オリジナルパーツ

BOOSTER:ARGYROS/S

## GENERATOR: LINSTANT/G

### 搭載武装

ARM WEAPON (↓は変更後の名前。この名前で呼び出す)

「スナイパーライフル」超遠距離武器。射程の長さが特徴。

061ABSR (BFF社製) ↓スナイパー

「マシンガン」中々距離武器。大量の弾丸をばらまき弾幕を形成する。

03・MOTORCOBRA (レイレナード製) ↓マシンガン

「ショットガン」至近距離武器。散弾が全てにヒットすれば甚大な被害を及ぼす。

SAMPAGUITA (アルゼブラ製) ↓ショットガン

「バズーカ」遠々距離武器。一撃の火力が高い。

GANO1・SS・WBP (GA社製) ↓神バズ

GANO2・NSS・WBS (GA社製) ↓散バズ

「グレネード」遠々距離武器。弾速が遅いが爆発により広範囲に被害を及ぼす。

SAKUNAMI (有澤重工製)

WADOU (有澤重工製)

注・SAKUNAMIの方

が発射速度に優れる。

「レーザーライフル」遠距離武器。バリア等の貫通力に優れる。EN武器の為弾切れが無い。

LR01ANTARES(インテリオル製)↓レザライ

HLR01CANOPUS(インテリオル製)↓カノサワ 注:レザライの方が

射程が長い。

「プラズマライフル」中距離武器。着弾時に付近にECMが発生する。

FLURORITE(トラス製)↓プラズマ

「パイルバンカー」超至近距離武器。当たればどんな相手でも一撃もしくは瀕死に追いやる。

KIKU(アルゼブラ製)↓とっつき

「ドーザー」ネタ武器。解体、土木工事になら使えるかもしれない。

GANO1SSWD(GA社製)↓ドーザー

「レーザーブレード」近距離武器。一撃の威力が高い。

LBELTANIN(インテリオル製)↓レザブレ

07・MOONLIGHT(レイレナード製)↓月光

SHOLDER WEAPON(フレア等もここに含まれる。両肩武器とあるものは使用時他の背部)

(武器を使用出来なくなる)

「特殊兵装」非殺傷の武器等。

FSS・53(テクノクライト製)↓衝撃ミサイル

攻撃力はほぼ無い。着弾すると強い衝撃を発生させどんな相手でも足止めが出来る。

09・FLICKER(レイレナード製)↓フラッシュロケット

着弾時に強い光と音を放つ。いわゆるスタングレネード

「フレア」ミサイルに対する罠。自分のミサイルにも効くので扱いには注意が必要。

GALLATIN02(MSAC製)↓フレア

「ECM」敵のレーダー等を使えなくする。地面に撃ち込んで使うので壊されると効果が切れる

051ANEM(BFF社製)↓ECM

063ANEM(BFF社製)↓隠れ蓑

普通のECMと異なり相手のレーダーに映らなくなる。ノイズが出ないので展開がバレにくく不意打ちに最適。

「ミサイル」遠距離武器。ロックオンすることで敵を追尾する。

SALINE05(MSAC社製)↓分裂ミサイル

いわゆるWGミサイル。着弾前に8つに分裂する。面制圧が可能。

DEARBORN03(MSAC社製)↓VTFミサイル

近接信管を備えたミサイル

BIGSIoux(MSAC社製)↓核

バカ火力のミサイル。ミサイルなのでグレネードと違い誘導が出来る。そのため射線が通って無くても使用できる。なお誘導システムの都合上超遠距離でないと使えない。

BMO5LAMIA(インテリオル製)↓ASミサイル

ロックオンしなくても使える。取り敢えずばらまいておけばいい。ネックは一発

辺りの値段。

「ロケット」超遠距離〜中距離武器。ロックオンが出来ず命中精度は極めて低い。

遠距離であるほど威力が上がる。固定目標に対しては有効。

CP・51(テクノクラート製)↓ロケット

「スナイパーキャノン」超遠距離武器。スナイパーライフルと違い火力が高く着弾時には強い衝撃を発生させる

O61ANSC(BFF社製)↓スナイパーキャノン

「ガトリングキャノン」中距離武器。一発辺りの威力が高いガトリングガン。

GANO1・SS・GC(GA社製)↓ガトリングキャノン 両肩武器

「スラッグガン」近距離武器。大型の散弾を使用し、手持ちのショットガンより威力が高い。

KAMAL(アルゼブラ製)↓スラッグガン

「グレネードキャノン」遠距離〜中距離武器。搭載している実弾兵器の中でも別格の威力を誇

る。

OGOTO (有澤重工製)

YAMAGA (有澤重工製) 注: OGOTOの方が発射速度に優れる。

OIGAMI (有澤重工製) 他の兵器と別格の破壊力。その分反動も大きくR

AIDEN'Lでない」と

まともに運用できない。折り畳み式のため、展開、収納に時間

がか

かる。両肩武器

「レールキャノン」遠距離武器。スナイパーキャノンより弾速が速く、射程に劣る。凄まじい弾速とほぼ無音の為回避は困難を極める。

RC01PHACT (インテリオル製) ↓レールキャノン

「レーザーキャノン」威力の上があったレーザーライフル。

EC0307AB (オーメル社製) ↓破壊天使砲 両肩武器

HLC09ACRUX (インテリオル製) ↓少佐砲

注: 破壊天使砲の

方が負荷が少ない。

「プラズマキャノン」中距離武器。EN属性のグレネード。着弾時にはECMを撒き散らす。

SULTAN(アクアビット社製)↓プラズマキャノン

「レーダー」感知可能範囲を広げる。ECM耐性が無いとECM展開時には役に立たなくなる。

061ANR(BFF社製)↓狙撃レーダー 注:主に超遠距離狙撃で使用さ

れる。通常のアリーナではオーバースペックの為使われない。

サポートAI

ACで言うところのオペレーターの役割。残弾や機体の被害報告、状況に応じて説明をしてくれたりする。音声を変更できる。音声は企業連の人間が吹き込んでる。デフォルトの男、女に加え男(主任)や女(師匠)などがある。

GA(グレネードアーマー)

いわゆるアサルトアーマーの実弾版。機体の側面に仕込んだグレネードを起爆し周囲を爆炎で包み込む。アサルトアーマーと違い使用すると自分にも大ダメージが入る。外すとダメージだけ受けるので使用には細心の注意が必要。なおSEが少な

い時に使うと自滅する。

V O B (ヴァンガード・オーバード・ブースト)

クーガーが開発した超大型追加ブースター。戦闘時にはページするため移動用である。どんな重たい機体でも1200kmという超高速で移動が可能。使用には専用のカタパルトが必要となり、方向転換も極めて困難。

QB (クイックブースト)

独特のドヒャアという音と共に機体を前後左右に少しだけ動かせるブースター。移動距離が短いので基本は回避に使用される。コジマを使わないモデルも存在する。

ACの武装一覧見ながら組むの楽しいですね。レギュは1.40です。未プレイなので

「こんなアセンはあり得ない」等ありましたらアドバイス下さい。  
基本はA C f Aの武装のみなのでOW等は登場しません。



## 格納庫での出会い

遂にメインヒロイン登場です。ちなみに筆者の推しでもあります。

気がついたけどアンケートの意味がほぼ無い。申し訳ない。書くのに慣れたのか易々と2000文字を越えるようになってしまった。取り敢えずは多くても2500程度に納めるようにします。アンケート見た限り多すぎる文章を好まない人多そうなので。

機体の紹介だけではつまらないでしょうし。今日は二本目を投稿します。

ヌッフッフ。ニヤニヤが止まらねえ！

今俺はISの格納庫にいる。ここではISを展開し整備等ができる。勉強の方も一段落ついたこともあり遂にここを使える機会が訪れたのだ。

「やはり画面上ではなく実際に見るのがいいな。武装も持たせられるし最高だ！」皆さんも経験があるでしょう。自分の組んだ機体を眺めると自然と笑みがこ

ぼれるあれです。

「武器呼び出しも異常無し。ただ想定外だったのは、、、」

『あーっ！あーっ！、、、えっとお聞こえてるかな？』

このAI音声である。

「これの音声吹き込んだの主任だろ！男(主任)ってそういうことか！」

主任。それは企業連の武装考案部門に所属する悪い意味で有名な人物だ。能力は高いし、真剣モードは頼りになるのだが、いかんせん真剣ではないときがうざい、やかましい。それでいて優秀なのがたちが悪い。廃材の柱にブースター付けて殴ったら強いんじゃないかね？とか言っている。ちなみにこの案は検討中だという。却下しろよ！

「でも、なんとというかクセになる音声だな。いいかも」

その後俺は存分に機体を愛でた後、門限に気がつきISを片付け格納庫を出た。

「しかし企業連並みの設備だ。格納庫がこんなにあるとは。んっ？」

廊下にずらっと並ぶ格納庫のドアの一つから光が漏れていた。

「誰だ？もう出ないと寮の門限に間に合わんど」

かちやり

ドアを開けるとそこには一人の少女がディスプレイとにらめっこしていた。集中しているようでこちらに気がつく様子がない。

「あの水色の髪色って確かうちのクラスの、、、誰だっけ?」

『彼女は更識簪。日本の代表候補生だよ。あれねえ自己紹介、聞いてなかったのかな?』

いちいち腹立つ物言いだなおい。まるで本人が目の前にいるみたいだ。まあそんなことは置いといて、

「うーん。俺が女子なら「どうしたのっ?」って気軽に言えるけどな。異性相手は話しかけにくい。どうしよっか。そうだっ!」

おもむろに鞆から取り出したのは来る途中に自販機で買った方がいいが機体に夢中で飲み忘れていたミルクティー

気がつかないようだし側に置いておこう。邪魔したら悪いし俺はクールに去るぜ。

## 簪 side

今日も徹夜になりそうだ。専用機を自分で組み始めてしばらく経つけども終わりが見えない。帰らない日が続いたせいで寮監にはもうなにも言われなくなった。なんとしてもタッグトーナメントまでには完成させなくては。一息ついて外を見ると真っ暗だった。

「もうこんな時間。んっ？」

彼女の目に飛び込んだのは側に置かれた未開封のミルクティー

「ドア、空いてたのかな。これって飲んでくれって事かな？そういうことだよね。側に置いてあるし」

一口飲むと甘い味が口に広がる。

「よしっもう少し頑張ろう」

彼女は誰かもわからないミルクティーをくれた人に感謝しつつ作業に戻るのだ  
た。

あの日から数日経った。あれから毎日格納庫に行っているがいつもあの子がい  
た。気になったからちよつと企業連で調べてもらおうよう頼んだ。国の代表候補生な  
のにどうしてあんなことをしているのか。そしたらとんでもないことが発覚した。

織斑一夏見つかる

←

彼女のISを作成していた倉持技研がそれをほったらかして白式の研究をする。

←

白式が完成した時には簪は既に作りかけの自分の専用機を受け取り自分で完成させようとしていた

←

それに加え彼女の姉は自分で IS を組んでおりそれに対する対抗心もあって止めるに止められない状況

つまり諸悪の根元は倉持技研である。百歩譲って白式の研究はいい。でもそれは今やってる事に余裕があつたらすることだろうに。しかも日本の代表候補生をほつたらかしとは、そんなことしても問題にならんとは。さすがは日本のお抱え研究所、いい身分だな。たかがよく売れる量産機を作れたからと調子にのって、技術者の風上にも置けん！その上報告によれば白式は外部の何者かに提供され詳しいことは全てブラックボックスのままだと言う。彼女の IS をほつたらかした上何も成果が無いとは！、、、いかんいかん感情的になつてしまった。

「しかしこの問題は彼女の家族問題にも関わってくる。更識と言えば日本の対暗部用暗部だと聞く。下手に関与しない方が良さそうだな。でも見捨てるのもなあ。あれだと出来上がるまでに数年はかかるぞ。それまでに体調を崩してもしたら、、、よ

し。お人好しを装って手伝うか。彼女は授業には出ているから彼女より先に格納庫に行けば話が出るやもしれん」

その日俺は授業が終わると大急ぎで格納庫に向かった。彼女の使う格納庫の前に着いたときまだ誰もいなかった。

「まずは第一関門クリアだな。後はどう話をするか、最近格納庫に遅くまでいるようだけどどうしたの？、これでいこう。クラスメイトを気遣う事にはなんの不審点も無いしな」

おや、来たようだ。相変わらずとても目立つ髪色してるな。落ち着いて、落ちて着いて、よしっいつでも来い！

「あなたは、私の格納庫に何か用事？」

落ち着いて、自然体だ。自然体でいこう。下手に演技はせずに、最近格納庫に籠りっぱなしみたいだけど、なんかあったん？」

ヴァーリーリー三なんて馴れ馴れしい言い方なんだ！こいつキモいと思われんかな？もしキモいとか言われたらこれからの学園生活があああ！よし、こんなときは素数だ。1、2、3、5、6、8、駄目だああああ！

「それは、」

あれっ話してくれるの？

---

主人公はテストパイロットという都合上気軽に企業連と連絡が取れます。通信回線は暗号化されていて重要機密も喋るときに聞かれなければ周囲に漏れませぬ。

## お悩み相談

簪っていいですよ。大量のミサイルに薙刀、荷電粒子砲。まさしくロマン！それでいて特撮大好きアニメ大好き、最高ですね！

「それは、、」

彼女の口から語られたのは報告と同じ一夏のせいで専用機の開発が打ち切られたこと。家の事情で姉と対立しており一人でISを完成させた姉に対抗して一人でISを作っているということだった。しかし、、

「聞いておいて言うのもあれだけど、どうして話してくれたんだ？聞いた限りだと気楽に聞いていい話じゃなかったみたいだけど、、」

「誰かに話して楽になりたかったし、それとあなたには憧れがあるから」  
憧れ!?俺に!?だが、、

「だが俺に憧れる要素なんてあったか？言っちゃなんだがISがなければただの一

一般人だぞ。俺は、、」

「企業連の代表が一般人なわけないでしょ。それに企業連はカッコいいし、何よりクラス対抗戦の時の戦いっぷり凄く感動したんだよ。だって代表候補生に勝っちゃったんだから」

今この子はなんと言った？企業連がカッコイイ？戦いっぷりに感動??、先生。どうやら世の中捨てたもんじゃ無さそうです。んっ？

彼女の鞆には見慣れた玉ねぎトのようなロボットットのキーホルダーが付いていた。なるほど想像以上に毒されているようだ。

☒説明しよう！トールスマンとは暇を持って余した企業連の一部が作ったアニメである。インパクトのある主人公を作ろうとした結果凶案だけ存在するトールスマン製IS、通称トールスマンを起用した。自分が正義のために戦う度に周りが有毒物質で侵される事に葛藤しつつ正義のために戦う物語である。敵には有毒物質に弱いガッチガチのタンクやよく水没するもの。後は光がしょっちゅう逆流するものがある☒

「企業連所属としては嬉しい限りだ。ところであんな話を聞いたら手伝いたくなっ

た。君は一人で作ることにこだわっているようだがもし良ければ手伝わせてくれな  
いか？もちろん物を運んだりといった雑務で構わない」

「その提案は嬉しいけど有澤君に迷惑かからない？」

「もちろんさ。勉強も一段落したし何か別の事をしたいと思ってたんだ」

「なら、、お願い！手伝ってください！」

「分かった。よろしく更識さん」

こうして俺は彼女、、更識さんのIS製作を手伝う事になった。

「更識さんって呼ばないで。姉と比べられているようで嫌だから。私のことは簪っ  
て呼んで」

訂正、簪さんのIS製作を手伝うことになった。どうやら背中のみ사일制御に  
手を焼いているようだ。毎日苦戦してるのはあれか。あれさえ何とかなれば完成は  
間近だな。差し出がましいかもしれないが手を貸すでしょう。

「もしかしてみ사일制御にてこずってる？」

「えっ分かるの？」

「ああ。既存のパーツの組み合わせとはいえ俺も自分でISを組んだからな。こう

見えてもある程度のプログラミングとかも出来るぞ」

「ならアドバイスくれるかな？」

「簡単だ。そんなプログラム全部消してミサイル全てASミサイルにすればいい」

「ちょっとそれは予算が、、」

デスヨネー。企業連のIS乗りであるエイプールも武装が全てASミサイルのため年がら年中貧乏していると聞くし。俺もプログラミングできるとはいえ少しかじった程度。理解は出来るが組むとなると、それにこのマルチロックオンシステムはこのISの一番重要なところだと言うし、ならこれしかないか

「これは提案なんだがもし良ければ企業連に専用機の作成を依頼しないか？ やつらならマルチロックオンなんざ片手間で3日もあれば作れそうなやつらがいるぞ」

「でもお姉ちゃんは誰にも頼らず一人で専用機を作ったんだよ？ それにこれでも日本の代表候補生なんだよ。企業連に頼むのは無理があるんじゃないか。」

「あのな常識的に考えてこの世で専用機を全て一人で作れる人なんざ東博士くらいだろう。大方妹に良いところ見せたくて見栄を張ったんじゃないか？ それに日本には倉持技研に見捨てられた為って言えばいいだろう。企業連相手なら国も文句

は言えんよ。何よりあの一件のあと専用機の作成を再開しますってあったか？」

「いや、なかった。連絡しても今そちらに割ける人員がいませんって」

「なら理由としては十分さ。どうだろう」

「もし可能なら企業連に頼んでいいかな？」

「企業連には才能をもて余している暇人どもが大勢いるから十中八九大丈夫だと思う」

「分かった。じゃあお願いします」

「任せとけ。といっても作るのは俺じゃないけどな。取り敢えずは寝てください。見て分かるほどに睡眠不足が響いてますよ」

「ホントに!?分かった。ありがとう」

部屋に帰った俺は企業連に電話を掛けた

「すまないが今そこにISを一機作れるリソースある？ 次の試合までには完成させたいのだが」

「ありますとも。以前の調べ物から察するに日本の代表候補生の専用機ですか？」

「ああ。話が早くて助かる」

「しかしどうしてこんな急に、、はっ！ もしや、、彼女に惚れましたかー。ニヤニヤ」

「そんなことはあり得ない！ 企業連のファンだからだ！」

「ムキにならなくてもいいですよ。分かりました。企業連にいる暇人どもに呼び掛けます。いつなら受け渡しに来られますか？」

「そこは本人と相談する。ちなみに今彼女のISは大体出来てて後はミサイル制御のマルチロックオンシステムとスラスタ系だそうだがどの位かかる？」

「その程度なら2日もかかりません」

「分かった。また連絡する」

ふう。何とかかなりそうだ。

しかしどうして俺は簪のためにここまでするのだろう。最初はここまで関与する気は無かったのに、

「惚れた、のかな。いや、有り得んか」

この気持ちは何なのかが分かるにはもう少し時間がかかりそうだ。

始めてルビをふってみました。面白いですなこれ。ちなみにこの時点では簪は惚れていません。少し気にしている程度です。主人公は自分の抱いている気持ちに気がついていません。

ISを個人で作るのって無理があると思うんです。新設計の専用機ならなおさら。素人が手を貸して変になっても困るので簪のISは企業連に任せました。こうしないと専用機が完成するのが卒業前とかになりそうで。て言うか原作ヤバイですよ。

整備課の生徒達で専用機を組んでしまうとは。

## 企業連。そこは変態どもの巣窟

簪の専用機完成回です。企業連の手にかかれば完成間近の専用機一機完成させるのはわけないようです。

「ようこそ！企業連へ。歓迎しよう。盛大にな！」

俺は簪さんと共に土日を使って企業連に来ていた。もちろん簪さんの専用機完成のために。外泊届けは出しておいたから明日までに帰ればいい。

「さて。早速だがISを見せてくれ。既にマルチロックオンシステムは完成している。報告だと一度に100の目標をロックオン出来るそうだがこれでいいかな？」

「100！本当に？すごい、ええ。完璧です。ありがとうございます」

「それは良かった。午前中にスラスタ一系も完成させてしまうから午後からテストをしよう。それでいいかな？」

「午前中に？そんなに速く？、、分かりました」

そういうと簪さんは指にはめていた専用機を渡した。

「私の打鉄式。よろしくお願いします」

「受け取った。任せてくれ、よおおおおおし！腕が鳴るぞおおおお！野郎共出番じゃあああああああ！」

受けとるや絶叫しながら奥へと走り去ってしまった。

「ねえ有澤君。企業連の人って皆あなの？」

「違うよ、って否定出来たらいいんだけどね。9割はあんな人たちだよ。悪い人達ではないから安心して。取り敢えずはやることもないし午後まで用意された部屋で休むとしよう」

「そうしましう」



## 簪 side

なんかヤバい人に式を預けたあと用意された部屋にいくとそこは二人部屋だった。

えっこれって相部屋ってこと、、だよ。緊張するなあ。ん？いきなり有澤君が置いてあった紙を破り捨てて。紙に何を書いてあったんだろう？ビリビリで読めないや。うーん昼まで暇だしどうしようかな。おおこれはトールスマンのDVD！しかもOVAもある。これは見なくては。確か有澤君ってロマン好きだったよね。

「ねえこの部屋のテレビの下にトールスマンのDVDが入ってるんだけど時間まで一緒に見ない？」

「いいとも！」

やった。よーし専用機開発で見逃してた部分全部見るぞお。有澤君のキラキラした目、可愛いなあ。お姉ちゃんが言ってたっけ。男はいつまでも子供だって。こんなオタクの私でも有澤君は受け入れてくれるかなあ？違ったら嫌だしあっちから来るまでは我慢しよう。あっこれは！

### 隆彦 side

まさか、トーラスマンが関わるところも人が変わるとは。でもなんか心地いいな。はっちゃけているときの笑顔が、、いかんいかん。煩惱退散煩惱退散。相手から明確なアプローチがあるまではお預けだ。女子高生っていうのは話が合えば誰でもこんな会話をするんだ。でもなあ、、おっこいつは！

「灰も残さず消えろ！アサルトキャノン！あっ」

気まずいな。必殺技のコールで被ってしまった。キモいとは、、思われないよな。思うならこんなアニメ見ないしな。なんか他人の前でこんなことが出来るなん

て夢みたいだ。本当にこんな俺と話が合う女子がいるなんて。

お互い多少の違いはあれどほぼ同じことを考えていた。

午後

「昼食は済ませたな？ではテストだ。まずは簪さん。あなたのISをお返しします。どうぞ」

「ありがとうございます。お帰りなさい。打鉄式式」

そういうと彼女は式式を指にはめた。その後テスト用のアリーナへと案内された。

「見るがいい！これが企業連の誇るテスト用のアリーナだ！壁や天井はとっつい

ても壊れないぞ！」

その広さたるや学園のアリーナの4倍近い広さだった。

「ではまず起動してくれ。もし異常があったらすぐに教えてくれ」

「分かりました、おいで。打鉄式式」

そこには天使がいた。初めて見た簪さんの専用機は薄い水色を基調にした美しいデザイン。機動性を重視したためか装甲は先代の打鉄より少ない。薙刀を使うための彼女の腕は普通のISと違い完全に露出していた。腰には射撃兵器であろう筒。背部にはバカでかいミサイルコンテナ、、んっ？

「なああのミサイルコンテナって同時に何発発射出来るの？」

「一度に両方合わせて32発です」

「なあ。マルチロックオンシステムさ、何発誘導出来るっけ？」

「一度に100発です」

「それってオーバースペック過ぎて無駄なんじゃ、、」

「君のような勘のいいガキは嫌いだよ。何てな！言われて見ればそうだな！大きさと重さそのままにどこまで行けるか試してたらああなった。後悔はない！」

「やっぱバカだろお前ら！」

やはり企業連にはマトモなやつはいなかった。奴等はやり始めたらとことんどこまでも突っ走るからなあ。そこがいいんだけどね。

「すごいよこれ！思った通りに動くしタイムラグもほとんど無い！あの、ミサイル撃つてもいいですか？」

「どうぞどうぞ思う存分撃つてくれたまえ。ターゲットはそうだな。ラファールでいこう。小手調べに10機ばかり行くぞお！」

そういうとアリーナに10機のラファールの立体映像が現れた。

「数は多いけどマルチロックオンなら！」

ピピピピピピピピピ

シュババババババババババ！

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！ ↑ここまで5秒

「すごい火力。それにロックオンも速くて正確。誘導性能も申し分無い。、、これ本当に貰っていいんですか？」

「いいとも。なんたって隆彦君の彼女さんだしね」

「えっ違いますよ」

「そこでハモるのか。まあなんだ。応援してるよ」

このあと羽目を外した簪は夜まで暴れ通すのだった。その結果

「しんどい」

「そりゃそうだ。専用機が完成して嬉しいのは分かるが何時間もぶっ続けでミサイル撃って薙刀振るってたらそうなるよ。大丈夫？」

「大丈夫。多分。ただすごくねむい。私はちよつと落ちるね。がくり」

「せめて風呂に入って着替えてから寝なさいな。服がシワになるでしょ」

「んー。分かった」

「フラフラしてっぞおい。気を付けろよ」

何とか風呂には入ったか。さすがに脱がせて入らせてなんてことは出来ないしよかったですよ。ん？さっきからシャワーが流れっぱなしだぞ？いくらなんでも長くないか？行ってみよう。どれどれ、水音に紛れてこれは、寝息!?俺は慌ててドアを叩きながら

「おいこら！起きろ！せめて風呂から出て着替えてからベッドで寝ろ！風呂で寝

たら風邪ひくぞ！」

「わたし。ねてないもん」

「寝てる人は皆そういうの！」

ラブコメ難しい！なるべく現実にあるような展開を心がけていますが不自然な点があればご都合展開として見逃して下さい。なにぶん見るのは好きですが書くのは苦手なもので。

簪のメイン武器であるミサイルは主人公の使うミサイルを軽量機でも使えるスペックにデチューンしたものです。デチューンといっても元が強いので量産機程度なら数発で撃破が可能。発射本数に対してオーバースペックのロックオンシステム

なので普段はその性能を持って余しています。



## 理性との戦い

生徒会長って学園最強って言ってますけどブリュンヒルデには勝てないでしょうし学園最強ではなく生徒最強って言う方がよいのではと思いました。

増え行くUAと感想を見るたびにモチベーションがどんどん上がっていきます。日曜日なので二本、12時と18時に投稿します。

今俺は窮地に陥っている。というの、

くかー。すぴー。

可愛い天使善さんがベッドで寝ているのだ。しかもあろうことかISスーツ姿で。いやね。知識としては知ってはいたんだ。肌触りがいいとかでISスーツを下着代わりに着る人がいるってことをね。たださあ同室に男がいるのにその格好で寝ますか？

普通。多分睡魔が勝ってそんなこと気にする間もなく寝たんだろうけどさ。こう、なんとというか、ボディラインとかが丸見えでね、年頃の男の子には刺激が強いと言いますかなんと言いますか。手を出したら彼女の家柄的に消されそうだから手は出さないけどさ。でもそんなことはどうでもいい。目下の問題は、、、、

「どこで寝よう？」

彼女の寝てるベッドは論外。多分理性が持たない。布団を持ってきてもらおうにもこんな部屋に案内するやつらだ、持ってくるはずがない。仕方ないか。

そう考えた俺は一人寂しく硬い床で薄い膝掛けを被って眠るのだった。空調が効いているのが救いだっただ。

翌日

「ヴァー！体の節々が痛い！」

翌日俺は5時に目覚めた。眠りが浅かったのだろう。二度寝する気にもなれない微妙な時間に起きた俺は顔を洗って紅茶を淹れた。朝日を眺めながらティータイムと洒落混んでいると

「んーっ？」

「起きた？」

簪は起きると自分の格好と俺を交互に見て顔を赤くした。

「誤解が無いように言っておくと昨晚俺はその床で寝たから。決して添い寝などはしていないから。神に誓おう」

「そこまでしなくてもいいよ。有澤君ってそういうことする人じゃ無いでしょ。なんかごめんなさい。昨晚は寝ぼけてたのかほとんど記憶がなくて、」

「構わないさ。さて、起きたなら着替えて顔を洗って。朝ごはん食べに行きましょう」

食堂では企業連の連中に「昨晚はどうでしたか？ニヤニヤ。プレゼント(ダブルベッド)気に入ってくれたかな？」等と囁し立てられた。俺は一際大声でギャハハと笑う恐らく首謀者である主任の顔を殴っておいた。ちなみに企業連で何かトラブルが起きたらまずは主任を疑えというほどには彼はトラブルメーカーだ。真剣な時はかっこいいのに。

「おお。なぜ俺が首謀者だと分かったのかは聞かないでおこう。さて。君達は今日で帰るそうだな」

「ああ。今日の門限までには寮に戻ってないといけない」

「学園まで帰りは企業連のヘリで送るからさ。俺たちと模擬戦していかない？」

「そういえばお前は戦えばその人の本性が分かるとか何とか言ってたな。簪さんの専用機はシミュレーターに入ってるのか？」

「愚問だな。昨日のうちに済ませておいた。上の連中にはヘリの使用もシミュレーターの使用も許可はとってある。準備は万端だ」

「ならやるか。昨晚の恨み晴らしてやる！」

戦い終わって日が暮れて。俺は簪と寮の前に立っていた。

「ギリギリ門限間に合ったな。主任の奴はっちゃけやがって」

「私は楽しかったよ。飽和ミサイル攻撃とかやってみようかな？とつつきもいいかな？」

半日で随分企業連に染まったらしい。シミュレーターとはいえ挙動は現実 realism に忠実。実用性度外視の企業連のネタ機体が代表候補生の自分を何度も追い詰めてきたのが堪えたのだろう。

「俺としてはあんなやつらを尊敬しないでほしいけどね。さて部屋は別だしここで別れるか」

「そうね。今日は本当にありがとう。専用機が完成して、企業連の方々とも話ができてとっても楽しかった。今でも実感が沸かなくて夢みたい、、、そうだ！連絡先

交換しとかなない？都合がいいときに一緒にアニメ見たりフィギュア観賞したりしたいんだけど？」

「本当か!?願ってもない。貴重な同士だからな。ほれっ」

「ありがとう。それじゃあまた明日ね。お休みなさい」

「お休みー」

俺は携帯の電話帳に加わった更識簪の名前を見て気分が高揚するのを実感しつつ部屋に向かうのだった。

部屋に戻りノックをすると返事が無かった。どうやら一夏の奴またどこか女子部屋に入り浸ってるらしいな。いや、彼の性格的に引っ張られて行った線が濃厚か。

ガチャ

「私にしますか？私にしますか？それとも、ワタシ？」

「選択肢ねえじゃねえか！」

そこには痴女がいた

「どちら様ですか？何の用ですか？その目立つ髪色と目の色からして簪さんのお姉さんでしょうか？このタイミングってことは企業連に簪さんを連れていったことでしょうか？」

「反応無しか、つまんない。あなた、察しがいいのね。そうよ。ここに来たのは他にもない。簪ちゃんと二人つきりで何をしてたのよ!? 答えによっては容赦はしないわ」

俺はその瞬間察した。こいつ、シスコんだと。

「ご安心を。先輩が心配するようなことは起きていません」

「信じられないわよ！さっきだって私より仲良さそうにして！挙げ句の果てに連絡先も交換して！」

「なぜそれを知っているんですか？盗み見ですか？ドン引きますよ!？」

「そんな人聞きの悪い！隠密式後方警戒任務よ」

「それってただのストーク」

「だまらっしゃい！生徒会長権限って知ってる？」

「先輩。職権乱用ってご存じです？」

俺と先輩は暫くそのまま睨み合った。

先に折れたのは先輩だった。

「はあ。ごめんね熱くなっちゃって。あの子はあまり人と仲良くすることが無いから不安になったのよ。これからも仲良くしてあげてね。専用機の件はありがとう。あの子私に対抗して一人で専用機を作るだなんて言ってる。見栄を張って一人で作っただなんて言わなければよかった。そういえば自己紹介がまだだったわね。私は更識楯無。この学園最強の生徒会長よ」

「さつき生徒会長権限とか言う言葉が出たと思ったら生徒会長だったんですね。これは失礼しました」

「いいのいいの。気にしないで。それじゃあ私はこの辺で失礼するわ。あっ最後に一言」

そういうと彼女の纏う空気が変わった。

「簪ちゃんを泣かせたら絶対に許さないからそのつもりで」

そう言い残し彼女は去っていった。

「ありやあ想像以上のシスコンだな。ただ姉の方は嫌ってないってことか。となると簪さんの被害妄想？ まああの様子だと気には掛けているが直接会うのは、っ、っと感じか。仲違いしてるの見るのもなんか気分悪いしお節介かもだが話し合いの場を作ってやるなりして姉妹仲を修復させたいな」

どんどん簪に関わっていく主人公だった。最初のなるべく関与しないでおこうという考えは既にどこかに行っていた。彼は目を背けているが少しずつ彼女に惹かれていたのであった。

2500文字を越えてしまった。軽々とこれだけ書けるようになって慣れてきたのかなと思う今日この頃です。一話目なんかは1500文字がやっとだったのに。主任を登場させましたが、ACfA以外からのキャラは彼だけになる予定です。原作ではAI説とか囁かれています、ここでは人間として登場です。

## タッグ戦闘訓練

大爆発もロマンですが、画面を埋め尽くさんばかりのミサイルもいいですよ。戦闘時に登場人物が3人以上のときは

○○「ooooooooooooo」

という風になります。混乱しますからね。

そろそろタッグにヒロインは？ タッグ付けようかな？

「皆さんご存じだと思いますが、二週間後に学年別タッグトーナメントがあります。ペアを決めて配ったプリントを記入したら今週中に提出してくださいね」  
配られたプリントには名前を書く欄が2つと専用機の有無を記載する欄があった。

誰と組もうかな？ 皆はほぼ決まってるみたいだし。

周りを見回せば大半の生徒が「一緒に組もうよー」等と言ってペアを作っていた。

珍しいとはいえ俺は男子。女子のコミニティーには入れないのだ。

帰ったら簪さんを誘ってみるか。あの人位しか組んでくれそうな人いないし。

そう考え部屋に戻った俺は携帯を開いた。するとそこには一件のメールが届いていた。

☒有澤君。もしよかったら私と組んでくれないかな？☒

☒喜んで！☒

俺は即答した。まさかあちらから誘ってきてくれるとは嬉しい限りだ。知らない人と組むことにならなくて本当によかった。

☒じゃあさ。作戦会議とかしたいから明日の放課後に格納庫に来てくれない？  
そこでプリントも書いてしまおうよ☒

☒りょーかい☒

ふう。これで安心だな。よかったよかったペアが決まって。下手したらランダムで知らない人と組まされたかもしれないし。

『企業連からメールですよ』

何だ？企業連からメールだなんて珍しい。開いてくれ。

『はいはい』

目の前に展開されたディスプレイにはある報告が載っていた。これを使えばタッグトーナメント、かなり有利に進められるぞ。しかし何でこの事知ってるんだ。

翌日の放課後。格納庫にて

「遅くなってすまない。待たせたかな？」

「ううん。私も今来たところだから」

「それはよかった。早速だがプリントをさっさと記入してしまおう。俺の名前は書いてあるからそっちの名前を書いてくれ」

「分かった、これでよし。じゃあ作戦を決めようよ。といっても有澤君一人でど

うにかなりそうだけど」

「その事なんだが昨日企業連から面白い報告が来てな。これを見てくれ」

そこに書いてあったのは

☒どーも。企業連武装開発部門です。先日作成した更識さんのマルチロックオンシステムのことなんですが、性能を持って余していましたよね？そこで設定すれば他人のミサイルも誘導できるアップデートを送っておきました。ダウンロードして使って下さい。どうせ更識さんとペア組んだんでしょう？有効に使って下さい。☒「ねえアップデートっていうのは？」

「このメールに添付されてた。ISを使ったメールって便利だよなこううとき。ほれっ」

「ありがとう。ねえこれがあったら、、」

「ああ。俺の大量のミサイル制御をそっちに任せられる。これなら腕武器と背部武器を一度に使えそうだ」

「有澤君ってミサイルは何発撃てるの？」

「一度に撃てるのは両肩にミサイルコンテナ積んで本数重視の低火力ミサイル使っ

て70発ってところかな？」

「流石はタンクだね。私の倍以上じゃん。ならいけるかな？」

「よし。じゃあこれでいこう。俺と簪さんで初手ミサイルぶっぱ。俺はミサイルばら蒔きながら前衛。簪さんは後衛でミサイル誘導お願いしていいかな？」

「凄く力任せの脳筋戦法だけどいいと思う。そういうのロマンたっぷり好きだよ。私」

「ただ、終盤までこの手は使わないでおこう。奥の手って感じでカッコいいじゃん。序盤は簪さんが薙刀で前衛。俺が後衛で火力支援って形でいいかな？」

「いいと思う。奥の手ってなんか「こんなこともあるのか」とって感じでいいね」「激しく同意する。そうと決まれば実際に連携の練習するか。アリーナの予約取れるかな？出来れば奥の手はこっそり練習したいんだが、、」

「企業連のアリーナは？ヘリで送ってもらったら日帰りで行けるんじゃない？」

「確かに！では帰ったら連絡しておこう。行くのはこの土曜日と次の土曜日の2日でもいいかな？」

「それでいいよ。2日あれば十分だよ」

帰った俺は早速企業連に連絡した。

「今週と来週の土曜日にそのアリーナでタッグトーナメントの練習がしたいんだ  
が使えるか？」

「はい。使えますよ。ところで結局ペアは誰と？」

「お前らの予想通り簪さんとだよ」

「なるほど！やはり彼女さんでしたか」

「違うと言っているだろ！」

そして土曜日。俺は再び簪さんと共に企業連にいた。出迎えは主任だった。

「やあやあお似合いの夫h」

ドガッ！

一言目でもんでもないことを言いやがったこいつは。取り敢えず殴っておいた。

「イテテ。さて、ようこそ企業連へ。歓迎しよう。盛大にな」

「それ毎回やるのか？」

「だってカッコいいじゃん」

「なら仕方ないな」

その後俺たちはアリーナへと移動した。

「マルチロックオンシステムの具合も見たいから我々も見学するね」

そういった開発部門と野次馬が集まりアリーナには大勢の観客が集まった。お前

ら仕事はどうした？暇人かよ。

「では早速始めよう。タッグトーナメントということで相手もタッグで用意した。入ってくれ」

そう言った後アリーナに入ってきたのは、赤い四脚のISと緑色の重二脚だった。「初めまして。今回お相手をするメリーゲートよ。よろしく」

「レッドラムよ。精々あたし達を楽しませなさい。へなちよこだったらその機体に風穴開けてやるわ」

さてと。俺らも一丁行きますか！システム起動！

『メインシステム、パイロットデータの認証を開始、メインシステム！通常モードきどお！貴様になら、出来るはずだ。愛してるんだああああ！君たちをおおお、ギャハハハハハハ！』

非常にうるさいな。

準備は出来たようだな。では開始！

隆彦「取り敢えず通常の戦法で行こう。前衛は任せた！」

簪「分かった。任せて。援護よろしく」

隆彦「心得た！後方援護ならこいつだな。SAKUNAMI！」

ボグアアアアアン！

簪「グレネードは止めて！巻き込まれる！」

隆彦「すまん！爆発のこと忘れてた。後衛だとグレネード縛りか。ならカノサ

ワ！こいつな

ら！」

レッドラム「いちいち武器名叫ばないといけないなんて難儀なものね。初見なら

まだしも

あたし達にそれは悪手よ」

メリーゲート「ええ。その通りです。レッドラム。前衛お願いします」

レッドラム「言われなくても！ほらほらどうしたの？ちゃんと避けないと風穴

が開くわよ！」

レッドラムはショットガンとスラッグガンを撃ちながら薙刀のリーチギリギリで戦っていた。

簪「このままじゃまずい、有澤君！合図したら赤い方に向けてグレネード撃つて！」

隆彦「りょーかいだ！」

そういうと俺は右手にカノサワを持ったまま左手にWADOUを構えた。一発の火力がSAKUNAMIより高いために一撃重視のためである。

レッドラム「そんなこと言われてやらせると思ってるの？メリーゲート！」

メリーゲート「分かったこっちは任せて。これでどう？」

メリーゲートはグレネードを撃たせまいとKAZAWAに目掛けて大量のミサイルを打ち込んだ。ミサイルは全て直撃だった。しかし、

隆彦「はっはっは。きかんよそんなミサイル。」

彼のSEは5分の1も削れていなかった。

メリーゲート「流星は有澤タンク。実弾防御は桁外れね。というか私達誰もEN兵

器持って

無いから、あれっ。これ詰んでない？」

今になって絶望的な状況に気がつくメリーゲートだった。

---

長くなりすぎたのでここで区切ります。相手がガチタンでこっちの装備が実弾だ  
けだと絶望しますよね。



## 学年別タッグトーナメント

調子にのって3話目も仕上がったので投稿します。どうぞ。  
戦闘描写を書くとき文字数がヤバイです。

メリーゲート「レッドラム！あなた、とっつきかレザライ持ってない!？」

レッドラム「持つてるわけじゃないでしょ!！」

メリーゲート「じゃあKAZAWAの方どうやって仕留めるのよ!？」

レッドラム「あっ」

☒説明しよう！なぜ彼女らが絶望しているのか。それはガチタンは実弾相手には無類の強さを発揮するからだ。現に企業連内でのシミュレーター大会では彼の父親、有澤隆文は実弾相手には勝率80%を誇っているのだ。ただブレオンとかEN兵器マシマシにはめっっぽう弱い。とっつきにも弱い。要は実弾のみではガチタン相手

には相性が悪すぎるのである！ちなみに有澤隆文は企業連内ランキングは真ん中辺りの16位である☒

レッドラム「なら女の方を先に落として集中砲火で倒すわよ。いくらガチタンでもそれな

ら！」

隆彦「簪さん。奥の手試すよ。制御頼む」

簪「りょーかい！ミサイル制御コード受け取った！」

隆彦が相手が実弾しか装備してないと知ると奥の手であるミサイルカーニバルを使うことにした。

隆彦「こっからは俺が前衛だ！どこからでもかかってきやがれ！後衛倒したけりゃ俺の屍を

越えてゆけ！さて、ミサイルカーニバルです。派手に行きましょう」

メリーゲート「まるで姫を守るナイトね。いいわ。レッドラム！先にガチタン落とすわよ！」

ミサイルに留意して！」

レッドラム「言われなくとも！ってええ！なにこれ！」  
彼女らの目に飛び込んできたのは灰色の景色。大量のミサイルが辺り一面を多い  
尽くしていたのだ。

メリーゲート「これは想像以上の数ね。この数じゃフレアも役に立たない。ここ  
までか。

見事ね」

そう言った瞬間彼女らは爆炎に包まれた。

戦闘後

「ミサイルカーニバルは扱いが難しいな」

というのもあまりにも大量のミサイルを放ったためミサイル同士が接触し誘爆を起こしたのだ。とっさにミサイル制御をしている簪を庇ったからよかったものの後数秒遅かったら彼女も巻き込まれていたのだ。

「今日ほど自分の防御力を実感して感謝したことはない。やっぱりガチタンが最強か〜」

「ほう。ならばはわしと一対一でやるか？」

ピットに戻りぼやいた俺に話しかけてきたのはド・ス。テクノクラート所属で軽量機体に大型とっつきというガチタンの天敵である。

「とっつきは勘弁してください。あれ装甲が役に立たないんですから」

「知ってて言っとるんじゃ。お前の親父もわしには圧勝とはいかんけえのう。つまりは慢心するなっちゅうことじゃ。相手に恵まれつつたんじゃけえのう。今回は」

「分かりました。ちゃんと気を引き締めます」

「分かりやあそれでええ」

そう言ってド・スは去っていった。

「なんだかんだ言って皆は優しいな。天狗にならないよう注意してくれるとは。さて簪のところに行くか」

「お疲れさまー。今回のどうだった？」

「有澤君！お願いだから後衛のときは勝手にグレネードは撃たないで！最初のあれすっごくビビったんだから！」

とてもご立腹の様子だった。グレネードが好きなのは反射的にグレネードを撃つ癖がある。気を付けなくては。

「あれに関してはずまない。普段は初手グレネードだからつい」

「分かればよろしい。後奥の手なんだけど、」

反省会は1時間に及んだ。

タッグトーナメント当日学園内アリーナ

「遂にこの日が来た！連携の訓練は万全。勝つぞ！」

「私は最初の頃のFF、覚えてるからね」

「あれはマジで申し訳ありませんでした。精度が悪いのを忘れてたんだ」

最初の頃、怒られた俺は汚名返上とばかりに簪の隙を見てグレネードを撃った。そしたら精度が悪いグレネードは簪の背中に飛んでいって、普段温厚な人が怒ると恐ろしいことを知った。簪さんってあんな声出たんだ。ゼツタイニグレネードハウチマセン。

「生徒諸君。今日は待ちに待った学年別タッグトーナメントだ！ここで急遽新しいレギュレーションが追加されたから発表するね。専用機同士のタッグは相手のペ

アの両方が量産機体の場合、最初の一分間は攻撃を禁止します。機体の性能差がありすぎるからね。片方が量産機体の場合は最初の一分間は量産機体に対しての攻撃を禁止します。それでは一回戦の対戦相手はこれだ！」

生徒会長がそう叫ぶと後ろのスクリーンに対戦相手が表示された。

どうやら専用機持ちはほぼ全員専用機同士で組んでいるようだ。て言うか一組の専用機持ち何人いるんだよ。どれどれ、一夏はデュノアさんとか、確か三人目の男性操縦者だとか何とか。興味無いから調べてないけど企業連の情報網にそんなの無かったはずなんが、後はオルコット、凰ペア、ボーデヴィツヒ、篠ノ之ペアか。最後の唯一の専用機と量産機ペアか。

「初戦は、」

呼ばれたか。初戦は量産機体のペアだしサクッと終わらせませるか。

結果は試合開始から一步も動かず終わった。一分間簪さんは俺の影に隠れて、俺は敵の攻撃を真っ向から耐えきったのち両肩に装備したYAMAGAで一撃だった。やはり肩武器はいい火力してるぜ。

「有澤君って鬼畜だね」

なぜ!?

その後は順当に勝ち進んで決勝まで行った。一夏は初戦でボーデヴィツヒペアと当たって何とか勝ったらしいが三回戦でオルコットペアに敗北した。というか決勝が俺たちとそのオルコットペアなんだがここで問題が一つ。

「オルコットさんのIS噂によるとENマシマシらしいんだがどうしよう?」

「やられる前にやればいいでしょ。火力が自慢でしょ?」

「そうだな!専用機同士だからハンデも無い。初手でYAMAGAで焼き払ってやろう」

「それでは一年生の決勝戦です!選手入場してください!」

さて最後の出番だな。行くぞ。システム起動!

『メインシステム、パイロットデータの認証を開始、メインシステム、通常モードきどお!貴様になら、出来るはずだ。愛してるんだああああ君たちをおおおお!ギャハハハハハ!』

相変わらずうるせえ。これ終わったらまた音声変えておくか。

企業連 side

「なにやらドイツの代表候補生のISに条約違反のVTシステムが搭載されていたらしいな」

「ええ。取り外さず起動しないように無効化しておきました」

「なぜ取り外さなかったのだ？」

「取り外せば彼女のISがシステムが無くなったと検知すると思ったので」

「そのまま無効化の方が難しいと思うのだが、流石だな。この後はどうする？」

「ドイツに送り込んでいるオーメルの諜報員をドイツの上層部に送り込んでいます。首謀者はなぜ起動しなかった!?といったアクションを起こすでしょうからそこで関係者をまとめ一網打尽にしようかと」

「首尾は上々だな。さてドイツの上層部は叩けば何が出てくるやら。楽しみだな」  
「そうですね」

---

VTシステムは出番無しです。設定にある通り企業連は表裏世界各国に諜報員を送り込んでいたのでああいっただ違反行為等を早く検知出来ます。さてさてドイツの命運はどっちだ？本音は主人公を戦わせたいからです。

## 学年別タッグトーナメント 決勝戦

遂に来てしまったEN兵器との対戦。でも青涙ってビット無効化されたら大半の火力を失うのでは？

「選手が出揃いました。それでは、一年生の決勝戦。試合開始！」

凰「セシリア！男の方は話した通りだから徹底的に引き撃ちに徹して。あたしが前衛張る

から援護よろしく！」

セシリア「言われなくとも。最初からティアーズ全機展開で行きますわよ！」

隆彦「ENはまずい。一気に片を付ける。ビットを狙ってくれ。誘爆を防ぐために火力重視

で行くぞ！来い！核！」

簪「任せて！核は青い方狙ってその他のでビットを狙う。いっけえ！」

飛び交うレーザーとミサイル。しかし、

ボガガガガン！

簪「嘘!? ミサイル全部迎撃された!? なんて正確な射撃なの、あのビット」

セシリア「なんて火力なんですの。しっかり迎撃したのにビットの半数を持っていかれま

したわ。でも、まだスターライトが残ってましてよ!!」

隆彦「させんよ！ 簪さん、すまん。近接戦闘準備してくれ。ECM！」

シュガガン！

展開されたECMの出力は凄まじく、遠隔操作のビットは制御不能になり地に落ちた。しかしその強力さ故にミサイルを運用できなくなった。

隆彦「少しだけ前衛頼む！ こっちは青いのを速攻で落とす！ 一発撃ったら下がってくれ。

スナイパーキャノン！」

肩に現れたのは砲身が5メートルにも及ぶ巨大な砲身。

ドツガアアアーン！

凄まじい発射音とともに吐き出された砲弾は正確にティアーズに直撃した。

隆彦「よし！ 簪さん下がってくれ。これでトドメだ！ 隠れ蓑！ 月光！」

大型のレーザーブレードに特殊ECMで姿を隠した彼はティアーズに悠々と接近した。スナイパーキャノン発射時の爆炎と硝煙、さらに喰らった衝撃もあり動けないティアーズはこれで落ちた、かに見えた。しかし敵は一人ではないことを忘れてはいけない。

凰「あたしのこと忘れんなあああ！」

ギイン！

寸前でレーザーブレードは受け止められた。龍咆で隆彦を吹き飛ばした凰は、凰「セシリア！ 気を付けなさい。今のは見たことのない兵器だった。多分あいつ機動力と

引き換えに大容量のバスマスロット持つてるみたい。ECMがひどいからスターライトで

の狙撃に徹して。邪魔な煙は龍咆で吹き飛ばすから！」

セシリア「分かりましたわ。凰さん、どうかお気をつけて。彼の太刀筋は中々の

ものでし

たわ」

凰「近接戦闘ならあたしの舞台よ！」

そう言うのと凰は一気に接近した。といっても対抗戦の時に喰らったグレネードアーマーを警戒していつでも引ける状態を保ちつつ

隆彦「すこぶるまずい！これじゃあグレネードアーマーは使えない！まあ警戒されて当た

り前だが。ECMは消せないし、しゃーないか。使い慣れて無いんだが

ショットガン！スラッグガン！簪さんは青いのを引き付けてこっちに狙撃させないで」

どうしようか。ビットを防ぐためにはECMは切れない。つまりミサイルは使えない。グレネードは誤爆が怖いから使えない。近接戦闘は間違いなくあちらが上。初見殺しがどこまで通用するか、そっち頼むぞ簪さん。

簪「任せて！」

ここに凰VS隆彦、簪VSオルコットの構図が出来上がった。

隆彦「いい加減当たりやがれえ！」

凰「そんな散弾受けたらこっちは耐えられないわよ！」

こちらは完全に膠着状態だった。攻撃が当たらない隆彦と攻撃が通用しない凰。だが、殴っていれば少しずつダメージは入るので、

『機体がダメージを受けてマース』

「分かっとなる！」

徐々に追い詰められていた。

簪「これなら行けそう！」

簪はスナイパーライフル故の発射後の隙について接近していた。どうやら彼女は近接戦闘がからつきしらしく小さなダガーで対抗してきた。だが、

セシリア「この距離なら誘導出来ずとも当たりますわね！これで終わりですわ！」

腰のところから発射されたミサイルをもろに喰らってしまった。しかし、  
簪「この程度どうってことない！有澤君のFFの方が痛かった！」

薙刀でミサイルを切り払った簪はティアーズにトドメの一撃を叩き込んだ。

簪「待ってて今そっちにいくから！」

『右腕と肩のやつ、残弾30%』

隆彦「急いでくれ！もうすぐ弾が切れる！」

風「くっ2対1か、さっさとこいつを落とす！」

『はい！弾切れ！ギャハハハハ！』

クソツ弾切れか、あっこれはまずい、

目の前には振り下ろされる巨大な刀身。思わず目を瞑った瞬間

ガギン！

簪「せいっ！間に合った？」

隆彦「ああ。ちょうど弾が切れたところだ。ナイスタイミング！」

凰「状況は最悪、でも諦められるかあああ！」

凰は龍咆を乱れ撃ちながら二つに分割した双天牙月を構えて突っ込んだ。

隆彦「余裕が出来るって言うのはいいもんだ。簪さん、合図したら目を閉じて耳を塞いで

くれ。フラッシュロケット！今！」

カッ！

フラッシュロケットから放たれた強い光と音で一瞬だけ凰の動きが鈍くなった。簪にとってはそれで十分だった。

簪「これで終わりだあ！」

ザン！

「ブルーティアーズ及び甲龍、シールドエネルギーエンプティ。よって勝者は有澤、更識

ペア！」

ワアアアアア三

隆彦「凄まじい歓声だな」

簪「うん、ねえ有澤君」

隆彦「なんだ？」

簪「もしあの格納庫で出会ったとき助けられなかったら私は多分ここに居られなかった。」

本当にありがとね！」

隆彦「そいつはどういたしまして。俺は今回の試合かなり楽しかったぞ」

簪「私もだよ。相性がいいみたいね、あなたとは」

その笑顔でその台詞は卑怯だろおお！惚れてまうやろがー！、、ん？惚れてしまっそう？

これが、恋心？

彼は自分の中にある感情に気がつき始めていた。

## 企業連 side

「学年別タッグトーナメントは無事終わったようだな。しかし驚いたな。まさかドイツがああも腐っていたとは」

VTシステムの件で尻尾を出したものを問い詰めたらあいつもやった、あいつはこんなことをした、といった自白が相次ぎ、裏付けもあったため今回の一件でドイツの上層部がほぼ全て入れ替わったのだ。

「しかし、面白かったな。一人でも多く道連れにしたかったのだろう。人間の悪い側面がたっぷり見られたな」

「ええ。ついでにチャンピオン・チャンプスに依頼して実験施設を跡形もなく破壊、再起不能にしておきました」

「あいつが仕事したのを始めて聞いたな。ドーザーのどこがいいのやら」

「あれは企業連最大の謎ですね」

? side

ふうん。私が壊そうと思ってたのに企業連に先越されちゃったなあ。まあいいか  
臨海学校の時に箒ちゃんに専用機あげるついでに話してみようかな? どうやらあ  
いつらは普通の凡人共とは違うみたいだし。あー楽しみだなあ!

---

そろそろ臨海学校です。遂にあの人が登場します。はてさてどうなることやら。  
ようやく自分の感情に気がついた主人公。ちなみに筆者は「自分のこの好きとい

う感情は本当に好きという感情なのか？」という面倒くさいことこの上ない思考回路なのではつきりと「好き！」と言ってくれる人が好きです。つまり恋愛の青春なんてものはありませんでした。

アンケート、僅差ですね。投票期限はまだあるのでどんどん投票してください。



## 仲直り計画始動

この話は考えるのに苦労しました。こんな展開現実であるもんか！と思った人はご都合主義ということでご理解下さい。臨海学校までには仲直りさせたかったので。

タッグトーナメントが終わりひとまず落ち着いた俺は部屋でひたすら思考していた。というのもどうやって更識姉妹を仲直りさせようかということだ。

「自分が好きだと思った人が姉と仲違いして、どう考えても誰かが手を貸さないと未来永劫仲直りする気配が無い。なら助けるしかないでしょ！」

惚れた弱みというやつだった。取り敢えず整理だ。簪さんと楯無さんから聞いた話をまとめるところだ。

← 更識家、対暗部用暗部として日本の裏社会に関わる。

先代更識楯無が没し新しく楯無に簪さんのお姉さんが就任する。

←

簪さんを裏に関わらせたくないがために「あなたは無能のままでもいいなさい」といった発言をする。

←

簪さんはこれを優秀な姉がいつまでも自分を見下していると反発。

←

そこにお姉さんが一人でISを組んだと発言。簪さんが姉への劣等感を高める。

←

姉妹間の溝は深くなる一方。シスコ<sub>ん</sub>、妹思いの楯無さんはストーク<sub>ん</sub>、隠

密式後方警戒任務をほぼ毎日行う

つまり妹大好きなお姉さんの思いやりが簪さんにとっては優秀な姉が煽っているように受け取れたわけだ。ならこのすれ違いを正してやればいいか。でもどうやって？ しゃーないか。気は進まないが<sup>企業連</sup>あいつらに頼るとしよう。早速俺は企業連に電話をかけた。

「そっちに心理学系のやつっているか？」

「ええ。いますとも。もしや彼女さんの姉妹の仲を良くしたいとか？」

「何でそんなにお前らは察しがいいんだよ！その通りだよ！」

「遂に彼女と認めたぞおおお！これは企業連中に流しておこう」

「やめろ！」

「まあ、企業連に知らぬことはあまり無いので。ではその手の者と変わりますね」  
その後俺は心理学に詳しい社員と2時間ほど話した。その結果良さげな案を教  
えてもらった。しかし何でもいるな企業連は、ダメ元だったが心理学担当までいる  
とは。でも次企業連行くのが辛いなあ。あいつら絶対広めるじゃん企業連中に。

作戦はこうだ。ボイスレコーダーを持って改めて姉妹両方と一人ずつ相手をどう  
思っているか話をする。ここでどちらかが心底相手を嫌っていたならここで作戦  
は終了だ。もしお互いがお互いと仲直りしたいけど今更、、、って感じならgood  
録音した音声をそれぞれに渡して聞かせる。その上で仲直りしたいとお互いが  
思ったら放課後にでもお互いを会わせる。ただこの作戦はお互いが仲直りしたい  
と思っていないと成功しない。楯無さん曰「小さい頃はお姉ちゃんって呼んでたの

にいいい」だそうだからワンチャンあってほしいな。

### その日の放課後

「どうしたの？有澤君。メールで放課後会いたいだなんて。それに二人っきりで話をしたいって。もしかして告白、とかかな。」

「お姉さんと何があったか聞かせてくれないか？嫌なら話さなくてもいいんだけどお姉さんが一人でISを作ったからってあそこまで敵視するのかなと疑問に思ってたんだ。他人の家族問題にむやみに部外者が口出ししちゃいけないのは知ってるんだけど、こう、家族間で敵対するのって見てて嫌なんだよね。だって家族ってかけがえの無いものじゃんか」

すると簪さんはあからさまに警戒した様子で言った。

「お姉ちゃんか本音に何言われたの？」

「どうやら今までもこういった経験があったらしいな。だが、

「いや。俺の完全なる独断だ。何だったらお姉さんに問いただしてみたらどうだ？俺は純粋にいがみ合ってる姉妹を見たく無いんだよ。言いにくいなら話さなくていいからさ」

「そこまで言うならいいけど、私の家って他の家と違ってちょっと特殊な家柄だね、お父さんが亡くなった時に家の後を誰が継ぐのかでお姉ちゃんが後を継いだの。その時からお姉ちゃんの私に対する態度が一変してね。何とか手助けできないかなって思ってたなら「あなたは無能のままでもいいさい」って言われてさ。この時あってお姉ちゃんって私をそんな風に思ってたんだって。しかもその後専用機を自分で組んだって言うんだよ。私ってお姉ちゃんよりこんなに劣ってるんだって思ってね」

ごめんよお。既に話のあらまし大体知ってるんだこっちは。ちゃんと家柄に關してはボカしているようだ。さてここからだ。

「なるほどね。じゃあ1つだけいいかな？ 簪さんはお姉さんのこと大嫌いなのか？」

「大嫌いって程じゃないんだけど何て言うか、」

「一度お姉さんに反発した手前今更仲良くできないってこと？」

「うん」

「つまり心底憎んでいたりとかさういった感情は無いのか？」

「そんなの無いよ！むしろ可能ならまたお姉ちゃんと遊びたい。でも、」

「そこまで聞けたなら十分だ。もし心底お姉さんが憎いんだらどうしようかと

思った」

「こんなことを聞いてどうするつもり？」

「いや、何でもないさ。もし憎しみ合ってるようならどうにかしようと思ったんだけどね」

「ふうん。何か隠しているようだけど聞かないであげる。私にとって損になるようなことしないって信じてるから」

なぜ隠していることがバレた!? もしやエスパーク何かかかか!?

「エスパークじゃないよ私は。有澤君って顔に出やすいんだね」

怖ええよ!

簪さんと別れた俺は一夏のいない部屋で一息ついていた。あいつもう女子部屋に移ったらどうだろうか? 多分相手さんは大喜びだと思うぞ。毎日毎日ご苦労様だ。「簪さんの方はクリアか。問題は楯無さんの方だな」

「呼んだ?」

アイエエエエエエ! ナンデ? タテナシサンナンデ?

「うぎゃあああああ! どっから入ったんですか!？」

「ふふっ面白い。あなたの後ろをびったり着いてきたのよ」

おいごらあ気がついてた筈だろ！仕事しろAI！

『だってその方が面白いよお。敵意も無いみたいだしね。ギャハハハハハ』

こいつうどこまでも主任と似せてあるな。思考回路までほぼ一緒だ。

「後を着けてたなら俺の聞きたいことも分かりますね？」

「ええ。私は全て簪ちゃんの為を思っっちゃって来たんだけどね、全部裏目に出たみたいね。もちろん今も昔もこれからも簪ちゃんのことは大好きよ！」

「そこまではっきりと言うとは流石はシスコン会長ですね」

「何ですって!？」

「イエ、ナンデモアリマセン」

この姉妹どっちも怒らせたらいけないな。そう心に誓う隆彦であった。

次回で姉妹の仲を取り戻します。早すぎると思いますが原作でも主に憎んでいるのは専用機がああなった原因の一夏だけで姉に関してはそこまでの憎しみを持って

いた描写が無いんですよ。元々仲が良くて一言二言で拗れた仲ならこの手口で修復可能かと思いました。

## 仲直り完了

ようやく仲直り完了です。そろそろ簪にあからさまなヒロインムーヴさせようかな？

やっぱり皆さんは原作キャラが原作からかけ離れるのは嫌みたいですね。原作通りのキャラで行きます。

---

楯無さんとの話を終えた俺は録音した音声を加工した。

「流石に前後の会話が入るとヤラセ臭くなるからな、分らないようにしつつかりトリミングしなくては。後は俺の楯無さんへの質問の声をくつつけてやれば、よし」

翌日の放課後、俺は簪さんに

「いいものをあげよう。部屋に帰って中身を聞いてみてくれ。その後何かあったら俺に連絡してくれ」

「ありがとう。どうせお姉ちゃん関連でしょ？最近私と会わずに何かしてるみた

いだし」

だからどうして俺の回りの人はこうも察しがいいんですかね？ えっ俺が分かりやすいだけ？

翌日俺はメールで簪さんの部屋に呼び出された。そういえば始めて入るな女子部屋は

コンコンッ

「俺だけど、何の用なんだ？」

「入って」

あるええ？ 声が怒ってらっしゃる。俺なにかやらかした？

部屋に入るといい笑顔をした簪さんが座っていた。

「そこ座って」

俺は反射的に座った。逆らってはいけないうんぬんがなかった。

「これ、聞いたんだけどさ、どういうこと？」

「どういうことにもそのままの意味だが？」

「これ、弄ってるよね。大元の音声は？」

「なな何を言っているんだ簪さんや。弄ってなんかいないさ。大体何処に弄ってるといふ証拠がある!？」

「犯人は往々にして証拠を求める。凶星だね。私がこの程度の編集に気がつかないと思つたの?」

何故気がついたんですか! バレないように細心の注意を払つたというのに! 音声にも違和感は無かつた筈だ!

「私ね。過去にもこういつたことがあつてね。調べたらさ、編集の痕跡があるんだよね。私でも分かるって隠す気あるの?」

「、、、バレてしまつては仕方がないか。そうだよ。それは確かに編集してある。だがそれは全て俺が勝手にやったことなんだ。決してお姉さんは関わっちゃあいない。それに編集と言つても前後のトリミングと俺の音声の追加だけだ」

「、、、嘘は言つてないみたいだね」

その一言と共に重圧が消え去つた。

「ごめんね。変に疑っちゃつて。今までも結構こういうのがあつてね。全部お姉ちゃんの仕業だったから。トリミングだけつてことはこれがお姉ちゃんの本心つて

こと？」

「あの人のことだからボイスレコーダーにも気が付いた上で話してそうだけどね。その通りだ。あのときの本気の顔は冗談抜きでチビるかと思った」

「なるほどね。じゃあ明日の放課後にでも勇気を出してお姉ちゃんと会ってみようかな。生徒会室に行けば大抵いるから」

「随分あっさり会うことを決めるんだな。もうちょいかかると思った」

「だって有澤君にここまでしてもらったのに私がいままでもうじうじしてちゃいけないでしょ」

「どういたしまして。それとさ。どうやって編集に気が付いたんだ？俺が聞き直しても不自然な点は無かったと思うんだが、」

「えっあれでちゃんと隠してたつもりなの？背後の音の変化とかで分かるじゃん」  
「どうやら自分が一般人目線だと優秀に分類されることに気がついていないようだ。まあ比較対象が完璧超人のお姉さんじゃああなるよな。しかし、すんなり行つてよかった。もしダメそうなら教えてもらったもう一つの作戦を使わないと行けなかった。」

翌日、生徒会室

そこには簪と楯無が向き合って二人きりで座っていた。他の人は空気を読んで退室したのだ。この固まった空気を壊したのは簪だった。

「ねえお姉ちゃん。あれってお姉ちゃんの本音なの？」

「ボイスレコーダーのこと？ ええ。嘘偽りのない私の本心よ」

「私ってお姉ちゃんのことずっと勘違いしてたのかな？ その、、ごめんなさい！」  
楯無は驚いた顔で固まった。

「私もごめんね簪ちゃん。もつと言い方に気を付ければよかった。あの頃は就任直後で余裕がなかったから、、ってこれは言い訳に過ぎないのだけれど」

「お姉ちゃんがいいのならまた仲良くしてくれる？」

「もちろんよ！ だって私はあなたのお姉ちゃんなんだから！」

「うわっシスコンなのは本当みたい」



それから数日後、俺は悩んでいた。

「何とか姉妹の問題は解決したらしいが、この日増しに強くなる思いはどうしたらいいんだ！」

姉妹の仲がよくなった日から簪の笑顔をよく目にするようになった彼はその度にドキドキしていた。彼は初心だった。しかし、悩む場所が悪かった。

「告白、、は無理だ！出来るかそんなの。せめて友達以上にはなりたいが、、」  
「そんなことお姉さんが許しません！」

「ぎゃあああああ！またでたあああああ！」

自室とはいえ一夏が居るときならまだしも一人っきりでそんな発言はするものは無かった

「うふっ面白い」

「毎回毎回どっから入ってきてるんですか？」

「今回は天井裏からよ」

「マジか、今度天井の通気孔も塞いでおかなくては」

「そんなことより！さっきの発言は本気なの？」

「、、本気です」

「ふうん。でもお姉さんとしては許すわけにはいかないなあ。友達までならいいけどね」

「このシスコンめが！」

「ええ。その何が悪いの？簪ちゃんに知られた今、恐れるものは何もない！」

「胸張って言うことじゃないと思うのですが、、で、どうしますか？恋人仲を認めたくないお姉さん？」

「簪ちゃんと付き合いたくば私を越えていきなさい！」

「学園最強に！？んな無茶な！」

「別に逃げてもいいのよ？あなたの気持ちはその程度ってことだから」

「一つ条件いいですか？」

「何？ハンデはあげないわよ。あなた相手は油断して良いものじゃないから」

「いえ、そうではなく。生徒会長は学園最強がなるんですよ？」

「ええ」

「この勝負、学園最強たるあなたに勝っても生徒会長はやりませんから」

「へえ。勝つつもりなの？この私に？」

「やるからには勝ちますよ」

「ふうん。なら精々楽しませてね。予定は後日伝えるわ。生徒会長権限でアリーナの一位貸しきりにするなんて容易いことよ」

「職権乱用と言いたいですが今は感謝します。それと今日以降俺の部屋には忍び込まないでください。手の内を明かしたくない。それくらいはいいでしょう？」

「それでいいわ」

「それではまた」

さて、学園最強か。しっかりと情報を集めておかなくては。出し惜しみは無し、武器を使いきる気で行こう。

主人公、簪のために楯無と戦う！ベタな展開ですが、彼女のために戦う主人公、いいですよね。

ちなみに企業連に教えてもらった作戦とは、

楯無さんと簪のいるところで模擬戦をする

←

うっかり、流れ弾が簪へ飛んでいく

←

ギリギリで楯無さんが助ける

←

怪我はなかった？簪ちゃん。大事な妹だもの助けるのは当然よ！

的な流れです。

## 生徒会長戦

学園最強VSガチタンです。最強といえどEN兵器の無い相手にどこまでやれるのか？

AI音声は今後これで固定なので皆さん読みながら頭であの声を再生してみてください。

それでは更識楯無VS有澤隆彦の試合を開始します！選手は入場してください！遂に来たか、この日が。今日のために先輩の機体の調査と訓練(戦術等の座学)をしてきたんだ。インテリオルのあの人を師匠にしてやって来たこの数日間、この一戦に出し尽くす！

システム起動！

『準備は出来ているな？パイロットデータの認証を開始する、、メインシステム、通常モード起動。生きて戻れ。それがお前の責任だ』

数日で聞きなれてしまった師匠の声を聞きながら俺はアリーナに飛び出した。

今日は日曜日、本来ならアリーナ争奪戦を制した者以外は基本的に閑散としているアリーナが歓声に包まれていた。

「生徒会長殿。これは一体どういうこと何ですか？」

「私が二人目の子と戦うのよって言ったらあつという間に学園中に広まっちゃって」  
「例の件は言っていないですよね？」

「恋人の件でしょ？当然よ。言ったところであなたはここで果てるのだから同じことよ」

「強者にふさわしいセリフですね。でもそう簡単には落ちてやりませんよ」

「ふうん。期待はしないでおくわ」

それでは試合開始！

その瞬間俺は先輩に対して両肩に出しておいたYAMAGAを挨拶変わりにぶっぱなした。当然水のヴェールで防がれるわけで、

「効くと思ったの？」

「いいえ、ただ完全に防がれるとは思いませんでした」

なんだあのヴェールは!?先輩の機体は水を操って攻防両方をこなすとは知っていたがここまでとは。

「しっかし噂の通りガチガチね。こっちの攻撃もほとんど通らない」

でも、あれに耐えられるかな？

「畜生、だが大火力こそ俺の持ち味、水が邪魔なら全部消し飛ばしてくれ。幸いEN兵器を持っていない相手だ。こっちの装甲が十分に通用する。ただ相手は学園最強、初見殺し以外が通用するとは思えんし、武器呼び出しで呼び出す武器はバレるからな。ECM!これで!」

彼は水を制御するナノマシンを無効化するため、ECMを展開したのだが、  
「残念ね、こんなこともあるのかとECM対策はバッチリよ!」

「畜生、通用しない以上ECMは邪魔だ、ミサイルで攪乱して切り捨てる!月光  
!フラッシュロケット!隠れ蓑!」

俺はフラッシュロケットで視界を奪いつつ特殊ECMでセンサーから反応を消し  
月光を振りかぶった、が

ギイン!

「ざーんねん。その手口はタッグトーナメントで見たからね。それとさ、随分とこの辺り熱くない？」

んっ？何のことだ？

『お前の周囲の湿度が不自然に上昇しているぞ！やつめ、何かやる気だ！急いで離脱しろ！』

「もう遅いわよ。クリア・バッシュ熱き情熱！」

ズン！

それは大爆発だった。鈍足な彼は避けられる筈もなく、

ぐあああああ！

あの巨体がアリーナの端っこまで吹き飛ばされたのだ。凄まじい威力だった。

『機体損傷40%』

初めて受けた大被害だった。

「ぐっなんだ今のは？」

『水蒸気爆発と推定される。湿度が不自然に上昇したら攻撃の前触れだ。次は当たるなよ』

「嘘、熱き情熱を耐えた!？」

クリア・パッション

今までの試合でもまともに決まれば一撃だった熱き情熱を受けてまだSEが半分以上残っていることに楯無は驚愕した。

「硬い硬いとは言われてたけどここまでとは、ならまともに通用するのはミストルティンの槍だけか。隙を見つけて一撃で落とす！」

楯無は蒼流旋の内蔵のガトリングガンで牽制しながら隙を伺うことにした。

「ほう。何やら避けに専念し始めたな。どうせ奥の手を安全に使うために隙を伺ってるんだろな。その手には乗らん。ガトリングキャノン！」

圧倒的弾幕、所詮内蔵のガトリングガンが打ち勝てる訳もなく、

「火力も想像以上ね。精度がそこまでじゃないのが救いか」

その場とどまって撃つ隆彦と回りを飛び回りながら撃つ楯無。状況を動かしたのは楯無だった。弾が切れて攻撃が出来なくなったのだ。接近しようにも弾幕で近づけない。

「思ったより巡回速度が速い。鈍足じゃ無かったの？」

「ハッハー！地に足つけてりゃ超信地巡回で下手なISより巡回は速いぞ！」

ガチタンのあまり知られていない長所にキャタピラを使う構造上地に足をつけているときの旋回がとても速いことがある。

「でもいつかは弾が切れ、あのデカイ弾倉を見るに弾切れ狙いは無理そうね。なら真っ向から大ダメージ覚悟で行くしかないか」

楯無はひたすら回避に専念しつつ牽制に蛇腹剣であるラストイー・ネイルを奮いながら何とか隙が作れないか模索していた。その間に楯無は薄々気がつき始めていた。

「戦いぶりで忘れてたけど彼ってIS適正が最低だったわね。そのせいなのかあれを撃っているときは腕に持つてる武器を使ってこない。いえ、使えないよね」

「くっそお。当たらねえ。肩武器使ってるせいで腕武器が使えねえ」

凶星だった。

「くそっ、このままじゃ罅が開かない。弾薬費が怖いが、ASミサイル！マシンガン！」

同時に使用できるASミサイルをばらまきつつマシンガンで攻撃を始めた。

「ふうん。照準しなくていい類いの武装は使えるんだ。でもさっきよりは弾幕が薄

い。あのまま撃ち続けてたらよかったのに」

すると楯無はあろうことか真正面に移動した。思わず攻撃を緩める隆彦。正面からならどんな攻撃も耐えうる自信があったのだ。

「何のつもりですか？降参ではないでしょうし」

「ええ。そんな気は全くないわ」

「俺の真正面に来るとは自殺志願者ですかね？」

「そういうのは当ててから言いなさいな、これが私の全力！ミストルティンの槍、発動おお!!」

いきなり彼女の槍に水が集まったかと思った瞬間強い衝撃に襲われた。

『直撃だな、油断したな貴様。後で覚えておけよ』

その声を最後に俺の意識は暗闇に消え去った。

主人公初の敗北です。まあ生徒会長相手に善戦したほうでしょうか。勝ちっぱなしで忘れがちですけど彼は適正最低で入学まではISに乗ったこともない人間です

から。当然の結果かと。

UAが想像以上の量です。最初は精々50人位読者がいればいいと思ってましたが、投稿を始めて10日経過した2019年12月11日午後9時の時点でUA6233。適当な計算で大体1日辺り約360人程の読者がいる計算に。思ってた以上に読者がいるようで感謝しきれません。これからもこの小説をどうぞよろしく願います。

## 青春とは恋愛である（決めつけ）

この話からタグにヒロインを追加します。やっぱりラブコメあつてのISのSSですからね。

---

「知らない、天井だ」

目覚めた俺はベッドに寝かされていた。辺りを見るに医務室のようだ。そうか、負けたんだった俺。窓の外は夕焼けが広がっていた。

「何時間か寝てたらしいな。うぐっ！」

体を起こそうとすると激痛が走る。あのときのダメージが残っているようだ。

しかしどうしようか、誰もいないのだが。

そう考えていると医務室のドアが開いた。

「派手にやっちゃったけど大丈夫？」

「あつ先輩。ええ、頑丈なのが取り柄なので全身が痛いだけで特に怪我はありません

ん」

「よかった。私の出せる全力を叩き込んだからどうなったかと思ったわ。無事それで何よりよ」

「あの試合の結果はどうだったんですか？記憶が無いんですけど」

「ギリギリで私が勝ったわ。あなた最後の最後に自爆したじゃない。私の必殺技は防御を完全に捨てるからもう少し受けたダメージが多かったら引き分けだったのよ」

「あのときは無我夢中だったから記憶に無いです。負けたってことはそういうことですよね。今後は簪さんとの過度の接触は止めます。デカイ口叩いたのにこの様では、恥ずかしい」

「その事なんだけどね、お姉さん許可します」

「へっ？」

思わず間拔けな声が出た。

「どういうことです？俺は確かに負けたのに」

「あの試合のあと血相変えて医務室に簪ちゃんが飛び込んできてね。第一声が「有

澤君は!」だったのよ。簪ちゃんがあそこまで気にするなんて相当よ。後私一度も勝てなんて言っていないわよ。言ったのは私を越えていきなさいだけ。本当は圧勝する予定だったのに学園最強の私をあそこまで追い詰めたんだから十分合格よ」

「えっ。マジですか、」

思わず涙が出た。それと同時に俺はここまで簪さんに惚れ込んでたんだと実感した。

「私はこの辺で失礼するわ。簪ちゃんには目覚めたって伝えておくから。多分お見舞いに来るだろうからゆっくりお話しなさいな。私は簪ちゃんが笑顔でいられるなら何でもサポートするわよ。それじゃ」

どうやら楯無さんには認めてもらえたらしい。あれだけ啖呵を切ったのだから勝ちたかったのだが、いつかりベンジしてやる。しかし、どこが悪かったんだ? 全力は出しきったつもりだが、

『ほう。最後の油断は忘れたらしいな。企業連に戻ったら訓練だな』

いっけね、忘れてた。ってか怖ええよこの声。怒りがひしひしと伝わって来るんですけど!?

まあ取り敢えず今のところは休んでおこう。多分簪さん来るだろうし。来てほしいなあ。

ガチャ

「有澤君！目が覚めたって聞いたんだけど具合はどんな感じ？」

速っ！さっき楯無さんが出ていってから数分と経ってないぞ。息が荒いし、これは走ってきたなここまで。俺のためだろうな。純粹に嬉しい。

「全身が痛むだけで骨折といった怪我はない。明日には復帰して授業に出られるさ」  
「そう。それは良かった。ねえ有澤君、何であんな無茶したの？お姉ちゃんに挑むなんて」

「なんで、か。それは俺の意見を通すのにお姉さんが立ちはだかったからだよ」

「その意見ってもしかして、」

「言わせんな恥ずかしい」

「、私ハね、今までこんな感情持ったこと無いんだけどさ。私でいいなら、」

その、付き合ってくれない？」

そう言うと言と簪さんは俯きながら手を差し伸べてきた。確か一夏はこのセリフを聞

いて買い物と勘違いしたらしいが生憎俺はそこまで鈍感じゃない。

「いいとも。俺でいいなら喜んで」

俺は差し出された手を掴んだ。

「じゃあさ、簪さんって言うの止めない？簪って呼んで」

俺は一瞬躊躇したが、

「分かった。これからよろしくね。簪」

俺はその日から簪と恋人になった。正式に。

翌日。いきなり呼び捨てに変わったことでクラス中から質問攻めにあつたのは言うまでもない。だが皆薄々気がついていたらしくそこまで驚いてはいなかった。

その日の放課後俺達二人は生徒会長に呼び出された。

「何の用ですか？生徒会長殿」

「やだなあ。たっちゃんって呼んでくれないのよ？」

「じゃあたっちゃん先輩、何の用ですか？」

「先輩、まあいいか。あのね、実は部屋割りのことなんだけどね。織斑君の方から部屋を変えてほしいって要望があつての？」

「えっあいつそんなに俺とが嫌だったのか？」

「いや、どうやら彼多くの女子にモテたらしくてね。その中に篠ノ之さんがいてね、その子から「一夏と部屋を一緒にしてくれ」って要望が来たのよ。この際もし簪ちゃん和有澤君がいいのなら部屋を一緒にしたらどうかかって。どうせ有澤君ってヘタレだから手を出すことも無いでしょう？」

「嫌な信頼ですね。事実だから何も言い返しませんけども！俺はいいですが簪は？」

「私も構わない」

「呼び捨てにまで発展している!?!んんっ、ならそれでいくわ。お姉さんに任せなさい。多分来週までには部屋を変われると思う。有澤君に移動してもらってから荷物まとめといてね」

「分かりました。一つ付け加えていいですか？」

「何？」

「たっちゃん先輩のことですからどうせ仕掛けてるか仕掛けるつもりなんでしょう？盗聴機と隠しカメラ。あれらは外しておいて下さい」

「なぜバレたかは聞かないでおくわ。分かった」

「お姉ちゃんそんなことしてたの、うわぁ」

「ドン引かないで簪ちゃん！私はあなたを思って、」

「迷惑、プライバシーの侵害。次発覚したら織斑先生に言う」

「それは勘弁して！ただでさえ目を付けられてるのよ！」

「たっちゃん先輩の普段の行いが垣間見えました」

そんなこんなで俺は簪と同じ部屋で暮らすことになった。付き合えたらいいなあレベルだったのに、まさかここまで行くとは思ってなかった。どうやら今後の学園生活、とても楽しいものになりそうだ。恋人ができるというのはいいもんだな。人生捨てたもんじゃ無いな。

お互いに意識し合っていたので恋人になるのは時間の問題でした。

部屋割りの変更

有澤：一夏と同室↓簪と同室

簪：今までの部屋↓一夏と同室

本音：簪と同室↓簪がいた部屋

書いておいて言うのもあれですが本音って簪と同室、でしたよね？間違ってたらごめんなさい。ちなみに寮監の許可は当然取得済みです。全員了承したと言うことで。

生徒会長の呼び方ですが

本人に対して「先輩」↓「たっちゃん先輩」

簪に対して「お姉さん」

本人に対して真剣な話の時「生徒会長殿」

## 臨海学校 準備編 前編

一緒に買い物に行く。これって立派なデート、、ですよね？  
買い物で外出、何も起こらない訳もなく、、

簪と同室になって数日が経過したある日、簪にこう言われた。

「そろそろ臨海学校の時期だけど水着とか用意してる？」

「臨海学校？あっ」

入学後のドタバタですっかり忘れていたがこの学園には臨海学校というものがあつた。ちなみに彼は生まれてこの方おしゃれにはほとんど縁がなく、する必要も無い上、中学校時代は誰とも遊ばずすぐさま家に帰っては兵器の開発(妄想)に励んでいたため私服も数種類しかないのだ。

「簪さん。実を言うと、、」

この話を聞いた簪は即答した。

「今週末、レゾナンスで有澤君の水着と私服も買いにいくよ」

「えっ俺は今ので十分なんだが、」

「いくよ！」

「はいっ！よろこんで！」

他の選択肢は無かった。とても怖い笑顔だった。

週末、レゾナンス

「なあ簪。もういいんじゃないか？」

「何言ってるの？有澤君素材はいいんだからカッコいい服着なくちゃ」

俺は着せ替え人形と化していた。同室になった時タンスの中身は意地でも見せるんじゃないかった。夏物と冬物がそれぞれ2組づつ。後は下着類とパジャマしか無いことがバレた俺は簪に服を選んでもらっていた。だって平日は制服だし休日も基

本部屋から出ないからその、

「大体そんなに買ってどうやって運ぶんだ？このあと水着とか色々買うんだろ？」

「有澤君のISってさ。バススロット大量にあったよね？」

「いやいやいや、ISの無断展開は禁止されてるだろ!？」

「展開は禁止だけど使用は禁止されてない」

「つまりどゆこと？」

「ISを展開せずに買ったものをバススロットに入ればいい。容量まだ空いてるよね？」

「そりゃあ空いてるけども、出来るのか？」

「専用機持ちは非常時に備えてISスーツをバススロットに入れたりしてる。いざとなったら直接着れるようにね。エネルギーバカ食いするからしないけど。つまり普通の買ったものとかも入れられる」

「マジか」

荷物持ちの問題が解決した俺達は買い物に勤しんだ。バススロット、量子変換って偉大だな。ただ水着に関しては臨海学校で御披露したいらしくお互いに別々で

買うことにした。ただ俺は忘れていた。女性の買い物と風呂程長いものは無いことを。つまり俺は待ちぼうけを食らっていた。散々買い物に連れ回されて疲弊した俺は奇跡的に空いていたベンチに座って休んでいると不意に影が被さってきた。顔を上げるとそこには中年女性、所謂おばさんが立っていた。

「そのおあんた。私に席を譲りなさい」

「すいません。買い物続きで疲れているので他をあたってもらえますか？連れが来たら退くので」

「あなた！男の癖に私に逆らうと言うの！？私に逆らうとどうなるか知らないよね。んふふ、、きゃー！警備員さん！今すぐ来てください！この男に乱暴されそうなんです！」

そうおばさん、、ババアが金切り声を上げるとどこからともなく警備員が5、6人出てきて俺を取り囲んだ。

「ひぐっうぐっ、私が席を譲ってくれない？って聞いたらこの男、「てめえにやる席はねえとっとと失せろババア」って殴りかかってきたんです！」

このクソババア、言わせておけば、、

「君、本当かね？ちょっと詰所まで来てもらおうか」

俺は問答無用で詰所へ連れていかれた。詰所に向かう途中クソババアはこれ見よがしに俺に向かって満面の笑みを浮かべてきた。

レゾナンス、警備員詰所

「さて、君の職業を教えてください」

「俺は学生。高校 1 年生です」

「へえ高校生ね。もうあんたおしまいよ。この事を高校に連絡すれば婦女暴行であなたは退学処分。お先真っ暗ってわけ。ねえ今どんな気持ち？男がかっこつけて女に逆らってねえねえ今どんな気持ち？」

警備員の顔を見れば苦虫を噛み潰したような顔をしている。今の社会、こうなる何が起ころうと男は有罪不可避なのだ。

「仕方ないな、親御さんに来てもらおう。電話番号は？」

あついいこと考えてたぞ俺

「ちょっと待ってください。来てもらうのは不可能ですが電話は出来ます」

そういった俺は詰所の電話を借りて有澤重工に繋ぐとこういった。

「もしもし。俺だ。隆彦だ。聞こえてるか？今レゾナンスでかくかくしかじかでな」

「ふむふむ。それは大変ですね」

そこへ割り込むクソババア

「話は聞いたわね。私だって鬼じゃあないわ。ここで慰謝料10万円払ったら許してあげてもいいわよ」

すると

「では社長と変わりますね」

電話口は我が父、有澤隆文に変わった。父はあの渋い声で

「相手の女性と話がしたい。電話を代わってくれ」

俺はクソババアに電話を代わった。

「うちの息子が世話になったそうだな。企業連所属、有澤重工社長、有澤隆文だ」  
企業連という単語が出てきてあからさまに狼狽え始めたババア。覚えてらっしゃ

いと逃げようとすも警備員に止められる。グッジョブ警備員。

「ところであなたはうちの息子が世界で二人目のIS男性操縦者と知った上での事なのかね？ その上うちの息子はIS学園に通っている。まさか冤罪等という事は無いだろうがもしそうなら、分かってるな？」

「なんだって言うの？ 私の友人は国際IS委員会日本支部会長よ。こんなことをしてただで済むとでも思っているの？」

「ほう。あなたは自分の立場が分かってないと見える。今回の騒動はうちの息子への、ひいては企業連への宣戦布告と判断してよいのだな？ ちなみに企業連はIS委員会に少なからず資金援助をしているのだが、果たしてそんなことをしたあなたをIS委員会会長が庇いますか？ それにこちらで簡単に調べたところあなたはこういったことの常習犯だそうだが？」

クソババアは顔を真っ青にして震えていた。

「警備員よ。後処理は我々に任せてください。今企業連の者をそちらに向かわせています。うちの息子は解放してやって下さい」

「分かりました。それでは少年よ疑って悪かったな。もう出ていっていいぞ」

「大変ですね。それでは失礼します」

おっとあれを言い忘れていたな。

「ねえねえねえ、今どんな気持ち？ 圧倒的優位に居たと思っただけの間にか追い詰められて。ねえねえねえ、今どんな気持ち？」

よし。やるべきことは済んだな。さあ屑のせいで想定外の時間を取られた。早く箸と合流しなくては。俺は待機場所に急いだ。

思いの他レゾナンスでのクソババアのトラブルに文字数を使ってしまった。すまない。そのせいで準備編を2つに分ける羽目に、、というか現実的にあんな人が実在したらトラブル解決には時間がかかると思うんですよ。生徒手帳見せれば一発かと思いますが、見せる間もなく連行されそうですよね。なおクソババアの出番はもうありません。ご安心下さい。

次回はイチチャイチチャを存分に書くので許してください。

## 臨海学校 準備編 後編

臨海学校 準備編の後編です。これがすんだらいよいよ臨海学校です。日曜日と  
いうことで複数投稿いきます。

---

急いで待機場所に向かうとそこにはいかにも怒ってます。という雰囲気を漂わせた  
た簪が立っていた。

「何してたの？かなり待ったんだけど？」

「いやあそれはですね、かくかくしかじかでな」

「絶対有澤君面白半分で行ったよね？生徒手帳見せるなりすれば済んだ話でしょ  
？」

「ぐぬぬ、否定できん。まあ今後あんな被害に会う男性を救ったんだ俺は」

「はいはい。そう言うことにしておくよ。良い時間だし昼御飯食べて帰ろうよ」

「りょーかい。どこにする？この時間帯はどこも混んでるけども？」

「あそこがいい！」

簪が指差したのはカフェ。がつつり食べたい俺には少ないかもだが簪の笑顔の為なら構わんさ。

「いらっしやいませー。二名様ですね？空いているお席へどうぞー」

幸い待たずに入れた。俺は簪と同じオムライスを頼んだ。ここまではいたって普通の食事風景だったのだが、、

「ねえ、有澤君。手伝ってくれない？」

目の前にそびえ立つはパフェタワー。簪が食べたくて頼んだはいいが、想像以上の量に半分食べたところで力尽きた。

「なんでこんなの頼んだんだ。明らかに多いだろ」

「スイーツは別腹、、の予定だったけど無理があった」

「デスヨネー。元々簪は少食だしね。よし。男の生き様見とけやコラー」

何とか完食できた。甘党で助かったぜ。あれっ、俺が使ったスプーンってさっきまで簪が使ってたような、、これはもしや間接キスというやつでは!?

「どうしたの？顔真っ赤だよ？」

「気にするな！」

故意なのか偶然なのかは知らないが、簪の性格的に偶然だろうが、勘弁してくれえ！

初心の隆彦には刺激が強かった。しかしこのあと更なる試練が隆彦を襲う。

「お客様。あちらの席の方からです」

漫画の世界だけだと思っていたセリフと共に持ってこられたのはソフトドリンク。甘くなりすぎた口を休めるにはいいが、刺さってるストローが問題だった。所謂ペラストローというやつ。あの飲み口が二つあってストローがハートマークになっているやつだ。咄嗟に差し出してきた客の方を向くとあわてて室内なのに帽子をかぶっていた。確信犯だな。

「なあ。これどうするよ」

「出されたものは仕方無いから一緒に飲もうよ」

簪は顔を赤らめてそう言ってきた。別々に飲もう等とは言えなかった。

このあとはそのまま帰る、訳もなく、ゲーセンで遊び、アニ○イトに行き、カラオケにいつて遊び倒して帰った。門限ギリギリだったがとても楽しかった。レゾ

ナンスを出たときとか、カラオケから出たときに見覚えのある水色の髪が見えたのは気のせいだ。きつとそうなんだ、んな訳あるか！帰ったら戻る！そんなことは置いといて、アニ○イトでかなり買ったな。レゾナンスより買ったぞおい。俺は自分の大容量バスロットに心から感謝した。

「ねえ、有澤君。帰ったらさ、一緒にトーラスマン二期を一気見しようよ！どう？」

あいつら二期も作ってたのか！どんだけ暇人なんだ奴等は。ただ、  
「すまない。ちょっと学園で済ませなきゃいけない用事ができたんだ。先に帰っておいてくれ」

そう言った俺は生徒会室へ向かうのだった。

その後生徒会室では

「たっちゃん先輩、言い訳はありますか？」ニコニコ

「無いわよそんなの。それに合法的に簪ちゃんの顔を間近で見れたんだからいいでしょ？どっちもそこまで嫌がってなかったし、って危ない！」

「チッ、避けたか」

顔面目掛けて殴ったのに避けられたか。流石は学園最強、無駄の無い避けだ。

「麗しい乙女に何て事をするの!? 最低!」

「麗しい乙女とやらを学び直して下さい。少なくともストーカーする人が麗しい乙女な訳無いでしょう」

「あれは隠密式後方警戒任務だと、」

突然たっちゃん先輩は静かになった。俺の後ろを見ている。振り返るとそこには般若がいた。

「会長、今日一日サボって何をしていたのかと思えばストーカー行為ですか、、仕事もほったらかして、、ふむふむ」

「ゲッ! 虚ちゃん!? あわわわわ」

どうやらたっちゃん先輩にも逆らえない相手がいるようだ。するとその人はこちらを向いて

「会長が失礼しました。生徒会会計を担当しています。三年布仏虚と申します」

「一年有澤隆彦です」

「有澤君ですね。本当に今日は会長が失礼しました。お詫び申し上げます」

「いえいえ、気にしないでください。慣れてるので。それでは」

そう言って俺は生徒会室を後にした。ドアが閉まる直前にたっちゃん先輩の悲鳴が聞こえた。どうやら溜まりに溜まった仕事をやってなかったらしい。同情はしない。俺は簪が待っている自室へ急いだ。楽しみだなあ、一緒に見るアニメ。

## 企業連side

「もうすぐ臨海学校だな」

「ええ」

「臨海学校で持っていく装備は有澤重工から2点とクーガーから1点だ。アレの準備は出来ているか？」

「ええ。現在最終調整中です。今日中にはそれも終わり、起動出来るでしょう」

「楽しみだな。アレが実際に運用できれば企業連の力はより強固なものとなる。空想の産物だったが遂に実用化にこぎ着けたな。他のはどうなっている？」

「現在完成済みなのは最優先で建造した今回動かすアレだけです。現在建造中のが

8種類。内4種類が完成間近。また、企業連主導のものに関しては動力源が未完成のため完成の目処は立っていません」

「焦らなくていい。確実に建造していけ。ただ、海上で使用可能なのが9種類中5種類、いや内1つは完成の目処が立っていないから実質4種類と少ないのがネットワークか」

「仕方ありません。コンセプト的には広い荒野での使用が前提ですから」

「だな。今年が終わるまでには全て完成する予定のはずだな。来年が楽しみだ」

企業連では今後の世界を揺るがすであろうアレの建造が進んでいた。IS最強神話は終わりに近づいていた。

企業連ではアレの建造が進んでいます。勘のいいリンクスは気がついていないと思いますが、なお原作に出てきたゴキブリは登場しません。○○CA旅団が存在しないので。新たに有澤重工オリジナルのを一機登場させます。出番までしばらくかかるので気長にお待ちください。出番が来たら大暴れさせるので。



## 臨海学校 1 日目

ようやく臨海学校です。1 日目はイチヤイチャパートです。イチヤイチャ書くのって難しいな。イチヤイチャ、出来てるよね？

「「海だー！」」

トンネルを抜けるとそこは海だった。しばらく走ったバスは今回泊まる宿、下小野しもこの温泉に到着した。入り口にはIS学園1年生御一行様と書かれた看板があった。

「いらっしゃいませ。お待ちしておりました。この3日間何かございましたら遠慮なく申し付けて下さい」

「引率の織斑千冬です。ご迷惑をかけるかと思いますがよろしく願います」  
今回の臨海学校の予定はこうだ。

1 日目：座学と15時頃から海で自由行動

2 日目：専用機持ちは別で訓練。一般生徒は座学と訓練

3日目：座学と昼御飯後に海で自由行動。その後学園に戻る

「さて、貴様ら。海で遊ぶのを楽しみにしているものも多くいると思うが、遊ぶ前に座学だ。あくまで臨海学校だからな。一番の目的は豊かな自然に囲まれた環境での勉強だからな。座学を怠けたりしたものは海に行くことを許可しないからそのつもりでいるように。以上だ」

さて、遊ぶからにはちゃんと勉強せねば。頑張るぞー

15時頃

「海！」

俺は水着に着替えて砂浜へ繰り出した。当然なんだが女子が大半だから目のやり場に困る。皆学校のスクール水着なんて着ている訳もなく、最高だな！

「ねえ、有澤君。これどうかな？」

おや、簪も着替えて来たらしい。さてどんな水着なのやら、  
oh  
「俺、生きてて良かった」

そこには水色を基調としたビキニの上にパーカーを羽織った簪がいた。

「我が人生に一片の悔いなし！」

「死なないでよ！ねえ、似合ってる？」

「最高に似合っております」

「それじゃあ何する？ベタに水を掛け合ったりとか？」

「いいね！よくある展開。だがそれがいい！」

俺と簪は時間一杯泳いだり砂の城を作ったりビーチバレーをしたりして遊んだ。ビーチバレーの結果？織斑先生が乱入した時点で抜けました。生憎俺はただの一般ピーポーなんでね。

夕食の時一夏の周りで一悶着あったが、何事もなく終わった。渡された鍵を持って部屋に向かうとぼったり簪と出会った。

「おー簪じゃないか。部屋どこ？」

「ここなんだけど、」

「あるええ？俺もここだぞ？」

「織斑先生！どういうことですか？」

俺たちは急いで織斑先生の元へ向かった。

「ああ、更識、、楯無の方から連絡があつてな。「有澤君と簪ちゃんは同じ部屋にしてあげて下さい。ああ、安心して下さい。彼はそこまでモテて無いですし、付き合つてるのは周知の事実ですから。彼つてヘタレなので間違ひも起きません」だそうだ。それもあつて何故か空いていた二人部屋にしたのだ。普通の生徒達は5人部屋だぞ。ちなみに一夏の方は混乱を避けるため私と同じ二人部屋だ。さて、こんなところか。さっさと部屋に帰れ」

「分かりました」

部屋に戻った俺達はモジモジする、、何て事はなく一人で持ち込んだトーラスマシ二期を見ていた。

「何か普段とあんまり変わらないね」

「数少ない二人部屋を俺たちに、、要らん気遣いをしやがって」

「そういえば有澤君つてやけにここの人と仲良さげに話してたよね？どういふこ

と？」

「俺の父親が大の温泉好きでな。日本全国津々浦々の温泉に赴いてはポケットマネーで寄付したりしてるんだ。ここは海も近くてお気に入りで年々10回は使ってるんだ。父は道後温泉や別府温泉みたいな有名すぎる温泉は嫌いらしくてこういった名前も聞いたことの無いような温泉を好むんだ。俺も何度か来たことがある」

「へえ。もしかして有澤重工製品の名前って、」

「ご名答。父が訪れた温泉の名前を使ってる。ちゃんと許可を取ってな」

「ふうん。そうなんだ」

他愛ない会話をしながら1日目は終わった。

## 企業連 side

「準備は出来たな？行くぞおおおお」

「落ち着いてください。お披露目が楽しみなのは分かりますから」

「我が社の新製品。気に入るといいな。重装甲大火力こそ有澤の極意！God Is

Force!

「有澤社長も落ち着いて下さい。新製品がなかなか完成せず徹夜開けなのは知ってますから。お願いですから寝てください。到着は明日ですから」

「ふむ。そうだな。では寝るとしよう」

「ふう。何とかなかったか。おい、こいつの状態はどうだ？」

「システムオールグリーン。機関、兵装共に異常無しです」

「準備完了か。建造が間に合ってよかった。さてこれを見たIS学園の連中と東博士はどんな反応するかな？ンンンン楽しみだあ」

企業連の巨大ドックの中にそびえ立つ何かの上ではこんな会話が行われていた。

? Side

「遂に明日ね、作戦決行日は。手筈はどう？」

「問題なく。仕込みは完璧です」

「それは上々。さて世に知らしめるわよ。IS神話を」

暗闇の中でそんな会話が行われていた。

? side

遂に来た！臨海学校！専用機の調整は完璧だよ箒ちゃん。あー、ちーちゃんに会うのも久しぶりだなあ。ワクワクが止まんないや。それと二人目の子ね。いっくんは理解できるけどどうしてこんな奴が動かせたんだろー。分かんないや。企業連、面白い奴等だといいなあ。なんてったって私のハッキングを防ぐような連中だからね。とつても楽しみだなー。あわよくば仲間に取り込まれるといいなあ。そう思うよね？くーちゃん？

「はい。私もそう思います」

とつ散らかった薄暗い部屋の中ではそんな会話が行われていた。

原作で簪登場は二期なので水着描写が無いんですよ。皆さん頭の中で簪の水着姿を妄想してください。それが今作での簪の姿です。

宿の名前はオリジナルです。福音事件が太平洋だったので立地的に太平洋沿いということで和歌山県に実在する温泉の名前を参考にしております。分かるかな？

多くの思惑が入り乱れる臨海学校。ここからオリジナル色が更に濃くなっていきます。次回！満を持して兎さん登場！

## 臨海学校 2日目

ここからオリジナル色の強い物語が始まります。遂に登場します巨大兵器。今回は量産モデルなので1号機となります。今日はもう一本21時に投稿します。

2日目の朝。俺を含む専用機持ちは周りを岩で囲まれた砂浜にいた。

「集まったな。今から専用機持ちは各国から届いているパッケージのインストールと調整を行う。「質問いいですか?」ん?何だ、有澤」

「この中に一名専用機を持っていない人がいるようですが、彼女は?」

「ああ。篠ノ之は、」

ちーちゃああああああああん!

「はあ」

何やら絶叫と共に岩を駆け降りてくる人間?が一人。次の瞬間織斑先生の腕がブレた。

「いだいだいよおおお。束さんの優秀な脳みそが潰れりゅうううう！」

「こんな欠陥脳みそなんぞ潰れてしまえ」

アイアンクロー、だった。目にも止まらぬ速さで繰り出されたそれは恐らく状況から察するに束博士であろう人の頭をギリギリと音をたてて潰しにかかっていた。

「ちよっとちよっと織斑先生！ヤバイ音がしてますよ！それ以上は、、」

「フッ。気にするな有澤。こいつはこの程度でどうこうなるほど柔じゃない」

そのセリフと同時に束博士はアイアンクローから脱出した。

「んもー。死ぬかと思ったよ。初手からひどいよ。ちーちゃん」

「皆が困惑している。自己紹介しろ」

「えー。めんどいなー。ハロハロー、束さんだよー、はい終わり」

「お前というやつは、、」

「さあさあまずはいっくんのISを見せてほしいなあ。ふむふむ、見たこと無い回路が生成されてる。やっぱり男の子だからかな？」

「あのお。部外者は立ち入り禁止なんですが、、うう」

緑の髪をした先生。山田先生は完全に無視されていた。それだけではない。話し

かけにいった金髪の、、確か英国の代表候補生や周りでやいのやいの言ってる生徒も完全無視されていた。これが東博士なのか、、

「さて。いっくんも終わったところで本題。やあやあ箒ちゃん。見ない内に大きくなったね。主に胸g」

ドゴォ

重い音と共に放たれたのはどこからともなく表れた木刀。それを篠ノ之さんが思いつき振り下ろしたのだ。避けられたけど。てかどっから出てきた木刀。お前さんIS持っていないだろ!?

「愛が激しいなあ箒ちゃんは。はいこれ専用機。誕生日プレゼントだよ。セツティングはもう終わってるから早速使ってみて」

「ありがとうございます」

さてさてあんなのには関わらないに限る。俺は俺のやることをしよう。どうやら混乱も収まって各々やることを始めたな。ところで俺は何をしたらいんだ? 企業連からは何も届いてないぞ?

『企業連の連中がいまこちらに向かっているそうだ。しばらく待っている、だとさ』

へえ。しかし、どうやって来るんだろ？

「織斑先生！大変です！現在この砂浜に超大型の何かが接近中とのことです！」  
慌てた様子で報告する山田先生。すると俺のISに連絡が入った。

「こちら企業連、BFF第八艦隊所属、ギガベース1号機だ。そちらのそばまで移動したんだが上陸の許可を求むと伝えてくれ」

俺は織斑先生にそう伝えた。すると

「幸いここは広大な砂浜だ。上陸も問題あるまい。許可する」

「だそうだ。上陸していいそうだ」

「了解。これより上陸する」

水平線の彼方から見えてきたのは箱。だんだん近づいて来るにつれてその異質さに気がついた。大きいのだ。まるでビルが海上を走っているようだ。見上げる巨体の上陸すると海面下に隠れていた巨大なキャタピラが現れて俺たちのそばで停止した。

「企業連所属、BFF第八艦隊旗艦、ギガベース1号機。到着しました」

下の方にあるハッチから出てきたのは恐らく艦長であろう人と父親だった。

「IS学園教諭の織斑千冬です。あの、こちらは？」

「企業連で進められているアームズフォート計画の一つです。遂先日完成したので輸送船の代わりにとこれで来た次第です」

先生と艦長らしき人は何やら話している。すると

「元気にやっているか？我が息子よ。今日はとっておきを持ってきたぞ。見るがいい！」

その声と共に大型クレーンで降りてきたのはバカデカイ大砲と新型であろうタンク脚だった。

「我が社で遂に完成した新型脚部、RAIDEN'Lと背部超大型折り畳み式グレネードキャノンOIGAMIだ。早速装備してくれ」

俺は新しい脚部と背面兵装を装備してみた。

「ぐっ、背中が重い。なんだこれは？」

「元々その脚部はOIGAMIを扱うために設計されたのだ。試しにOIGAMIを展開してくれ」

ガシャガシャと展開されたそれは砲身が18mと既存のどの兵器よりも長く、重

かった。

「それを使うには背部のユニットを両方使う。つまり他の肩武器が使えなくなる。また、地上でなら何とか発射できるが、空中で撃つと反動でロックオンが外れ機体も大きく後退するから気を付けるように。他の脚部では使えないから実質専用武器となる」

「、、最高だ！ありがとう！」

うつきうきだった。わらわらとギガベースから出てきた企業連の整備士に囲まれて俺は終始笑顔だった。

しばらく経つと企業連の連中が騒ぎ始めた。すると何やら慌てた様子で山田先生がこちらに走ってきた。

「織斑先生！緊急の報告が！」

「なんだ？あつ」

そう言うと二人は手話で会話を始めた。どうやら我々には聞かせられない内容らしい。

「全員！訓練は中止！宿に戻り広間へ集合せよ！」

何やらきな臭いな。聞いてみよう。俺はそばにいた企業連職員に聞いた。

「何があった？」

「企業連からの報告では、アメリカで開発中の軍用ISが暴走したそうで、こちらに向かっているようです」

「ほう。それは大変だな。だから訓練は中止か。もうちょっとこれで遊びたかったな」

俺は後ろ髪を引かれる思いでISをしまおうと宿へ急いだ。

東博士とアームズフォートが正式に登場です。一人の優秀な女性によって運用されるISと多くの男女問わない凡人で運用されるアームズフォート。ISってネクストに通ずる物がありますよね。



## 暴走 IS 現れる

成し遂げたぜ、流石に1日4本はきつかった。やるもんじゃありませんねこんなこと。もう二度とやりません。

俺達専用機持ちは宿の広間に集まっていた。

「現状を説明する。つい先程アメリカとイスラエルが共同開発した軍事用 IS シルバリオ・ゴスペルの福音が突如暴走を起こし、太平洋を日本へ向けて移動中とのことだ。アメリカとイスラエル両政府は IS の軍事利用を禁ずるアラスカ条約に違反しているのは当然なんだが、他国との関係悪化を恐れて同盟国の日本に秘密裏に対処してほしいとのことだ。その結果現在一番銀の福音に近く、また多くの優秀な操縦者がいるということで我々に銀の福音の対処を依頼されたという状況だ。当然だがここで見聞きしたことは外部には漏らしてはならない。もし機密漏洩が発覚すれば貴様らを拘束することになる。ここまでで質問はあるか？」

すると英国の代表候補生が挙手した。

「はい。敵の詳細な情報を求めます。情報がなくては作戦も考えられませんわ」

「いいだろう。機密情報だから扱いには気を付けろ」

そういつて出されたのは銀の福音の詳細な情報。

「メインウェポンは背部の多連装レーザー、銀の鐘ね」

「織斑先生。接敵までどのくらいですか？」

俺の問いに

「敵は超音速で飛行中だ。到着まで精々1時間といったところか」

「なるほど。時間もないようなら一撃必殺が理想か」

すると1組の皆が一夏を見つめた。

「おい！なぜ皆俺を見るんだ!？」

「『零落白夜なら一撃必殺出来るよね?』」

どうやら一夏のワンオフアピリティが一撃必殺らしい。ただ、

「どうやって敵まで運ぶか、よね。あれエネルギーバカ食いするんでしょ? 敵

まで一人で飛んでいくのは不可能だし、」

ちよおとおっと待ったあああ！

突然天井から東博士が生えてきた。

「ここは！断然！箒ちゃんの出番だよ！展開装甲を使えばなにも追加せずに超音速で飛べるんだ！ここは箒ちゃんといっくんにやらせようよ！」

俺は手をあげた

「織斑先生、俺は止めます。どうやら東博士が提案する程の作戦だ。問題なく終わるでしょう。大体俺の機体はEN兵器に弱いんですよ。機密はしっかり守るので部屋に戻らせていただきます」

「いいだろう。元々生徒がどうこうする問題ではないからな。無理強いはできません」「ありがとうございます」

「織斑先生、私も、」

自室

「どうしてお前も俺に付いてきたんだ？」

「だって、あの作戦で必要なのは篠ノ之さんと一人目だけでしょ？ 私たちいらないじゃん」

「おいおい、名前くらい覚えてやれよ。恨みがあるのは分かるがな」

「私は今後も許す気は無いから。あいつさえいなければ！」

「一夏がいなかったら簪は格納庫に行くことは無いから俺とも会うことは無かっただろうな」

「あつゝ、そう、だよ。じゃあ有澤君に会えたのもあいつのお陰、ゝになるのかな？なんか複雑」

「自分のなかで無理にでも納得しとけよ。多分あいつは簪が自分のせいで専用機が作ってもらえなかったこと知らないからな。本人に恨みをぶつけても意味無いと思うぞ」

「うーん。難しいけど頑張る」

「頑張りたまえー。俺にはどうしてやることも出来んからな。さて事件解決まで暇だしアニメでも見るか！」

「賛成！」

宿の広間

「では、織斑、篠ノ之。頼めるか？」

「はい！勿論です！」

「了解だ。千冬姉。しかし隆彦のやつ逃げやがって。男の癖に」

「今回はあくまでも自由参加だからな。それにこれから向かうのは競技場ではなく戦場だ。それを踏まえて頼むぞ」

「止めてくれよ千冬姉。不安になるじゃないか」

「何を言っているんだ一夏。私がいるだろう？専用機を手にした今、私とお前の前に敵はない！」

砂浜

「では、行ってきます」

「ああ。気を付けてな」

「一夏！私がいる。本来男なぞ背中に載せたくないが貴様は特別だ。大船に乗ったつもりで行け！」

「油断はするなよ」

「油断なんてしていません！」

飛び去る二機の機影を見ながら

「恐らく失敗するな。あの様子では。失敗すると分かかっていて出撃させなければならんとは。しかし、日本政府め！そんなに自分の首がかわいいか！」

千冬は作戦の前にこう言われていた。

あなたたち IS 学園の生徒で処理してくれ。ただし何が起こっても我らは一切関与しない。今回の作戦は表向きは存在しないのだから。

つまり成功すればそれでいい。失敗すれば勝手に生徒が手を出して自滅したと報告するということだ。

「まあ私は私に出来ることをしよう。一夏以外に一撃必殺ができるのは一人だけか、」

自室

「んっ？なんだ？すまないちょっと出る」

「電話？一時停止して待ってるね」

外に出た俺は電話に出た。

「なんだ？」

「今織斑教諭から依頼があった」

企業連からだった。

「何の？」

「今回の銀の福音だが、あの二人がしくじったら出撃して撃破ないし捕獲してほしいとのことだ」

「俺にメリットがないぞ。苦手な EN 兵器をわざわざ相手取るに値する対価を要求する」

「報酬は直接そちらで伝えるらしい。すぐに砂浜に来てくれとのことだ」

「ほお、分かった。向かうと伝えておいてくれ」

「分かりました」

## 砂浜

簪に先生に呼ばれたと言って俺は砂浜にいた。暫く待っていると織斑先生と束博士がやって来た。

「ここに来たということは引き受けてくれるんだな？」

「どういう風の吹き回しですか？ わざわざ生徒ではなく企業連として俺に依頼するとは」

「生徒としてのお前は今宿に居るからな」

「そういうことですか。で、報酬は？」

すると黙っていた束博士がこう言った。

「私が企業連に手を貸してあげる」

「へっ!?なんでまた。大体今回の事件ってあなたがやったことでしょうか？偶然IS

が暴走し、偶然こちらに向かっけていて、偶然俺達が対処する。全てこれが偶然だと？」

「最初はそのつもりだったんだよ。でも本来緊急停止できるはずの銀の福音が私からの命令を弾いてるの。多分誰かに乗っ取られてる。制御を。何かあったら箒ちゃん達が危ないの。お願い！箒ちゃんを、助けて！」

「うぐっ、止めてくださいよ。美女の涙を見たら断れないでしょう。いいでしょう引き受けます。ただしやり方はこちらに任せてください。撃破と捕獲はどっちがいいですか？」

「可能なら捕獲だ。もし捕獲に成功すれば追加報酬を約束しよう。最低でもコアと搭乗者は回収してくれ」

「分かりました。あなたの依頼を受けましょう。では準備があるので俺はこれでもし一夏達が落とされたら企業連に連絡してください。即座に出撃します」

「ああ。頼んだ。有澤」

俺は準備のため停泊中のギガベースへ向かった。

今回は銀の福音戦です。束博士って重度のコミュ障なシスコンですからね。恐らくこうなるかなあと。私の束博士像と違う！っていう人は我慢して見てください。彼女は妹思いで宇宙に行きたかった人より頭がいいだけの一般女性ですから。というかもし束博士が最初から最後まで仕込んだ事だったなら彼女が認識する数少ない人間の一夏が落ちることは無いと考え制御を乗っ取られたということにしました

## 銀の福音戦

主人公、出撃です。超音速戦闘ということであれが登場です。

俺はギガベースのカタパルトで待機していた。このまま出撃が無いといいんだけどな。この背中のを使わなくて済むからな。

俺の背中にはクーガーが作成したV ヴァンガード・オーバード・ブリスト O Bが装着された。こいつで超音

速まで加速、すれ違い様にK I K Uをぶちこむ。しくじったらO I G A M Iで叩き落とす。これが今回のプランだ。頼むから連絡来るなよ、、、

ピピピピピピピ

やっべ。フラグだったか？

俺の目の前にディスプレイが現れた。

「作戦を説明する。雇い主はIS学園教諭、織斑千冬及び篠ノ之束。目標は銀の福音の撃破ないし捕獲だ。敵は織斑一夏及び篠ノ之箒を撃墜した後こちらに接近してい



『敵IS、銀の福音の撃破を、いや待て！まだだ！これは、再起動だ?!?あり得るのか？こんなISが』

「ふっこんなこともあるうかと、食らえ！OIGAMI！」

AIの声を聞いた俺は動かれる前にOIGAMIを撃ち込んだ。

バググオオオオン！

今までとは比較にならないほどの大火力。その代わり空中で撃つためロックオンは外れ、機体が10mほど後退した。これなら、

シュン！

「何!？」

爆炎の中から背中の銀の鐘を全て失い全身ボロボロになった銀の福音が出てきた。

「軍事用ISに対して直撃弾でこれか、いい火力だ。だが生き残ったか。暴走ということで単調な動きで助かったな。ふん！フラッシュロケット！」

センサーが一時的に麻痺し動きが止まった銀の福音。人が動かしていればこんなことは無かっただろうがその大きすぎる隙を見逃すはずがなかった。

「これで止めだ！ K I K U！」

コアと搭乗者を傷つけないように、ブースターのある背中部分に K I K U を撃ち込んだところで銀の福音は解除された。落ちる搭乗者を慌てて抱き抱えようと、

「しかし K I K U が無かったら苦戦しただろうな。流星は軍専用だ」

そうぼやきながら宿へ向かった。

## 砂浜

砂浜には束博士だけが立っていた。

「本当はちーちゃんとお迎えしたかったんだけどね。落とされたいっくんに付きつきりでこっちに来れなかったんだ。まずはお礼を。ありがとう。もし君が出てくれなかったら箒ちゃんは死んでたかもしれない」

「いえいえ。依頼を遂行しただけです」

「しかし、見れば見るほど不思議だよ君は。その適正で勝っちゃうなんて」

「そんなこと無いです。企業連が優秀な機体を作ってくれるから」

「ふうん。ここで俺の実力だーとか言わない辺りその辺はわきまえてるようだね。じゃあ約束だし私は企業連に向かうよ。ただし企業連の皆が他の凡人と違うならの話だけだね」

「安心してください。オールマイティな人材はいませんが、一つの事に長けた者が大勢います。あなたを飽きさせることはないでしょう」

「じゃあ楽しみにしておくれ。本当に今日はありがとう。またね、あーくん！」  
そういうと束博士はギガベースの方へ去っていった。しかし今何て言った？あーくん？つまり俺は束博士にとって有象無象から気にする者選ばれたということか？これだけでも受けてよかったなこの依頼。さて部屋に戻るか。

### 自室

「で？何か言い訳は？」

「イエ、ナニモアリマセン」

簪の前で正座させられていた。簪は恐ろしい形相で俺を睨んでいた。暫く経つと突然簪が抱きついてきた。

「心配、したんだからあ。私は先生に呼ばれたっていうからすぐに戻ると思ったの  
にいつまでも帰ってこないし、織斑君は落とされたっていうし、すっごく心細かつ  
たんだよ!?!せめて一言言っつてよ!」

泣かせてしまった。簪を。俺は

「すまなかった。簪を巻き込みたくなかったんだよ。次からはちゃんと言うから。  
でも圧勝だったし結果オーライということだ」

すると簪が急に真顔になった。

「へえ。結果オーライ、だって?今回は相手が暴走してたから知的な動きをしな  
かったのもあって圧勝だったんでしょ?大体有澤君のISはEN兵器に弱いんだから  
もし銀の鐘を食らったらどうするつもりだったの!?!大体有澤君はいつも、」

どうやら説教はまだ続きそうだ。でも心配してくれてたのか。なんかすっごく嬉  
しいな、

「何ニヤニヤしてるの!?!ちゃんと聞いてる?」

やべえやべえちゃんと聞くとしよう。泣かせたんだからこれくらいは甘んじて受  
けなければな。

2日目はこんな激動の末終わりを迎えた。ちなみに宿の外では無断出撃しようとしたのがバレた1組の専用機持ちが説教を食らっていた。

銀の福音、あっさり撃墜です。というのもあれって人が操作してる訳じゃないので動きは悪いと思うんです。原作でも銀の鐘の圧倒的火力と速力、耐久性で一夏達は苦戦したわけで、機体の性能が高ければ案外楽に撃墜出来るかなあと。たぶんナターシャさん本人が操縦してたら十中八九負けてたと思います。

今主人公が使っているQBはコジマは使われていません。というか今作ではISでコジマ兵器は使用できません。



## 文化祭 準備編

文化祭です。原作で描写されていない一期のイベントは書くのが難しい。ほぼオリジナルになりますからね。

祝！お気に入り100件達成！本当にありがとうございます！

---

暴走事件もあり強く記憶に残った臨海学校から3ヶ月が経過した。秋と言えば文化祭である。今回は何事も起こらないといいがなあ。(フラグ)

「さて。文化祭が近いということでクラスの出店を考えましょう」

HRでは我がクラスが何をするかの議論が行われていた。黒板に書かれた候補には、

- ・ お化け屋敷
- ・ 喫茶店
- ・ 迷路

・ロシアングレネードルーレット(有澤案)

・AMIDAくじ(簪案)

があった。何やら危険そうなのがいくつか混じっているが気にしてはいけない。多数決という民意の結果無難な喫茶店になった。

☒説明しよう！AMIDAとはトーススマンに登場するトーススマンが飼っているペットのことである。口から酸を吐いたり、自爆したり、羽が生えて空を飛んだりするぞ。きゅいきゅいという独特の鳴き声にはコアなファンが存在する。AMIDAくじとはサザ○さんのように番組の最後に行われるもので、あみだくじを選びAMIDAが自爆するか、酸を吐くか、空を飛ぶか予想するというものである☒「じゃあ喫茶店やるに当たって役割分担しよっか。被服と食事と店内設計の分野に分けよう」

「私は裁縫得意だよ！」「私は料理得意！」

クラスの代表であり、リーダーである俺は各々の能力に合わせて分野を振り分けていった。

「機材の方は企業連で手配してもらおうから任せてくれ。っておい簪。店の内装に

トーラスマンを描くんじゃない。ここはいたって普通の何の変哲もない喫茶店なんだから!？」

「えー？普通じゃあ面白くないよ？」ウワメツカイ

「許可します。思う存分描いてください」

「有澤君って更識さんには甘いよねー」

「やかましい！彼女に甘くて何が悪い！」

ゆっくりと、だが着実に準備は進んでいた。ほぼ準備が終わった文化祭前日、生徒全員は体育館に集められた。壇上には生徒会長殿がいた。

「いよいよ明日が文化祭当日です。明日は多くの来客が見込まれます。挨拶等はしっかりと行ってください。それと今日皆さんを呼んだ一番の理由はこちらです！

「  
ババーンとスクリーンに写し出されたのは

織斑一夏争奪戦！織斑一夏を手にするのはどこだ!？」

「趣旨を説明するとね、今織斑君はこの部活にも属してないの。だから今回の文化祭で一番参加人数の多かった出店の部活が織斑君をゲット出来るってこと！ちなみに有澤君に関しては既に決まってるから無しね。それじゃあ明日は頑張ってる！」

体育館は歓声に包まれた。どこも一夏を欲しがっているのだ。俺は放課後生徒会室を尋ねた。

「生徒会長殿。今日のはあれはなんですか？それと俺の記憶が正しいなら俺はこの部活にも属して無いんですが？」

「実はね、この事は誰にも漏らさないでね。私の情報だと今回の文化祭で織斑君を狙う者が来るらしいのよ」

「というと？」

「どんな人かは分からないけど織斑君が狙われている以上ああやったら生徒たちが気にしてくれるかなって」

「でももし一夏を助けたとして、本当にあいつを強制的に入部させるんですか？」  
「ええ。多くの部活から織斑君は部活をしないのかってあってね。ただ今回は秘策

があるのそれは……」

「うわあ汚い。流石は会長汚い。出来レースじゃないですか」

「いいじゃない別に。勝てばいいのよ。それとあなたに関してはおあなた部活はしたくないでしょ?」

「それはそうですがいいんですか?」

「帰宅部に所属してるってことで嘘は言っていないし、あなたには悪いけどあなたは織斑君ほど人気が無いから……」

「嬉しいような悲しいような」

「それは置いといて、実はね今回の襲撃者は手練れらしいのよ。万一の時はお願いね」

「報酬次第ですがりょーかいです」

「じゃあさっさと部屋に帰りなさい。簪ちゃんが待ってるでしょ」

「ありがとうございます」

## 企業連 side

「文化祭、だそうだな」

「ええ」

「我ら企業連はIS学園に出資している。その関係で本来は出回らない文化祭参加チケットを融通してもらった。今までは興味も無かったが今年は我らのテストパイロットもいる。これは査察なのだ。けっして女の子の制服が見たいなどでは断じて無い！」

「ロリコンですか？通報しますよ？」

「残念だったな！ロリコンという病名は存在しない！故に私は正常。ビバ正常！」  
「企業連にはマトモな奴はおらんのか？見るべきは生徒ではなく程よく熟した教職員だろう？」

「「お前が言うな！」」

「ハツハツハ。身内粹で箒ちゃんからチケットを入手した私に死角はなかった！」

「おのれえええ！こうなったら数少ないチケットを巡ってバトルだ！貴様のチケット貰い受ける！」

「細胞レベルで人間越えてる私に勝てるもんか！」

その日企業連のシミュレータールームは大にぎわいだった。ちなみに束博士は2位だった。1位は新製品を手にはしゃぎの我らが社長、有澤隆文だった。ガチャとOIGAMIは偉大である。このあと強すぎたOIGAMIにシミュレーション内で制限がかかり、社長の順位は元の16位に戻るのだった。

?side

「銀の福音の暴走を利用した襲撃作戦は失敗したらしいな」

「ええ。企業連の男性操縦者の手によって阻止されました」

「だがやりようはある。そろそろIS学園の文化祭だ。この機会に織斑一夏のISを奪って来るのだ。もう一人の方は実力がある上、下手すると企業連が我々を潰しに来かねない。その点織斑一夏ならば、敵対されても精々ブリュンヒルデと天災だけだ。二人だけならどうとでも出来る」

「しかし相手は世界最強とISの産みの親ですよ？」

「やれ。失敗すれば貴様らの首が飛ぶだけだ。我らは困らん」

「分かり：：：ました」

そう言った金髪の女性は退室した。

「下っ端は辛いわね。無事に帰られるかしら？」

---

? side、一体○国企業なんだ!?!次回！文化祭当日！IS学園イベントにト  
ラブルは付き物です。今回から今まで、を、使っていたところを：：：で書いていま  
す。どんなでしょうか？



「こちらです」

「何か反応をくれ。息子よ」

「そんな暇はない！見りゃ分かるだろ!?注文は!?!」

「うーむじゃあカレーライスと……」

途中父が来たり、企業連のやべーやつが来たりあったが俺は何とかシフトを終えた。

「さて、やることは済んだな。一緒に回ろうや簪」

「いいね。まずは……」

シフトを合わせて簪と一緒に出店を巡った。メイド喫茶とかバラエティーに富んだ出店ばかりだった。買い食いしながら巡っていると、

『まもなく、生徒会主催の演劇。シンデレラを体育館で行います。興味のあるかたは是非お越しください』

「どうする?」

「見に行こうよ!」

「りょーかい」

俺は簪と手を繋いで体育館へ向かった。回りの生徒が何か言っていたが気にならなかった。考えて欲しい。隣に好きな子がいて一緒に手を繋いで歩くんだぞ？それで頭が一杯になって回りのことなんざ入ってこねえよ。

体育館には大勢の観客がいた。皆幕が上がるのを今か今かと待っている。あっ暗くなった。始まるな。

「昔昔あるところに一人の王子様と5人のお姫様がいました」  
ん？

「ある日お姫様は王様にこう言われました。「次期王となる王子の嫁になりたくば王子の冠を奪って来るのだ！」5人のお姫様は皆が王子様に恋していました。ここに王子様の冠を巡った戦いの幕が切って落とされた！」

あるええ？俺の知ってるシンデレラと話が違うぞお。こんなに殺伐とした内容だっけ？

幕が上がったステージでは一人の王子様……一夏が5人のお姫様……ありゃあ1組と2組の専用機持ちか？と戦いを繰り広げていた。おいおい、英国の代表候

補生実弾のライフル持ち込んでるぞ!? 流れ弾とか大丈夫なのか!? 破片からしてステージのセットは本物の石!? どれだけ凝ってるんだ?

「なんなんだよ! どうしてこうなったんだ!?!」

「一夏危ない!」

ギイン!

「ああ。助かったよシャル。これはどういう状況なんだ?」

「その…一夏が被ってる冠が必要なんだ。譲ってくれないかな?」

「これか? いいぜ。…ぎゃあああああああ!!!」

一夏が冠を渡そうと手で触れた瞬間悲鳴を上げ、その場で倒れて悶絶し始めた。「なんとということだあああ! 一人だけを選ぶという自責の念から王子様に電流が走る!」

おいおい。これって無理ゲーじゃないか。冠とったら一夏に電流が走るんだろ? そこからは凄かった。伊達に毎日しごかれて無い一夏はしばらくの間逃げ切っていた。しかし、

「そろそろ飽きてくる頃合いか。では突然ですが今から観客の皆様にも参加していただ

きます。さあ冠を手にするのは誰だ！」

そこからは地獄絵図だった。多くの女子生徒が入り乱れ大混乱だった。

「簪。巻き込まれると危ない。出ておこう」

「そうだね。しかしあいつってどうしてあんなに人気なんだろ？ 顔がちよっといだけで調子に乗って」

「そこまですておけ。ん？」

突然俺のISに連絡が入った。この日に緊急連絡ということとは……

「ごめん！ 察しがついてると思うけど体育館から織斑君の反応が消えたわ！ 探してちょうだい。報酬は後で支払うわ！ 至急よろしく！」

「了解。すまない簪。ちよっと呼び出しを食らった。一人で回って……ヒッ！」  
そう言った瞬間簪が真顔になった。

「この前言ったこと忘れたの？ 有澤君。何の用事なの？」

「それは……この話は誰にも言うなよ。実はかくかくしかじかでな」

「ふーん。じゃあ下手したら戦闘になるんだ。決めた。私も行く。これでも専用機持ちだし、一人より二人でしょ？」

「ぐぬぬ……分かったよ。一緒に行こう」

「で、どうやって探すの？」

「ふっふっふ。こんなこともあるかとあいつの冠には発信器がつけてあるのさ。あれっ？」

「どうしたの？」

「反応がない。上手く隠してあるから見つからないはずなんだが……バレて壊された？」

「ねえ有澤君。学園で今ジャミングがかかっているとところがあるよ。多分ここじゃないかな？」

「探知はえーな!?頼りになります。では早速向かおう」

### 男子更衣室

「一夏!無事かあああああああ!」

叫びながら突入した俺の目に飛び込んできたのは倒れた一夏と白式らしき待機状

態のISを持つ襲撃者と思われる8本足のISがいた。

「おや、誰かと思つたら二人目かい。このあたしとアラクネに挑もうっていうのかい?」

「お前は何者だ!何をしにここに来た!」

「あたしかい?あたしは亡国企業フアントムタスクのオータム様だよお!」

しかしこの時オータムは焦っていた。目的は果たしており、企業連のテストパイロットとは戦うなど命令されていたからだ。

チツ、もうちよい遅けりや逃げれたつのに。ただ戦わず逃げるなら楽さ。軽く脅してトンズラさせてもらうぜ!

ここでオータムはすぐに脇目もふらず逃げるのが最適解だった。彼女は戦うことが大好きな戦闘狂であり、手合わせ程度ならいいだろうと考えた。考えてしまった。「これでも食らいやがれえええ!」

オータムのIS。アラクネの8本のうち6本の足が隆彦に向き内蔵されたマシンガンが火を吹いた。

「やったか!?なんだたいしたことねえじゃねえか。もしかして死んだか?ハッハッ

ハッハ！」

世間一般それをフラグという。

ドガン！

「へっ？」

攻撃の返事はこちらに銃口が向き、発砲煙が上がるスナイパーライフルだった。

室内で戦闘して大丈夫なのかと思った人。設定を読み直して下さい。学園の建物は年頃の女の子が暴走してもいいようにとても頑丈に作ってあるのでグレネードもミサイルも使えます。オータムの口調が難しい。勝ち気な女って感じに書きましたが、どうでしょうか？

## 文化祭 後編

亡国企業とバトルです。この小説K I K Uとグレネードばっかり使ってるなど。でも他のマシンガンと違ってグレネードで十分代用出来ますし、ブレード以外だと出番が少ないのはしょうがない……かな？

「へっ？」

予想外の反撃にオータムは思わず動きを止めた。止めてしまった。

「止まってる敵にはK I K U！」

パイルは偉大である。スナイパーライフルが当たっていたこともありアラクネは一撃で大破、ISは解除、オータムは無様に気絶していた。俺は敵がもつ白式を奪い返すと一夏に投げた。

「しかし何があったんだ？ ISを奪われるなんて」

「あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！ 気がついたら激痛と共に白式は奴の手

にあった。

な： 何を言ってるのか、分からねーと思うが俺も何をされたのか分からなかった。頭がどうにかなりそうだった。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぞ」

「そんだけ口が回るなら大丈夫だな。倒れてたからどうしようかと思っただぞ」

「すまない。心配かけたな。そいつはどうする？」

「殺す：：のは不味いから拘束して企業連に引き渡すか。亡国企業とやらの手がかりになるやもしれん」

そう言った俺はバススロットに入れてあったワイヤーでぐるぐる巻きにした。幸い今日は企業連の連中が来てるから後始末は楽でいいな。拘束を終えオータムを担いで部屋から出るとたっちゃん先輩がいた。

「依頼は遂行しました。織斑一夏をほぼ無傷で救出。どうでしょうか？」

「完璧ね。じゃあそいつを引き渡してもらえるかしら？」

「何故？」

「そいつは貴重な情報を持つてるわ。後は私に任せなさい」

「あいにく企業連もこいつらの情報が欲しいんでね。報酬として頂いていきます」  
「報酬ね：：なら仕方がないか、でも引き出した情報は私にも頂戴ね。貴重な捕虜を譲るんだから」

「片をつけたのは俺ですが：：まあ情報に関してはいいでしょう。聞き出し次第そちらにも提供しましょう」

「それでいいわ。それと多分そいつのお仲間が外で他の専用機持ちと戦闘中なの。助太刀に行ってくれない？これは依頼ではなく命令よ。取り逃がさないで」

「分かりました。捕獲できたら彼らの身柄も頂きますよ？」

「構わないわ。その代わり：：」

「ええ。得られた情報は共有しますとも」

会話を終えた俺は呑気に学園を巡ってる企業連の連中に身柄を引き渡した後、外へ向かった。

「しかし、どうして校内はこうも落ち着いてるんだ？襲撃されているというのに」  
『この学園は企業連の設計だ。要塞として設計してある関係上建物は頑丈で外からISを用いて強硬突入はできない。現にあいつも一般客として入って来てただろう？』

襲撃されましたと放送でもしない限りここの奴等は襲撃にすら気づかんよ』

「だから他の仲間らしきは学園外で暴れてるのか。簪、行くぞ」

「言われなくとも！2人なら久しぶりにあれやるよ！」

「あれか、久々だな。行くぞ！」

## 学園外、海上

「くっこいつ強い！」

「鈴！避ける！支援砲撃を開始する！」

オルコット、凰、ボーデヴィツヒ、篠ノ之、デュノアら5人は1人相手に苦戦を強いられていた。

「ふっその程度か。貴様らに用はない」

「何ですって!?!」

「用があるのはあいつだけだ」

バイザーで顔を隠した恐らく少女であろう者は焦っていた。

オータムの反応が消えて暫く経つ。恐らく落とされたなあいつ。助けてやらんと

いけないがこいつらが邪魔だ。どうすれば!?

しかしここで到着したのだ。彼が。

「お前ら全員その空域から離脱しろ！ 簪！ 制御任せたぞ！」

「久しぶりのあれ行くよー！」

俺は両肩のミサイルコンテナに大量のVTFミサイルを装填した。

「ミサイルカーニバルです。派手に行きましょう」

「なっこれは!？」

少女の前に広がったのは辺り一面を埋め尽くすミサイル。シールドビットで防ぐも多勢に無勢だった。

「ミサイルカーニバルは爽快だな！ おっ」

俺はISが解除され、落下する少女を受け止めた。

「こんな奴がパイロットだったのか。なんかこいつ織斑先生に似ているような……  
まあいっか」

少女を担いだ俺は学園に戻り、少女を引き渡した後は何事も無かったかのように文化祭に参加した。ちなみに一夏争奪戦は生徒会が優勝した。参加人数の多い出

し物、生徒会の出し物のシンデレラには体育館にいたほぼ全員が参加したためこうなった。汚い戦法である。

### 企業連 side

「文化祭はいい収穫があったな。まさか亡国企業のメンバー二人を捕虜にするとはな」

「まだ二人は目を覚まさないので情報は聞き出せていませんが、いつ起きてもいいように尋問の用意はしてあります」

「それは上々。しかしあんなことになるとはな……」

それは数時間前に遡る。捕虜2名を入手した企業連は文化祭を心行くまで堪能した後帰ろうと車に乗ろうとした瞬間金髪の女性が近づいて来たのだ。全員が戦闘体制を取るなか女性はこう切り出した。

「私はスコール。亡国企業の一人で捕まったオータムの恋人よ」

「いきなりなんだ。捕虜を返せと言うのか？それは出来んぞ」

「違うのそうじゃないわ。実は……」

彼女の口から語られたのは自分達が今の亡国企業に不満を持っていること。今回の作戦は尻尾切りのようなものだという事。良ければ捕虜を企業連で保護してほしいとのことだった。

「で、それを話した上で貴様は何を我々に提供するのだ？我々は企業だ。保護する」という対価に見合うだけの報酬を要求する」

「そうね、私が二重スパイをするって言うのはどう？」

「出来るのか？そんなことが」

「本来ならここで死んでる筈の身よ。それにあなた達がやるよりは成功率は高いと思わない？」

「確かにその通りだな。ただ裏切らないとも限らん。首輪は着けさせてもらおうぞ」

「あらやだ。そんな趣味が？」

「本当に着けてやろうか？我々の言う首輪とはいつでも貴様を爆破処理できる小型爆弾を貴様に埋め込むということだ」

「まあ仕方ないわね。それでいいわ」

そして作られたシナリオはこうだ。スコール、オータム、M(スコールに教えて

もらった少女の名前)の3名はIS学園に潜入。任務に失敗しMとオータムは死亡。スコールは命からがら帰還するというものだ。

「二重スパイ、期待しているぞ。一応こちらの情報も少しは提供しておこう。無論虚偽のものだがな」

「あなたたち企業連は敵に回してはいけないって今実感したわ。もし失敗したら遠慮なく私を処理して頂戴ね」

「心得た。では」

そういうと彼らは別れた。それぞれの成すべき事を成すために。

文化祭これまたあっさり終了です。今作での原作変更はあの3人組を企業連に引き込むです。原作では亡国企業って謎の組織で作者自身も把握しきれてないっぽいんですよね。今作ではラインアークみたいに最初はよかったのに多くの人が入ってきて当初の目的を見失っている設定です。原作至高の方、誠に申し訳ありません。

我慢して見ていって下さい。



## 企業連はやっぱりキチガイ

簪の専用機強化です。機体は弄れないので武装強化です。

年に2回行われるタッグトーナメント。今回も当然簪と組むわけだが何と今回は専用機だけのペアとそれ以外を分けると言うのだ。何でも1つの学年にこれだけの専用機持ちが集まるのは異例らしく、急遽こうなった。

「なあ簪。前回派手にやったせいで十中八九対策されてるよな？」

「多分そう。私ならそうする。別の作戦考える？」

「ついでに企業連にいつて何かいい装備がないか聞いてみよう。簪もどう？」

「当然一緒に行くよ」

「じゃあ週末にでもまた1泊2日で行こうか」

「おっけー」

しかし彼は忘れていた。簪と付き合って初の企業連訪問。当然企業連中にこの事

は広まっている訳で、

週末、企業連本部

「遂に付き合い始めたか。ところで結婚はいっ」

ドゴォ！

取り合えずふざけた事を抜かす主任を殴る。おいこら顔を赤らめるんじゃない簪  
さんや。

「いってて、またかよ。ンンッ ようこそ企業連へ。歓迎しよう。盛大にな」

「さて、次のタッグトーナメントの件なんだが……」

「おいしいい！無視？無視なの？せっかく台詞が決まったのに！」

「最初が無けりゃあ完璧だったよ」

「ぐぬう。覚えてろよ。ふふっ」

「何か言ったか？」

「いんやあ。何も」

「ならいいが……」

俺達は企業連本部にある会議室に案内された。そこには各企業の研究者達が集まっていた。

「「ようこそ！ええ、新製品は出来ております。ご覧ください！」」

全員目がイってやがる。何があったんだ？

「お前ら何があったんだ？目が凄いことになってるぞ？」

「「東博士のお陰で詰まっていた研究が捗るんじゃああああ……」」

なるほど。どうやら東博士は想像以上にこいつらに馴染んでるようだ。

「あれっ、東博士は？」

「彼女は現在トーラスとコジマ粒子の研究に朝から晩まで没頭しています。彼女曰く「欠陥まみれ!?でもエネルギー源としては最高にいい!?腕が鳴るぜえええ！」と大はしゃぎで研究中です。確か1週間ほど籠りつきりだとか」

「大丈夫なのか？まあそれは置いといてだ、タッグということでは何かいいものはないか？」

「既に有澤君の専用機に関してはやり尽くしています。あえて言うなら、対EN塗装をするくらいでしょうか？」

「その塗装はどれくらい効果がある？」

「毎試合塗り直さないとイケませんが、標準的なレーザーライフル程度であれば半減位は出来ます。同じ場所に二度食らうと効果は発揮できませんが、そんなスナイパーはそうそう居ません」

「ならその塗料を積んでおいてくれ。簪、どうやらそれ以外は全てお前さんのらしい。目が血走ってるが相手してやれ」

「怖いよお」

「側にいてやるからさ」

「「甘ああああああああい！」」

「やかましい。さっさとやれ。変態共」

「「我々の業界では誉め言葉です！」」

「こいつら罵倒が効かねえ。怖ええよ」

彼らが開発した物の大半はやべー物だった。

GA社

「新開発の大型ミサイルコンテナです。これであなた単騎でも性能を使いきれます

！」

「でもこれ積んだら積載量が……私のはタンクじゃ無いんだよ？」

「重さ？ ナニソレオイシイノ？」

GAは重量度外視の設計のため不採用。

M S A C及び有澤重工

「新開発のグレネードミサイルです。重さ、サイズそのままに威力、爆発半径が大きくなっていきます。有澤重工の弾頭は凄いですね。もっと早く使えばよかった」

「爆発範囲が広すぎてタッグじゃ使えなさそう。でも下さい。単騎の時に使えそう」  
新型グレネードミサイル、採用。

有澤重工

「我々は気がついたのだ。グレネードだけではやっていけないと。この新開発の薙刀はどうだ？ 刀身に仕込んだ小型爆薬が切りつけると同時に炸裂。相手は死ぬ」

「使う度に切れ味落ちるし、それ炸裂したら私も巻き込まれるよね？ 私は有澤君ほど堅くないよ？」

「なんと!？」

有澤重工、自爆仕様のため不採用。

「いいや。まだだ。この盾はどうだ？とても頑丈で並みのグレネードなら完全に防げるぞ！」

「すいません。重すぎて使えません」

重量過多により不採用。

テクノクラート

「新開発のロケットです。ハラシヨオオオオオオオオオオオオ！」

「五月蠅いです。ロケットはそもそも当たりませんしミサイルかグレネードで十分です」

ロケット、ミサイルとグレネードに完全敗北。不採用。

B F F 社

「皆さんは簪さんの専用機のココンセプトを忘れてますね。こちら、新開発の軽量スナイパーライフルです。1発辺りの威力を犠牲に発射速度と命中率を上げてあります。どうでしょう？」

「文句無しです。下さい」

スナイパーライフル、文句無しの採用。

インテリオルユニオン

「軽量のレーザーライフルです。内臓バッテリー採用で機体のエネルギーを使わず射撃が出来ます。ただ、弾数制限がありますが」

「最高です。遂に私もレーザーデビュー！下さい！」

レーザーライフル、文句無しの採用。

オーメルサイエンステクノロジー

「新開発のバトルライフルです。既存の物より軽く、火力は高く、集弾性も良好です」

「今までのが今までのだけに地味だけど凄いやこれ！下さい」

地味だが性能がとて面白いバトルライフル。採用。

アルゼブラ社

「こいつが新開発のつつきじゃ。軽く、反動が小さい代わりにK I K Uのような超火力はない。打ち込んだ反動で連射が可能じゃけえうまいこと使ってくれや」

「とつつき！ロマン！下さい！」

とつつき、採用。

「さあこの辺でアリーナに行って試験だ。さあ行こうか」

「えっでももう一人寂しそうにこっちを見るよ？聞かなくていいの？」

「トーラスだぞ!? マトモはずがない！」

「トーラスはかっこいいもん！どうぞ紹介してください！」

トーラス社

「こいつが、ヒヒッ試作品のコジマジエネレーター、コジマライフル、コジマグレネード、コジマパイル、コジマミサイルです。どうです？いい色してるでしょう？」

「ねえ、これってトーラスマンの？」

「おおおおお！もしやファンの方ですか!? ええ！こちら、遂に完成したコジマ兵器です！」

「ちなみに汚染は？」

「バリバリします。ちなみに除染機はまだ未完成です。フヒヒッ」

「「急いでこいつをここから叩き出せ！今すぐ！早急に！」」

不気味な研究者は会議室に緑色のナニかを漂わせつつつまみ出された。俺達はアリーナに慌てて移動した。

「やっぱりキチガイじゃねえかトールラスはよお。なんかまだ息苦しいぞ」

「その程度で済んでよかったですね。ちなみにあの研究者は数十回吐血と気絶を繰り返し、三回ほど生死の境をさ迷いながらコジマ粒子と戯れていたらなぜかコジマ粒子が効かない体になったらしいです。何事も慣れですね」

「慣れる前に死ぬだろ普通！」

既にコジマ粒子の増殖、制御は完了してます。ただ、あの毒性は未解決です。東博士なら何とかしてくれる……はず。



## 武装テスト

採用された比較的マトモそうな武装。でも企業連がマトモなものを作る訳もなく

……

企業連アリーナ

「結局採用されたのはどれなんだ？」

「えっとね、グレネードミサイルとスナイパーライフル、レーザーライフルにバトルライフル、最後に連射式とっつきだよ！」

「最後のを除けば比較的マトモそうだな。さっそく撃ってみてくれ。俺も楽しみだ」「じゃあまずはグレネードミサイルからだね。サイズとかはそのままでから元のミサイルコンテナが使えるね。ターゲットロック、ふあいあー！」

シュバー！

ドッガアアアアン！

凄まじい威力。至近弾でも驚異になりそうな爆炎であった。

「やっぱりタッグじゃ使えなさそうだね」

「なんだ、OIGAMIよりシヨボいじゃないか」

「「あんなのと比べないで！」」

簪と職員に怒られてしまった。俺のなかではOIGAMIが基準になるからどれも爆発がシヨボいんだよなあ。

「次はスナイパーライフル！」

2mの銃身を持つライフルを立ち姿勢で構えた簪は1km先のターゲットを狙い始めた

バンバンバン！

小気味良い発射速度と高い安定性、低い単発火力は手数でカバーする。

「おもしろーい！すごいよく当たるよこれ。連射しても銃が全然ブレないよ！」  
「軽い音だな。まあ簪は軽量機だからスナイパーキャノンとかは積めないからしゃー

ないのか。でも初速が早いな、貫通力は高そうだ」

その眩きを聞いたのだろう。BFFの職員が

「1km先の厚さ100mmの鉄板位なら余裕で貫通できますよ！」

誇らしげに語っていた。

「そしてそして、待ちに待ったレーザーライフル！」

シユンシユン！

耳を澄まさないと聞こえないほど静かな射撃音。

「レーザーライフルってこんなに静かなんだ！凄いい！」

「レーザーは風切り音はしませんし、それは射程の短いカービンモデルなので出力も小さいので冷却ファンも静かなんです。弾道も無色で隠密能力が高いです。まあ世に出回ってるレーザーは見栄え重視で弾道が見えたりしますがね」

「うーんアニメみたいじゃなかつこよさは無いけど実用性はすごく高いね！」

「ええ、射程が短いとはいえ有効射程は500mほどありますから試合等では必要十分かと」

「レーザーっていいね！あれっ？どうしたの有澤君？」

「射撃音無し、弾道が見えない、EN属性……俺勝てない？」

「そういえば有澤君ってENに滅法弱かったね。少しは有効打になるかな？」

「いいもん！対EN塗装4度塗りするもん！」

「言いにくいのですが、あの塗装は重ね塗りしても効果は一緒です」

「どないせえっちゅうねん!!」

「はいはい次行くよー。次はくバトルライフル! ってバトルライフルって何なの?  
?」

「バトルライフルとは汎用性の高い射撃兵器です。一般的にはアサルトライフルとも言いますね。企業連ではバトルライフルと表記します」

「ふうん。ようはアサルトライフルなのね。どれどれ」

ドドドドドドド!

高い安定性と高い発射レートはとても高い次元でまとまっていた。

「凄い! 癖がなくて扱いやすいし単発もフルオートも問題なし! まさしく万能だよこれ!」

「ただし、狙撃はスナイパーライフルに劣りますし、連射もマシンガンや機関銃、ガトリングに劣るので器用貧乏にならないよう上手に使ってください」

「分かりました。最後はこれだー! とっつき!」

ドガガガン!

重い音が4回響いた。構造としては一撃叩き込んだら反動で杭が元の位置に戻る。これを4回繰り返しているのだ。猛スピードで。

「凄いね！重量は軽いのに瞬間火力は有澤君のKIKU並みだよ！」

「ここまでのいいこと尽くしに聞こえるじゃろうが欠点が1つあるんじゃない」

「何ですか？」

「構造上4発全て叩き込めるのはごく稀じゃ。相手が柔らかかったり、衝撃逃がされたりしたら十分な反動が生まれんけえ2発目以降出てこんのじゃ。そうなたら軽い貧弱なただのパイルバンカーじゃ」

「分かりました。気を付けます」

「それと最後にわしら全員から一言」

「「データ取りしっかりお願いね！」」

「タダで使わせていただくんです。それくらいはしっかりやります。それじゃあ相手手になってね有澤君♪」

「やってやらああ！どっからでもかかってこいやあ！」

なおレーザーライフルで滅多撃ちにあい、4連パイルで隆彦は倒れた。

「そういえばあいつの専用機は有澤タンクじゃったのう。数少ない4発全て入り  
そんな機体じゃのう」

高機動でレーザーにパイル、悪すぎたのだった、相性が。

その後はまた二人部屋が用意されておりダブルベットに二人でくっついて寝たり  
(お互い顔真っ赤で眠れず)翌日目の下に隈を作り職員に弄られたり、帰る寸前に  
主任が

「結婚式には呼んでくれよおお！」

という特大の爆弾を落としてくれたお陰で道中お互い会話が無かったりした。な  
お帰ってから隆彦は生徒会長から2時間ほどお話があったという。

### 亡国企業 side

「で、貴様はおめおめと逃げ帰ったということか。専用機を持ちながら、二人を見  
捨てて」

「それに関しては否定しません。事実ですから。ですが収穫はありました。これを  
どうぞ」

「なんだこれは。なんのデータだ？念のため独立パソコンで閲覧させてもらおう……これは！」

「ええ。企業連の極秘情報です。混乱に乗じて企業連から奪って来ました。まだ世に出回っていないIS武器のデータ等です。特に武装データは二人目の有澤隆彦の機体の攻略に役立つかと。奴の機体は全てそれらのパーツで構成されています」

「なるほど、よくやった。今後もよろしく頼むぞ」

「了解」

そう言ったスコールは自室に戻るのだった。口元に笑みを浮かべながら。

---

当然報告されたデータはそれっぽい虚偽データです。次回はタッグトーナメント

をお送りいたします。

すいません。前回の話でシード枠と書きましたがよく考えたら一年生の専用機持ちだけでペアを組んだら偶数組になることに気がついたのでシード枠という表記を消しました。最近投稿後編集しなくて済んだのでとても悔しいです。以後気を付けます。

## 第二回タッグトーナメント 第一試合

さあ第二回のタッグトーナメントです。アニメでどうだったかは忘れましたが今作では相手のSEゲージを見ることが出来ます。ただしゲージだけで分母は分からない仕様です。

---

タッグトーナメント当日。俺はピットで簪と作戦の最終確認をしていた。といってもそんな大層なこととはしていない。簡単に最初の役割決めをしたただけだ。

「さて、取り敢えずは初戦だ。ルールは把握してるな？」

「もちろん」

今回のルールはトーナメントといっても専用機持ちに関してはトーナメントではない。人数が多いとはいえトーナメントには4ペアと少なすぎるため専用機持ちのみ総当たり戦とし、勝利数が一番多い組が優勝となる。

「そいつはよかった」

では第一試合、有澤×更識ペア VS デュノア×ボーデヴィツヒペア！選手は入場してください。

「じゃ、行こうか」

俺と簪はアリーナに降り立ち相手のペアと向かい合った。確かドイツの軍人さんと、企業連以外では割と大きい企業のデュノアか。一筋縄ではいかんぞこれは。

では、試合開始！

「ミサイルカーニバルです。派手にいきましょう」

俺は初手にミサイルカーニバルを選んだ。しかし、

「何！」

黒いISが手をかざすとミサイルが全てその場で停止したのだ。

「一体なんなんだそれは!？」

「教えると思うか!？」

「いんや、全然」

しかし参ったな。見た感じ範囲は近距離、でも一方向しか防げない？表情を見るにあれだけのミサイルを止めるには相当な集中力があると見える。なら全方向か

ら攻めるまで！

「簪！」

口に出すと相手に知られるためチャットで簪にミサイルを少し回り込ませて背後から狙うようにお願いした。こっちを見て微笑んだしちゃんと伝わったらしい。

シュルルル

三本のミサイルがラウラの背後に飛んでいった。集中が割けないラウラはこれで落ちる：：訳もなく、そこは軍人。慌てずAICを解除するとワイヤーブレードで致命傷となりうるミサイルを迎撃しながら回避した。

「流石はドイツの軍人さんだ」

「ほう。知っているのか」

もう一回ミサイルカーニバル行けるか？ん？

視界の隅には

「ごめん。オレンジのラファールに手一杯で援護できない！」

というメッセージが、慌てて振り向くとそこにはラファールと撃ち合う簪がいた。

「くそっ忘れてた。第二世代機とはいえ代表候補生だったな。弱い訳が、ガッ」

「戦闘中に余所見とは嘗められたものだな」

見ればなにやら手元からレーザーブレードを展開させ俺に切りかかっていた。

「ちっくしょー」

そう。彼にも弱点はある。レーザー等のEN兵器に滅法弱いことである。

くそっ今のでSE5000持ってかれた。

「しかし堅いな。今ので半分も削れんとは」

「あいにくSEの多さと積載量に関しては負けなしでね！ASミサイル！マシンガン  
！」

ASミサイルをばらまきながらマシンガンで攻撃。背後からのミサイルと正面からマシンガン。さあどう対処する？

「ふん！」

ワイヤーブレードでミサイルを迎撃しつつ、レーザーブレードでマシンガンの弾を迎撃、そしてお返しとばかりに肩の大型レールガンを放ってきた。しかし、

ガキイイイン

「ふはははは！そんなへなちよこな弾じゃあ傷一つ付かんぞ！」

あのワイヤーブレードが邪魔だな。何とかしてワイヤーを封じなくては。

「くっやはり堅い！」

レールガンが弾かれた!? となると有効打になるのはプラズマ手刀だけか、しかし接近は自殺行為だぞ!? 一体どうすれば。シャルロットの方も苦戦してて援護は見込めない。くっ！ だがやつは比較的鈍重な部類の私より遥かに鈍重。やりようはある！

簪 side

こいつ旧式だって侮ってたけど強い！ と言うか戦い方がいやらしい！

距離を詰めれば引き撃ちされ、距離を離せばブレードで踏み込まれる。ひとえにシャルロットの瞬間切替ラビッド・スイッチの賜物である。瞬時に武器を変え遠距離と近距離の両方をこなせるのが彼女の強みである。しかしシャルロットも決して有利では無かった。

「厳しいなあ。機体の性能差もあるけど相手は近距離は薙刀。遠距離は荷電粒子砲。今はこっちのペースにのせてなんとかなってるけど最初から武器を構えてるあっち

の方が有利だし、さっさと決着を着ける！」

シャルロットは引き撃ちを続けながら盾を構える。そしていきなり簪に向けて  
イクニッションブースト  
瞬時加速を行った。

「くそっ間に合え！ってえええ！」

慌てて薙刀で迎撃しようとした簪の目に飛び込んできたのはパカッと割れ、中から凶悪な一本の杭が覗く盾だったものだった。盾殺しシールド・ピアスといわれるそれは簪に命中した。

更識簪、シールドエネルギーエンプティ。

無情にもそのアナウンスが響いた。

「ごめん、負けちゃったよ。気をつけて、そいつとつき持ってる」  
簪に出来ることはメッセージで警告を送ること位だった。

有澤 side

流石は軍人だ。なかなか決まらねえな。ん？



凄まじい爆炎と衝撃波がアリーナを包み込んだ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ及びシャルロット・デュノア、シールドエネルギーエンブティ。

勝者、有澤×更識ペア！

ワアアアアア！

大歓声の中俺はピットに戻った。ピットでは簪が待っていた。

「お疲れ様。なんか私がない方がやり易かったかな？」

「そんなことないよ。正直相手が挟み撃ちせずに向かってきたらどうなったか分からなかった。運がよかったんだよ今回は」

「勝って兜のなんとやら、だね。次も頑張ろうね」

「おう！」

後2組か、気を引き締めて行こう。

第一試合終了です。やっぱりOIGAMIは強いですね。ただし格納状態で呼び出すので展開には時間がかかります。今回は装備と同時に展開開始、QTで狙う時点で展開が完了しています。プラモデルを買ったんですがOWよりOWしてますねあれ。まさしく規格外というか、それを標準で装備できるネクストが規格外なのか。



## 第二回タッグトーナメント 第二試合

最近とある戦艦を作るゲームにはまっている筆者です。スマホのゲームなんですが、バッテリーを食い荒らす以外は中々にいいゲームでした。実装当初はクソゲーでしたが数々の改悪と改善を繰り返して今では最初よりマシな普通のゲームになっています。一応ゲーム名前は出しませんがもしかしたら読者の中にもやっている方がいるかもですね。

というかISって漫画版とアニメでは結構な違いがあるんですね。そのせいで混乱中です。なんかストーリーが滅茶苦茶になってる気がします但现在さら修正もしようがないのでこのままいきます。どうか最後までお付き合いください。

---

専用機持ちによる総当たり戦、第三試合は有澤×更識ペア VS オルコット×凰ペアだああ！

「簪、今回はグレネードミサイルを使ってくれ」

「大丈夫なの？十中八九巻き込むよ？」

「俺を誰だと思ってる？こと実弾防御に関しては他の追隨を許さない有澤隆彦様だぞ？」

「巻き込まれて落ちても恨まないでね」

「当然よ、ちなみにこいつは真っ向からOIGAMIを食らっても1発は耐えられるぞ」

「有澤君の機体が凄いのかOIGAMIが凄いのか分からないよ。少なくとも普通のISはあれで一発大破だろうね」

では選手は入場してください！

「前回ぶりね」

「ああ、今回も勝たせてもらうぞ。EN対策はバッチリだ」

「ほほう。前回のようにうまくいくとは考えないことね！」

では、試合開始！

「簪！」

「おっけー！」

初手は新兵器のグレネードミサイルを発射した。前回に爆風でビットを持っていかれたことを覚えているセシリアはビットを使わずに自慢のスナイパーライフルで迎撃しようとした。しかしあまりの数に迎撃しきれない。その分は嵐が請け負った。

「すみません嵐さん。撃ち漏らしましたわ」

「大丈夫！でも気を付けて。前回よりミサイルが強力になってる！」

「ですわね！」

迎撃ついでにセシリアは隆彦目掛けて狙撃。避けられる訳もなく直撃した。

「やった!?!とは言いませんわよ。どうせまだ生き残ってますわ」

「当然だ！」

すげえな対EN塗装は。ダメージがかなり軽減されてる。同じところに撃たれたら不味いがそこまでの腕前が……

ピシユン、ピシユン

あったわ。なんつー正確な狙撃!?! 一点だけを集中放火とは!?!

「どうやらダメージを軽減出来るのは一回きりのようですわね！」

「くそっしやらないな。簪！ちょっと視界が潰れるぞ！」

そういつた俺はグレネードを足元に目掛けて放った。地面に着弾したグレネードは辺り一面を砂埃と爆炎で包み込んだ。

「目隠しのつもりですか？でも無駄ですわ！」

ISにはハイパーセンサーというものがあり、例え視界がゼロでも問題なく戦えるのだ。が、

「あいにくこいつの狙いは目隠しじゃねえよ！」

ピシユン

直撃したレーザー。しかしさっきと違いダメージがほとんど入っていない。

「どういうことですか？」

「簡単な話さ。光学兵器は大气すらも邪魔になる兵器だ。砂埃を使えば無視できるレベルのダメージに軽減できるってことよ！」

あまり知られていないが光学兵器は光で攻撃するのではなく粒子を飛ばして攻撃するのだ。砂埃などが充満する環境では数メートルも飛ばなくなってしまうのだ。

「これで青い方は無力化した！二人でもう片方を落とすぞ！」

「この程度で無力化？ 鈴さん！」

「りょーかい！」

砂埃で射線が切れたセシリアは風の衝撃砲で砂埃を吹き飛ばして攻撃を始めた。「くそっ！ 思ったより厄介だな。衝撃砲ってやつは！ これじゃあ砂埃の意味がないじゃないか！」

ガチタン故に回避が難しい隆彦は徐々に削られていた。簪は援護しようにもあまり頑丈ではないため手が出せずにいた。

『機体損傷40%』

「くそっこうなったら、簪！ 俺から距離をとれ！ OIGAMI！」  
肩には全てを解決してくれる暴力、OIGAMIが構えられた。

「食らっとけええええ！」

ドガン！

放たれたグレネードは正確にセシリアの元へ飛んでいったのだが……

「こんな弾速で当たると思いました!？」

避けられた。爆風を恐れてかなりの距離を取って、が。

バツグオオオオオン!!!

既存のどのグレネードも越える規格外の火力は余裕でセシリアと凰さえも巻き込んだ。

セシリア side

あんな方法でレーザーを防がれるとは思ってませんでしたわ。でも鈴さんの援護がある今なら落とせる！ってあら？あれは……グレネードキャノン？随分大きいですが、当たらなければどうということはありませんわ！

バツグオオオオオン!!!

「きゃあああああ！」

おかしい！ちゃんと大きく避けたはず。なのになぜ!?

「なんなんですかの!?!あの一撃は！」

爆発半径からして回避は不可能。くっ、ここが開けた場所ならまだしもここは狭いアリーナ、どうすればいいんですの？

「流石はO I G A M Iだな少々避けたくらいじゃ爆風からは逃げられんよ。ハッハッハ」

「いつも思うけどそれってかなり鬼畜だよな」

「その分精度は悪いし弾数も少ないうえ隙が大きいから問題ないだろ？」

「一撃で決まるならその欠点全部無くなるよね？」

「まあそうとも言えるな。どれまだ終わってないようだしもう一発」

バググオオオオオン!!!

「フハハハハハハハハ！は？」

爆煙で見えなくなったところにもう一発叩き込んで高笑いする隆彦の目に飛び込んだのは至近距離に迫る風の大型ブレードだった。

ガギン！

「くっ、確かに当たったはず。どんなからくりだ!？」

「セシリアが庇ってくれたのよ！この間合いじゃあそれは使えないし、同士討ちが怖くて援護もないわね！」

「ぐぬう、このお！………なんてな。やれ簪」

常に自分と簪の間に隆彦が来るように立ち回ってた風の目に飛び込んだのは大量のミサイル。

「同士討ち!?馬鹿じゃないの!?!」

「俺は実弾には滅法強い上、俺が落ちても貴様を落とせば簪が生き残って勝利だ。ダメ押しにこいつも食らっとけ」

ボガアアアアン!

着弾したミサイルと隆彦のグレネードアーマーが炸裂し

嵐鈴音及び有澤隆彦、シールドエネルギーエンプティ。勝者、有澤×更識ペア！  
ワアアアアア!

ピット内

「いやあ危なかつたな今回は」

「接近されたらまともな戦闘手段がグレネードアーマーしかないのは考えものだね。特に接近戦が得意な相手だとそれ以外打つ手が無くなるよね」

「こればかりはしゃーない。今さら剣術なぞ学んだところで役に立たん。第一俺の機体は中遠距離戦闘を目指した機体だからな。接近戦は簪に任せるよ」

「次も多分有澤君が狙われるから気を付けて。相手はどっちも接近戦が得意だから織斑一夏に篠ノ之箒、か。相手にとって不足なし！」

「次も勝って優勝するよ。相手も全勝してるから、全力で行くよ！」

「おうとも！」

OIGAMIは10発しか弾がありません。直接装填技術で発射速度は5秒で1発です。普通に弾切れを起こします。爆発半径がでかいのでアリーナでは無双しそうですね、大きい為に接近されると使えないという。離ればOIGAMI、近寄ればグレネードアーマー、あれっ？これ隙が無くないか？

よく漫画とかで青いビームを撃ったりしてますが現実だと地球上でレーザー兵器って非効率過ぎるんですね。大気が邪魔になるのでレーザーが有効なのは宇宙空間という。でも一瞬で着弾する点や距離によって弾が落ちたり、風の影響を受けないというメリットも一応あります。

すみません。年末年始忙しいので次の話から毎週日曜日、18時投稿になります。多分3月まで続きます。どうかご理解下さい。

## 無人機襲撃

あっさり終了です。企業連が要塞に魔改造してしまった学園にそう易々と侵入なぞ出来ません。それが無人機ならなおさらです。

アンケートの結果、創作武器は導入します。ただ、本格的に出せるのはオリジナル展開に突入してからのなのでもう少し後ですね。コメントで創作武器の考案をしてくれてもいいですよ？（露骨なコメ稼ぎ）

ビービービービー！

ピットで出番を待つ俺達に突如サイレンが響き渡った。

〔現在、学園に所属不明機が接近中。防衛システム起動中。生徒の皆さんは直ちに地下通路へ避難してください〕

「なんだ!?何が起きている!?!」

『現在太平洋方面から所属不明機が接近中とのことだ。数は……24機!? なんて数だ。時速900kmで接近中。到着予定時刻は後5分といったところか』

「簪！ 取り敢えず先生のところへ行くこう！」

「だね！」

トラブルの時は織斑先生。先生のところへ行くと既に他の専用機持ちが集まっていた。

「状況を説明する。現在IS学園に向けて所属不明機が24機接近中との報告があった。本土に増援を要請したが到着までに1時間はかかるらしい。すまないが貴様らには時間稼ぎをしてもらう」

「機体の詳細は分かりますか？」

「あいにく分かっているのは数だけだ。どんな敵か分からない以上慎重に行動しろ」

「「了解！」」

解散した俺たちは各自バラけて海岸に展開した。

「敵機接近まで後一分だ。気を抜くなよ？」

「当然だよ。有澤君も気を付けてね」

「もちろんさ。来るぞ！迎撃開始！」

飛んできた機体はとも見覚えのあるタンク型機体だった。

「ありゃあV O Bのようなもので飛んできたのか。しかしあちこちから煙吹いてるぞ？」

『解析の結果あれは無人機だそうだ。煙を吹いているのは学園の防衛システムの長距離実弾砲が命中したらしい。予想通り実弾に強い機体のようだ』

「学園にそんなのあったのか!？」

思わず振り向くと学園の中心にある訳の分からないオブジェが割れて下からデカイ大砲が現れていた。

「なんちゅうもんを設置しとるんだ!?!まあ今はともありがたいな。行くぞ！」

『待て！下がれ！他の奴等もだ!！』

それを聞いた俺は慌てて全員に

「今すぐ下がれ！なんかヤバイ！」

全員が下がった次の瞬間、学園の回りを囲む防波堤が瞬いた。次の瞬間ズガガガン！

腹に響く爆音がしたと思ったら爆炎に包まれ敵影は消えていた。

「一体何が!？」

すると織斑先生から無線が入った。

「無人機は全て消滅した。帰投せよ。しかし企業連め。何でものを学舎に設置してくれたんだ！」

何やら聞こえた気がしたが取り敢えず帰投することにした。戻ると何やら疲れた表情の織斑先生が立っていた。

「無事に終わってよかった。どうやら結果的に出撃の必要は無かったようだがな。

ひとまずアリーナに戻れ。それと、有澤は残れ」

「「はい！」」

「で、あれはなんだ有澤」

「俺に聞かれましたも。学園にあんなのがあったなんて知りませんでした」

「ふむ、嘘は言っていないらしいな。すまない、時間を取らせた。貴様も戻れ」

「りょーかいです」

「しかし無人機とはな、今回は迎撃システムに助けられたが奴等の性能はともい  
いものだった。もし交戦していたら犠牲者が出たかもな。一体誰の首輪がついてい  
たものか……」

走り去る有澤の背中を見ながら千冬はそう呟いた。

企業連 side

「どうやらIS学園が襲撃されたらしいな。被害は？」

「防衛システムにより被害は皆無でした。あの長距離実弾砲が役立つ模様です」

「試作品とはいえAFに搭載予定の兵器だ。予定外のことだったが試験運用が出来る。あれは大っぴらに試験出来ないからな。今回の無人機程度なら容易に迎撃出来ることが判明した」

「しかし、今回の一件で各国から問い合わせが殺到しております。あの兵器はなんなのか、なぜあんなものを設置した、憲法違反だ、などです」

「あれがなければ大被害は免れなかった。そう説明しておけ」

「しかし、隣国が黙っているでしょうか？国内世論も無視できません」

「いつの世も他国が力を持つのは誰しも嫌なのだよ。それに文句を言うのはあくまで表向きだからな。既に我々企業連は世界各国を手中に納めている。行動はまだ起こさんがな。国内世論に関しては来年までなんとか押さえ込め」

「現在建造中のAFは来年までには全て完成します。東博士が頑張ってくれたお陰で滞っていたAFも建造が急ピッチで進んでいます」

「さあ、来年に世界は動くぞ。そうなれば我々の時代が訪れる」

「ええ。楽しみですね」

## 亡国企業side

「また失敗かね！とっておきを24機も投入して何の成果も得られなかったとはな！この役立たず供めが！」

「学園の防衛システムが予想以上の性能でした。今回投入した無人機は過去最高の出来だったので……」

「言い訳はいらん！結果で示せ！次失敗したらどうなるか分かっているな!？」

「……ええ、存じ上げております」

「もういい、さっさと出ていけ！」

「失礼しました」

日本を担当するスコールは追い出されながら笑みを浮かべた。

うまくいったわね。いつバレるかひやひやしたけどまだ疑われもしてないみたいね。さて次は……

手渡された次の計画を見ながら自室へ向かった。

スコールが出ていった部屋では二人の男が話をしていた。

「しかしどういふことだね!?あの無人機を使えば学園は容易に落とせると言っていたではないか!」

「それは俺も想定外だった。ただ今回で分かったのは真っ向からは無理ってことだ。やるなら腕の立つ奴を5、6人はいる」

「今すぐには無理だ。来年以降なら訓練も終わって兵士どもが使いものになる。それまでは手出しは出来んか」

「仕方ねえよ。今は耐える時だ」

「ああ、この恨みは絶対に晴らしてくれろ!覚えておけよ!」

「憎しみはいいが理性を失うなよ?足元掬われるぞ?」

「分かっている。お前も下がれ」

「へいへい」

彼はねっとりした声で返事をするどこかへ消えた。

「しかし、気味の悪い男だ。本名すらも教えないとは」

ねっとりした声の男……皆さんはもうお分かりですよね？

IS 学園に今備わっている防衛システムは

長距離実弾砲

近距離実弾砲（防波堤に内蔵）

のみです。ただ備え付けなので火力は桁違いです。並みの IS なら近づく前に長距離実弾砲で落とされます。長距離実弾砲はギガベースに搭載されている物を使っています。

混乱を招いてすみませんでした。活動報告という存在を知らなかったの……  
2 月末頃から毎日投稿に戻ります。

カレンダーの見間違えで一日早く投稿してしまった……基本は日曜日投稿です。  
今年最後の投稿です。それでは皆さん、よいお年を！



## 彼らの過去

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

筆者が知っている最後の原作イベントです。これが終わると完全オリジナル展開となります。確か原作は京都でしたが今作では東京になります。二次創作なので多少の原作離れは受け入れてください。

---

突如無人機に襲撃されたタッグトーナメントはそのまま中止となった。なんだかこの学園のイベントはよく襲撃されている気がする。それはそれとして一年生なのにもう修学旅行をするらしい。というのも二年三年は就職やらなんやらで忙しくやる暇が無いため一年生でやるらしい。ちなみにIS学園は一般的に専門学校と言われる部類に属するそうだ。

「じゃあ一週間後の修学旅行について説明するね。行き先は東京。二泊三日の予定で進行します。一日目は浅草と東京スカイツリー、二日目は企業見学、最終日に千

葉県にある夢の国に行きます。」

「先生、企業見学はどこへ行くんですか？」

「いくつか候補があるけども……」

そう言いながら黒板に書かれた企業は、

企業連本部

有澤重工

倉持技研

如月技研

えっと……どゆこと？なんか見たことある企業が混ざってるけども……という  
か実家が混ざってるんですけど!?

「言うまでもないけど有澤君は有澤重工と企業連本部以外でお願いね」

「分かりました……」

結局俺は如月重工へ行くことにした。だって倉持技研なんざ死んでもお断りだからな！ちなみに同じ理由で簪も如月重工にしたらしい。うーん楽しみだ

企業連 side

「IS学園の企業見学か」

「ええ」

「ちゃんとAFは隠しておけよ？」

「はい、そのつもりです。ただ外に配置している防衛システムはどうでしょうか？」

「くそっ、去年までは無かったから忘れていた！ええい、オブジェとして通せ！」

「おもしろい砲身とか見えてますけども……」

「葉っぱでもくっ付けてそれっぽくしておけ！ぐぬう、東博士が企業連に加わって研究が進むのはいいが、隠すのに苦労するぞ。今まで受け入れてた以上断れんし……」

「大変です！ト<sup>変</sup>ー<sup>態</sup>ラス<sup>共</sup>が持ち込んだサンプルのコジマ粒子が保管容器から漏れ出てます！」

「隔壁閉じて封じ込めろ！いいか!?見学中までは決して漏らすなよ？絶対だぞ？」

「フリですか？」

「ちがう!!」

企業連は去年までは無かった色々な物を隠すのに必死だった。

### 亡国企業 side

「今年もIS学園の修学旅行の時期だな。修学旅行先では当然学園よりは警備が薄い。この機会に白式を強奪するのだ」

「織斑一夏はどうしますか？」

「気絶までが許容範囲だ。殺すのは許さん。後始末が面倒だ。なまじあいつは知名度があるからな」

「了解しました」

男は出ていくスコールを見ながら男は物思いに耽っていた。失敗続きの白式強奪作戦、このままでいいのかと、どうしてこうなったのかと思考は深くなっていた。

男は生まれたときは一家の長男として活躍が期待されていた。頭脳優秀で出世コースまっしぐら……のはずだった。

彼の人生が変わったのは大学卒業間近、例の白騎士事件が起こったのだ。大企業に内定ももらっていた彼が突きつけられたのは突然のお祈りメールだった。要約するとそこには、

「あの一件で我が社は女性をメインに採用することにした。悪いが君の内定は取り消した。幸運を祈るよ」

それ以降彼は必死に就職先を探した。しかし、あるのはどれも大企業には程遠いブラックもブラックな真つ黒企業だけだった。なんとか就職するも会社が実家状態になり一年で退社、エリートから底辺へまっ逆さまな彼に追い討ちをかけたのは両親の自殺、一人息子が成功者から底辺へ落ちた事への不安と絶望からだった。そこで彼は自暴自棄になり貯金を浪費、家さえも失った彼が選んだのは起業。といっても正式な表の企業ではなく裏の、ISに恨みを持つ者を集めた組織だった。その名前が亡国企業、人員集めは捗った。この時代ISによって人生を狂わされた者は捨てるほどいるから。ただ……

「来るもの拒まず、去るもの追わずを貫いた結果がこれか……全く笑える」

最初の理念であった男の地位向上はどこへやら、今では男の地位向上を名目にIS

を強奪したり、各地の紛争に参加するテロ集団に成り果てていた。

「俺はどこで間違えたのか：だが：もう：戻れん、戻れんのだ！」

決意を新たにした瞬間奴が来た

「そうだぜえ、相棒。だからお前は名前を捨てて名無しとして活動してるんだろ？俺とお前は似てるんだ」

こいつはオールドキング。十中八九偽名だろうが本名は知る必要はない。ここでは必要以上の詮索は禁止だ。ただこいつの思考は危険が過ぎるのが難点だ。その残酷性を除けば優秀なんだがな。

「じゃあな。上手くやれよ？」

だがこいつの作戦は穴がない。殺人が前提なのに目を瞑ればだが。今まで失敗続きなのも殺人をしないようにした結果だ。

「殺人前提だけは許さん。その一線は越えてはならん。外道に落ちた俺でも分かることだ」

既に亡国企業の活動で少なからず死者が出ていることには目を背け、ひたすらに自分を正当化する姿は非常に滑稽であった。

スコールside

「最近上はだいぶ荒れてるわね」

白式を強奪という無理難題を押し付けられたスコールはそう呟いた。というのも最近では命令されるときは口調が明らかに荒くなっていったからだ

「亡国企業も一枚岩じゃないってことね。特にあの男、オールドキングは要注意ね」  
企業連のスパイとして暗躍するスコールは報告書をまとめるのだった。

---

なんか1話を見返すと拙いですね。あのときは頭に浮かんだ奴を思うがままに

書き殴ってたので：：少しはマシになりましたかね？

夢の国：：いないとは思いますが分らない人の為に説明すると例の「ハハッ」なアメリカが本場なのに日本のが出来がいいネズミの国です。ネット界限では名前を出すで消されることで有名ですね。千葉県にあるのに名前は東京という不思議。

## 修学旅行 1、2日目

筆者が修学旅行でスカイツリーに行ったときは生憎の曇り空で何も見えませんでした。

修学旅行当日。新幹線の中で俺は簪と仲良く持ち込んだタブレットでアニメ鑑賞に耽っていた。学園から東京駅までは大体3時間かかるため暇潰しの道具は抜かない。もちろんアニメはダウンロードしているので通信料は発生しない。IS学園が電子端末持ち込み可で助かったぞい。

「なあ簪、アニメは他に何を持ってきた？」

「トールスマンは当然として企業戦士カードと仁義なき戦い（テクノクラートVSアルゼブラ）、それからローディ先生の戦闘指南所を持ってきたよ！」

「説明しよう！企業戦士カードとはカードという組織に属する派遣社員が企業連の企業に雇われて仕事に行くアニメだ！アニメ化によってだいぶ美化されて

いるが仕事の様はまさしく社畜のそれであり、本人が好んでやっているから始末が悪いぞ」

「説明しよう！ 仁義なき戦い（テクノクライト VS アルゼブラ）とはテクノクライトとアルゼブラのお互いの利権を巡った仁義なき戦いを描いたアニメである。アニメ化によって美化されているがその中身は血みどろで、それでいて人情に溢れる素晴らしい作品だ。なおこれによってテクノクライト及びアルゼブラには893がいるという風評被害が広まった」

「説明しよう！ ローディ先生の戦闘指南所とはGAのベテラン社員であるローディが主演のシミュレーターを用いた戦闘指南アニメである。彼は粗製ながらも武器腕バズーカを駆使した戦いを得意とし、その戦闘技術はISパイロットも参考にするとか」

ちなみに全て企業連製である。アニメ化で美化しないとR規制を食らいそうなのが混ざっているのはご愛嬌。

結論、年頃の女の子が見るようなアニメではない！ しかしむさい男とたくましい女しかいない企業連に恋愛ものを作れというのが無理なのだ。



部屋に戻った俺は恐る恐る切り出した。すると、

「いいよ、自由行動のときは本音と巡るから」

あっさりOKが出た。どうやら無断で危ないことをするのがまずいらしい。俺は一つ賢くなった。

「でも怪我したりしたら許さないから。有澤君に限ってそんなことは無いだろうけど」

危ないこともアウトか。

## 2日目

俺達は如月技研に来ていた。ここは企業連に属していない中ではトップクラスの技術力を誇る企業だ。企業連代表として興味がある。出迎えてくれたのは小綺麗な白衣に身を包んだ研究者らしき人だった。

「IS学園の皆さん。ようこそ如月技研へ。ではこちらへどうぞ」

そういつて通されたのは広い部屋。スクリーンがあることからここで説明をするのだろう。

「我々如月技研は主に生体型ロボットの開発をしています。生体型ロボットというのはロボット表面にコーティングを施し、外見は普通の生物そっくりに作り上げたロボットです」

ふむふむ生体型ロボットとな。面白いじゃないか。

このあとに如月技研の歴史やらなんやらが紹介されたあと

「では皆さん。今から現在開発中の生体型ロボットをお目にかけてみましょう。部屋を移動します。ついて来て下さい」

そういつて案内されたのはガラスで区切られた部屋だった。

「このガラス越しに生体型ロボットをお目にかけてみます。現在二種類を開発中です。まずはAMIDAからどうぞ！」

そう言っ出てきたのは触覚が生えたダニ……ってあれはトーラスマンの!?

「フハハハハハハハ！もうお気づきの方もいるでしょう！そう！これはあのトーラスマンに出てくるAMIDAを実際に作ったのです！勿論自爆から酸吐きまで再現済みです！しかも本家と違って飛べるんです！」

うん、あのね、熱弁してるとこ悪いけどここにいるの一般的な女子高生なの。簪

と俺を除いてトーラスマン知らないしドン引きしてるよ。

「おや？ いまいち反応が悪いですな。ならこれはどうだ!? SYAKA!」

そう言って出てきたのは何やら蠢く物体。何やら名状しがたい触手のようなものが生えている。俺は身の危険を感じてとっさに目を背けた。

「これはある日社員の一人の脳裏に浮かんだ物を詰め込んだものです。私は平気でしたがこれを見た社員の何人かは発狂して退社してしまいました。何やらいいあ！と叫んでましたっけ(笑)こんなに可愛いものにな〜」

おいしいおいしい！それってSAN値がピンチになるものでは!? てか皆大丈夫か!?

慌てて回りを見ると皆目を反らしていた。どうやら最初にキモいのが出てきたせいで次は見ないようにしたらしい、ただ……

「ふんぐるい、ふんぐるい……」

「簪さん!? 戻ってこおおおおい!」

「はっ！ 私は何を!」

期待のこもった目でモロに見てしまった簪はヤバい方面に流れて行きそうだった

が何とか戻ってこれた。というかあの社員は俺達が一人も見てないのに平然と説明を続けてやがる。俺達が目に入ってないのか？それとも……

「……以上で説明を終わります。これで如月技研の企業見学は終わりです。我々はおなたたちの入社を楽しみにしています。是非ご検討下さい！」

誰が行くか！この時ばかりは皆の心がハモった。

---

忙しい日々の合間を縫ってちびちび書いています。

阿弥陀如来繋がりて釈迦如来のSYAKKAにしました。



## 修学旅行 3日目

周一投稿だと心に余裕ができていいですね。まあ感想が来る頻度が減るので寂しくはありますが……

3日目、俺は夢の国で簪とはしゃいでいた。警護はどうしたかって？あいつの回りは女子、それも各国の代表候補生で固められてるからいいやということと簪と夢の国を堪能してるって訳だ。ああ、ポップコーンうめえ

「有澤君、こんな平和で二人っきりで遊ぶの久しぶりだね」

「ああ、最近の学校行事はトラブル続きだからな。今日くらいは楽させてもらおう」「うまく考えたね。「お前ら、一夏の好感度を上げるチャンスだぞ？」ってさ」

「あいつらは一夏とイチャイチャできて俺は簪とイチャイチャ出来る。これがWIN・WINってやつよ。警護は任せたぜえ！ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「随分溜め込んでるね。大丈夫？」

「大丈夫だ。問題無い」

「本当かなあ？」

ピピピッピピピッ

「ヒェ！」

鳴ったのはISの緊急呼び出し。呼び出し人は篠ノ之さんからだ。何でも男子トイレに入ったきり一夏が出てこないらしい。その手があったか！

「大丈夫？ 顔面蒼白だけど？」

「アア、カンザシサン。ヨビダシダー、トラブルダー」

「その：：いってらっしゃい。頑張ってるね。応援してるよ」

「俺の楽しい時間が：：：野郎オブクラッシャー！」

「無事に終わったらまたどこかで一緒に遊ぼうね」

「だな！」

俺は簪と別れたあとこっそり一夏に仕込んだ発信器を探した。すると夢の国の外に反応があった。急いで向かうと戦闘音がする。こっそり覗くと一夏がISのような何かを纏った5人を相手に戦闘していた。俺は側の高台に陣取るとISを展開、

付近への被害に考慮してフラッシュロケットを構えた。

シュババババ！

放たれたのがフラッシュロケットと気がついたのだろう、一夏が慌てて目と耳をふさいだ瞬間辺りを強烈な光と音が包み込んだ。

「一夏、無事か？」

「ああ、まだ目がチカチカするけどな、助かった」

「何があった？話してみ？」

「実は……」

一夏曰く

・トイレに入ったらいきなり口を塞がれて目隠しされて縛られた後腕の白式を奪われた

・そのままどこかへ運ばれて気がつくとも知らない場所

・文化祭の一件から遠隔起動出来るようになった白式で応戦

・俺が助けに入る

とのことだ。しかし気がかりなのは……

「あいつらはフラッシュロケットが炸裂した瞬間尻尾巻いて逃げた。多分動きからして手練れだろう。しかし見慣れない機体だったな。なあ一夏、戦って分かったことは？」

「サイズはISと同格、パワーも同じくらい、ただ男が動かしてたからISじゃないのは確か、見た感じバスマスロットとシールドエネルギーは無さそうだった」

「ふむ……」

あれは企業連が一般向けに販売している マッスル・トレーサー MT に酷似していたな。土木作業用のMTを戦闘用に改造したのか？

「取り敢えず一夏や。これから修学旅行が終わるまでは俺と行動しろ。なにかがあつた後じゃあ遅いからな」

「おう！なんか久々だな、お前と一緒に何かするのは」  
「だな」

流星に俺が側にいるのに襲ってくる愚か者はいないらしくこれ以降は一夏と遊び倒したのだった。ただ……最後まで簪と遊びたかった！

その後無事に修学旅行は終わったが帰ってからが大変だった。当然のように俺の部屋に入り込んだたっちゃん先輩に根掘り葉掘り修学旅行での話を聞かれたのだ。流星に生徒会長権限でも修学旅行に同行は出来なかったらしく簪のことが気になってこの3日間ともに仕事も進まなかったらしく……ん？それっていつものことでは？と俺が思った矢先に部屋のドアが開いた。そこには……

「会長？まだ仕事が残ってますが？」

俺は笑顔というのは恐ろしい表情なのだと思った。カタカタ震え始めたたっちゃん先輩が引きずられながら連れ出されていく姿はさながら母親に怒られる子供のようだった。

## 企業連side

「今回の報告によると修学旅行で襲ってきた者どもが使っていたのは企業連のMTを改造したものだっただろうだな」

「ええ。ですが駆動系に装甲にとかなりの強化が施されておりほぼ別物のようだし

た。我々はこの機体をノーマルと呼称。恐らく地上に限定すればISと互角に戦えるかと」

「つまり技量次第では……」

「はい。ISを撃破できるかと」

「ふむ。奴等も成長しているということか。ただ、アレには及ぶまい？」

「当然です。我々企業連の技術力の結晶であるアレにはMTはおろかISでさえも圧倒するだけの性能があります。それ相応の欠点もありますが」

「その欠点に関しては東博士の協力のおかげで一応は解決済みだ」

「アレの実戦投入はいつ頃ですか？」

「今後ISとの戦闘が起こった場合を予定している。適正の検査は？」

「企業連全員に行い差はあれどかなりの人数に適正が確認されました。勿論テストパイロットである有澤隆彦にも行い適正を確認しています」

「機体の方は？」

「AFと平行して作成しておりどれも近日中には完成するかと」

「流石だな。適正のある者は数十人はいたと思うが……社員に無理させてないか？」

「皆大喜びで日夜作業しっぱなしで……一応強制的に休息は取らせてますが……」  
「まあ喜んでやっているなら止めることはできんな。まあそのおかげで計画もかなり前倒し出来たことだし何も言うまい」

「ですね」

この時まで誰も予想できていなかった。皆、ISが世界を支配し平和を保ち女尊男卑となった世界がいつまでも続くと思っていた。企業連の関係者を除いて……

筆者的には

IS IIアーマードコアで言うところのノーマル

ということにしています。まだここでは紹介しませんが、追々例のアレも出てきます。コジマがあってAFがあるならアレもいますとも。

## 世界が動く日

ついにオリジナル展開突入です。ここまで長かった。

アンケート通り一週間投稿のままです。皆さんの優しさがありがたいです。

修学旅行も終わり、一年目が終了した時それは起こった。突如全世界に対して企業連からこのような声明が発表されたのだ。

「我々企業連は全世界に対して宣戦布告を宣言する。我々の目的はこの腐りきった世界を直すことだ。皆薄々感づいているだろう。男性を蔑み、女性を持ち上げ、その果てに何がある？我々の統計では全世界においてIS発表前より明らかに社会が衰退している。女性に命令されるだけで自発的に働かない男性達、増える男性の捨て子、このままでは人類は衰退の一途をたどり近いうちに壊死するだろう。我々はそのような未来を決して認めない。さて、ここからはこれからの戦争についてだ。我々は国際法に則り宣戦布告を宣言した。勿論降伏する者や民間人といった非戦闘

員は人道的に扱うことをここに誓おう。ただし戦場に出てきた時点で皆戦闘員とみなすため人質等は考えないことだ。ルールは簡単だ。我々企業連は各国に対して来週から戦闘行為を開始する。来週までに降伏するなら降伏してほしい。その場合は丁重に扱うことを約束する。来週までに降伏がなければ戦闘の意思ありと判断し戦闘を開始する。降伏、または敗北した国に関しては我々企業連が統治する。感情論ではなく合理的に判断して政治を行う。未来をより良くしたい気持ちは一緒なのだから。我々からは以上だ」

この声明が発表された後各国は混乱に陥ったのは言うまでもない。降伏しようと言う者。男ごときに降伏出来るか！と戦意を高める者、様々であった。

## IS 学園

企業連の声明が発表された時、簪は部屋にいた。

「有澤君、ちょっと用事で出てくるって言ってたけど戦争に参加するのかな？多分するよね……はあ」

学園に取り残された簪はそう呟いた。安全のため生徒達は学園から出ないように

と指示されたのだ。

「でも私はこれでも日本の代表候補生。企業連とは敵対関係にあるから助けには行ってあげられないよね。怪我だけはしないであらうね……」

残された簪に出来ることはただ隆彦の無事を祈るだけであった。

### 企業連 side

「各国の反応はどうだ？」

「やはりアメリカや中国といった大国は戦う気満々のようです。下手したら明日にでも攻めてくるかと」

「宣戦布告は済んでいるから問題はないか。もし攻めて来たなら丁重にもてなせ」

「各企業には既に防衛システムとAFの配備が完了しています。いつでもいけます」

「用意周到だな。ここ、企業連本部はどうだ？」

「防衛システムオールグリーン。AFも発進準備が来ています」

「完璧だな。遂にこの日が来たのだ。取り戻すぞ、黄金の時代を」

「はい」



さいと伝えなさい。我々アメリカ合衆国に挑むとは愚かな……」

企業連は全世界の企業で構成されているため我々が戦うのは恐らくGA社なのだ  
が……黙っておこう。余計なことは言わない側近であった。

「ええ、愚か者に目にも見せてやりましょう」

アメリカ、戦争参加を決意

ロシアside

「企業連が宣戦布告……どうやら本当の暴力を知りたいようだ。各工場に兵器生産  
を指示、企業連程度の物量我々の足元にも及ばないことを教えてやれ！」

「ダー！」

ロシア、戦争参加を決意

北欧side

「我々が企業連に勝てるわけ無いだろ!?我々は降伏させてもらおう！第一我々はそ  
こまで女尊男卑の思想には染まっていない！」

北欧、降伏を決意

イギリスside

「偉大なる女王陛下の統治するこの国に愚かにも戦争を仕掛けるとは。しかもたかが企業風情が、笑わせる。それより紅茶の茶葉の貯蓄は？戦争ともなれば確保が難しくなるでしょう？」

「向こう一年分は常に確保しています」

「準備は万全、いつでもかかってくるといいわ！」

イギリス、戦争参加を決意

E U S i d e

「イギリスは戦争を決意したらしい。我々も参加するぞ。たかが企業ごとき敵ではない。我々ヨーロッパ連合は戦争に参加することを提案するが異論はないか？」

「「無し！」」

ヨーロッパ、戦争参加を決意

中東 s i d e

「元々裕福じゃない俺達には関係ねえ、この戦争に乗っかってさらに発展するぞ！異論はないか!？」

「「無し！他の大国に目にも見せてやれ！」」

元々治安も良くない中東には IS が配備されなかったため男女まとめて以前より他国からの扱いが悪化していたのだ。

中東、企業連側として戦争参加を決意

亡国企業 side

「企業連が全世界に宣戦布告か……目的が一緒なら我々も企業連側に参加するか？」

「いいんじゃないか？ どうせ俺達じゃあ戦力が足りないんだ。企業連と手を組めばだいぶ楽になるぜ？」

「だな。早速企業連に連絡だ。オールドキング、お前はもう下がっておけ。お前が作戦に関わると余計な血が流れる」

「へいへい、じゃあな」

去っていくオールドキング、暫く歩いた先で……

「企業連も亡国企業の連中も温すぎる。何が宣戦布告だ。何が降伏だ。革命など、結局は殺すしか無いのさ。　　だろう？」

オールドキングの手元には通信機が握られていた。

「有澤隆彦……」

世界は混沌へと向かっていく……

ちよつとスピード展開過ぎましたかね？次回からは本格的にAF達が暴れ始めます。

確か原作ではギリシャの方にはISが配備されていた気がしますが今作では中東付近全部まとめてISは配備されていません。

## 企業連 VS 世界 アメリカ編 1

戦争に突入です。まずはアメリカからです。

世界で最初に戦いの火蓋が切って落とされたのはアメリカだった。戦争を見越して郊外に建てられたGA本社に向けてアメリカ陸軍、空軍が進撃を開始した。

「敵、第一波来ます！」

「ISは？」

「確認されていません」

「嘗めているのか、笑わせるな。ギガベース部隊に狙撃開始と伝えろ！」

「イエッサー！」

GA社は本社を中心に何重もの防衛ラインを構築していた。外側から順に

・量産型AFランドクラブ

・量産型AFギガベース

・フラッグシップAFグレートウォール

・ビル型砲台（飛行型）

となっている。ギガベースが一番射程が長いので狙撃部隊となっている。

アメリカ陸軍、戦車部隊

「上の連中は何を考えているんだ。IS相手に戦争を吹っ掛ける奴等に通常戦力が役に立つものか！」

「そこまでだ。俺達は軍隊だ。どんな理不尽な命令でも下されたならそれに従うだけだ」

「無駄死には嫌なんだがなあ」

彼の見る先には84両という大規模な戦車大隊があった。綺麗に隊列を組んで進む様はアメリカの物量を体現していた。

「よくもまあこれだけのエイブラムスを集めたもんだ」

「ISのおかげで出番が無くなったからな。使われてない倉庫の肥やしになってたやつを全部投入したんだろう」

「数こそは正義ってか」

そう眩いた時突然衝撃と閃光が辺りを包んだ。

ドガン！

地上を埋め尽くす戦車大隊に突如襲いかかったのはギガベースの超長距離狙撃であつた。

しかし流石はエイブラムスである。直撃した10両以外は健在であつた。

「何だ今のは！」

「恐らく敵の長距離狙撃です！」

「なんだと!?!ここから何キロあると思ってるんだ!?!」

40km、その長射程は大和型戦艦に匹敵するものだった。

GA社

「報告！ギガベース部隊の一斉狙撃により敵の戦車10両を破壊！」

「思ったより少ないな、ギガベースは10機投入したから……爆風では破壊できんのか、エイブラムスを甘く見ていたな」

「砲塔側面にRPGを食らっても耐えますからね。仕方がないかと」

「ランドクラブを前進させろ。グレートウォールは来るであろうISに置いておけ」  
「イエッサー！」

アメリカ陸軍、戦車部隊

「凄まじい一撃だ。エイブラムスが一撃、しかもこの距離で直撃とは……」

「どうしますか？」

「前進……しかあるまい。さっきからさっさと突撃しろと無線機が煩いからな」

「上の連中は座って指示を出すだけですからね。大方訳もわからず怒鳴ってるだけでしょう？」

「だが従わなければならぬ。全車両前進！」

欠けた10両を補うように隊列を組み直して前進を開始した。なぜか長距離狙撃はあれ以降降ってこなかった。

「不気味だな。確実にさっきの射撃の射程に入っているはずなのに」

「遊ばれてますかね？」

「そうだろうな……！」

「どうしました!？」

「あれを見ろ！」

目線の先にあったのは沢山の足が生えた箱、箱の上にはいかにもといった3連装砲が4基こちらを向いていた。その数何と20。

「回避行動！」

叫んだ瞬間辺りは爆炎で包まれた。

GA社、ランドクラブ部隊

「敵戦車大隊沈黙、射撃中止」

「ちょっと鬼畜な気がしますね。対IS用のAFで戦車大隊相手とは」

「ISを出さないあちらが悪い」

20機、計240門の一斉射撃によって残った戦車は皆破壊されていた。塵一つ残っていないことからその火力と熱量がうかがえる。

「さてさて上はどうなってるかな？」

同時刻、GA社上空、アメリカ空軍爆撃部隊

「たかが一企業にこれは過剰な気がしますけどね」

「国に逆らったらこうなるんだという見せしめもあるだろう」

「しかしこれはいくらなんでも……」

高度14000mの上空を飛ぶのはB-52爆撃機5機であった。

「それに搭載爆弾が通常爆弾に加えてバンカーバスターに原爆とは、GA社が郊外で助かりましたね」

「原爆は積んでることに意義があるからな。間違っても投下しないようにロックもかけてある」

「何故？」

「このご時世に自国のたかが一企業を滅ぼすために原爆を使うんだ我々は無能だと世界に公表するようなもんだ。それに放射能汚染で後片付けも面倒だ」

「それもそうですね」

「さて……そろそろ爆撃ポイントだ。幸い戦車大隊に気を取られてこちらには気が



凄まじい衝撃と爆炎が本社ビルとその周辺を襲った、しかし……

「バンカーバスター3発の着弾を確認、損害無し」

「流石だな」

到達速度がおよそ1800km/hにも及ぶバンカーバスターを本社ビルは耐えたのだ。外からはその貫通力故に半分まで突き刺さったバンカーバスターがアンテナのように生えているのが確認できた。

「しかし損害無しとは思いませんでした。流石はグレートウォールに採用した装甲ですね」

「ああ、あれに関しては有澤重工のお陰だ。我が社より装甲と火薬の技術が秀でているのは知っていたがここまでとはな……」

グレートウォールにも採用された装甲板、それは有澤重工が培ってきた技術の結晶である。ちなみにGA社に供給している装甲板は輸出用にデチューンされているというのだがその性能は規格外であった。

「そろそろISが来る頃だろう。陸軍がこうもあっさり撃破され、空軍の爆撃も効果が無かったんだ。激昂して襲ってくるだろう」

「そのときはグレートウォールの出番ですね」

「ああ、何機投入するかは知らんがここでギガベースとランドクラブは撤収だ。ISと戦うのは我々の誇るフラッグシップAFグレートウォール。さあISよ、どこまで粘れるかな？」

アメリカ、ホワイトハウス

「空軍と陸軍が!? 男のくせになかなかやるわね。でもここまですよ。ISを投入さない。ISこそが最強であることを示すのよ!」

「イエスマム!」

女尊男卑の社会になってから就任したこの大統領は前大統領であるマイケル・ウィルソンを追放し大統領の座に就いた。ここで彼女は調べておくべきだった。マイケル・ウィルソンが今どこで何をしているのかを……

GA 社地下ドック

「準備は万端か？」

「ええ大統領、機体は調整済みです」

「完璧だなジョディ、パーティーを始めろぞ」

地下では謎の青い機体が出番を静かに待っていた。

---

はい！出したかったので出しちゃいました我らが大統領！次回はパーティーを見せてくれることでしょう。

書いてから言うのも何ですがB-52ってバンカーバスター運用出来ますよね？

## 企業連 VS 世界 アメリカ編 2

IS 対 AF 勝つのはどっちだ!?

想像以上の反響に驚いています。やっぱり皆さん大統領が好きなんやなって。

「軍用 IS を投入なさい!」

陸軍と空軍が敗れた事を知った大統領はそう命令をした。軍用 IS である銀の福音は暴走事件の後にも密かに改良を繰り返していた。同じことは各国も行っており事実上アラスカ条約は形骸化していた。

「改良を重ねたこの子なら負けないだろうけど……」

パイロットであるナターシャは命令されたため仕方なく出撃したが乗り気では無かった。

「陸軍と空軍をああも簡単に倒す相手…… IS でも油断は出来ないわね」

銀の福音は暴走事件の後、装甲の追加と銀の鐘の増設がなされていた。既存の IS

では歯が立たない性能のはず……だった。

### GA社付近

「ようやく見えてきたわねGA社、あんな壁前まであったかしら？」

GA社の回りには大きな壁があった。大きなGA社のロゴが刻まれたそれは陸軍と空軍が攻めたときには無かった物だった。

「どんな相手か分からない以上油断はしないわ！」

そう意気込んでブースターを吹かした次の瞬間

ゴゴゴゴゴ

壁が……動いた……壁と思ったそれは列車型の機動兵器だったのだ。あまりの長さゆえGA社の回りを囲む壁のように見えたのだ。

「壁が!?でもやることは同じ！」

放たれる銀の鐘、以前より増設されたそれは辺りが光弾で埋め尽くされるほどの弾幕だった。どんな相手でもこれなら倒せる。そう思ってしまった。

シューウウー

「えっ!？」

無傷であった。攻撃に対する返事は大量のミサイルとグレネードであった。

ズゴゴゴゴゴゴゴゴーン!

「きゃあああああ!!」

吹き飛ばされたナターシャが見たのは視界全てを埋め尽くす千にも届こうかというミサイルとグレネード、それはまさしくアメリカのお家芸である数の暴力であった。

「これは……無理ね」

流石の軍用ISとはいえど規格外の弾幕の前にはなすすべもなくナターシャは静かに意識を手放した。

### GA 社地下ドック

「作戦を説明します。ホワイトハウスに高速で接近、制圧してください。現大統領は専用のISを所持しているとのことですがあなたの前には大した障害にはならないでしょう。持てる兵器をすべて使いあのクソツタレを倒しましょう。作戦名

は……」

ジャラララララララララララジャー……ン！

「取り返せ！かつての栄光！皆はあなたを待っている！」

「どうかお気をつけて、大統領」

ホワイトハウス side

「失敗ですって!? 寝言は寝て言いなさい！我が国の誇る最新鋭の軍用ISがISではない兵器に負けたですって!?」

「申し上げにくいのですが事実です。さらにここ、ホワイトハウスに向けて所属不明機が急速接近中との情報も……」

「それを早く言いなさい！私が出るわ！」

この大統領、腐っても大統領な訳で専用のISを持っていた。

「IS反応は無いそうね。なら私の敵では無いわ。あなたたちは下がってなさい」

大統領はホワイトハウスのすぐ外に出て所属不明機を待った。そこに現れたの

は……

「オーケーイイイイ！レッツパーリーイイイイイイ」

絶叫と共に降ってきたのは巨大なコンテナを2つ背負った青いロボットだった。

「待たせたな、大統領」

「その声は……マイケル・ウィルソン!？」

「覚えてくれていて何よりだ。なら始めようか、何も言わずともここに私が来た目的と理由は分かっているだろう？」

「もちろんよ！ここで息の根を止めてやるわ！」

ズガガガガガッ！

最初は互いにアサルトライフルを構え打ち合いが始まった。しかし、お互いに大量の武器を持っているため泥仕合となるのは時間の問題だった。

「なかなかやるわね」

「貴様こそなかなかだ。だがそろそろ終わりにしよう」

そう言った瞬間彼の背中の中のコンテナが全て開いた。

「見るがいい！これが私の誇るメタルウルフの必殺技、バースト攻撃だああああ

ああ」

バースト攻撃、それは彼が設計しGA社が作成した特殊機動重装甲、メタルウルフが誇る最強の攻撃。コンテナに格納した全ての武器を一斉に放つというもの。シンプルだがそれゆえ強力な攻撃であった。

「何これ!?! どうやったらかこんな弾幕g……」

圧倒的弾幕、それは原点にして頂点、故に対抗手段など無かった。

倒れ伏す大統領のそばでマイケルはこう言った。

「How do you like me now?」

直訳すれば俺のこと好きになってくれた? という意味だがホームパーティの多いアメリカにおいてはこんな意味もある。パーティは終わりだ。つまり

消え失せる

である。

かろうじて意識のある大統領はこう言った。

「何故……あなたはそこまでするの? 無理にあなたが出てくる必要も無かったのに。私に復讐したいならGA社に任せればいいのに」

「そう言われればこう言うしかあるまい」

マイケルは沈み行く太陽を背に高らかとこう言った。

「何故なら！ 私が！ アメリカ合衆国大統領だからだ！」

大統領魂、それこそがマイケルをここまでさせた原動力である。

アメリカ合衆国、降伏

GA  
社 side

「グレートウォールの性能は予想以上だったな。まさか銀の福音に対して圧勝とは」  
「つくづく恐ろしいですね。有澤の技術は」

グレートウォールに用いられた有澤重工の技術は装甲板だけでなく主兵装のグレネードもそうであった。

「しかし、ただでさえ凶悪な火力の有澤グレネードをあろうことかガトリングにするとは。奴等は狂ってますよ」

「それだけじゃない。あれは我々に供給するための輸出用、つまり有澤重工が運用するグレネードはあれ以上の火力ということだ。敵じゃなくて本当によかった」

「全くですね。しかしうちでこれなら有澤重工に挑む日本は……」

「原型を留めるといいな」

大鑑巨砲主義も突き詰めると最強である事が証明された瞬間であった。

---

アメリカ合衆国編これにて終了です。ネクストの出番が……





鉄の雨。そう表現するのが正しい圧倒的物量。ロケットしか録に作れず売れないテクノクラートは大量のロケットの在庫を抱えていたためこれ幸いと全て投入したのだ。

「う、うわあああああ！てっ、撤退w」

ズダーン

「貴様は戦場から逃げようとしている。逃亡者は銃殺される」

撤退もできず、彼らは空から降り注ぐロケットをただ見るしかなかった。

ロシア空軍 side

「大量の飛翔体を確認！チャフ、フレア展開！」

戦闘機と戦闘ヘリは一斉にチャフ、フレアを展開した。しかし……

ズガン！ズガン！ズガン！

次々に着弾するロケット、それもそのはずロケットは無誘導の為チャフ、フレアは一切通用しないのだ。誘導出来ないため命中率は低いものの大量に撃てばその欠点も無くなる。中々に凶悪であった。また誘導できない都合上破壊力はミサイルを

大きく上回っておりここで初めてロケットも強力な武器であることが証明された。

ロシア上層部 side

「投入した戦力はほぼ壊滅です。どうしますか？」

「仕方ない。 ISを投入しろ」

「ダー！」

テクノクラート side

「敵戦力の壊滅を確認。これからどうしますか？」

「20機のランドクラブを残して10機を前進、政府建物に照準を合わせておけ。いくら命中率が悪いとはいえ固定目標なら外すまい？」

「当然です！」

「十中八九相手はISを投入するだろう。それを撃破した後一発だけ政府建物に撃ち込め。絶対に当てるな。所謂警告射撃というやつだ。いつの世も上の連中は自分





非常にやかましい男の声が響いたかと思うとISが2機、一瞬で破壊された。

「何!？」

そこにいたのは一機のISが玩具に見えるほど巨大なロボットであった。

「えぐらせてもらうで、IS共」

そのロボットの両手には人間が入ってしまいそうなほど巨大な杭が付いていた。煙が出ているのを見るに2機のISはこれにやられたのだろう。見れば絶対防御を貫通し腹部からは大量に出血していた。

「よくも仲間を!!」

ライフルを撃ちながら突撃するもなにやら緑色の閃光が迸り弾は彼に届いていなかった。それを確認するや否やブレードに持ち換え切りかかった。が、

「遅い」

ドヒャアドヒャア

独特の、隆彦のISよりも遥かに大きな音が響くと目の前からその巨体が消え去った。

「いったいどこに?」

「後ろじゃ」

「ッ！」

慌てて振り向きブレードで防ごうとするも

ズガン！

ブレードは叩き折られ勢いそのままにロボットの振り下ろした巨大なブレードはISを粉微塵に破壊した。

「っぐう！」

かろうじて、生命維持機能により息のある女性に対して

「寒いか？じゃがそれもじきにのうなる………チッじゃけえ女は好かんのじゃ。そっちから襲ってきたのにそがいな顔すんなや」

そう言ったド・スはこれまた独特のヒュオーンという音と緑色の何かを残して飛び去った。

政府中枢部

「IS部隊全滅です」

「!？」

「正体不明の機体が出てきて手も足も出なかったと。またパイロットは重症につき保護したとテクノクラートから連絡が……」

「ぐぬう。ならば……」

次の言葉を放とうとした瞬ドスツという鈍い音と共に間政府建物の側に一発の不発弾のロケットが突き刺さった。それは政府中枢部にロケットが届くということを示していた。

「悔しいが降伏しよう。ここまで届くということはもはや我々に勝ち目は無い」

「……分かりました」

ロシア、降伏

テクノクラート side

「ロシア連邦が正式に降伏してきました」

「首の皮一枚繋がったか……」

というのもこの戦争決してテクノクラート有利ではなかった。保有ロケットは現

在ランドクラブにあるので全てだし、本社には防衛システムは何も無かった。

「ド・スに助けられたな。しかしネクストは強いな。現状ISさえも蹂躪とは」

「しかしコジマ粒子を使ったため汚染の処理をしなくてはなりません……」

「それも除染機を使えば問題ない。ISパイロットは？」

「我が社の緊急治療室にて治療中です。命に別状はありません」

「あれだけ出血してたのにか。やはりISはすさまじいな」

「まあ元々宇宙活動を目的にしてみましたから生命維持に関しては何よりも優れてます」

「宇宙活動目的が今じゃあ立派な兵器か……人間そう変わらん。我々も同じだ。破壊の為だけにネクストは開発されたからな。その点では汚染の心配がないISの方がまだマシなのかもしれん」

「ですね」

いつの世も優れた技術は戦いに用いられる。コジマ粒子もその莫大なエネルギーを生かして最初に設計されたのが兵器であった。

ロシア編、1話で終わらせました。そのせいで少々文字数が増えてしまいました。遂にネクスト登場です。ISを人間プラス2mとして大体ネクストが10mほどなので大体倍くらいのサイズですかね？AFとネクストは後でまとめて紹介回を用意します。



## 企業連 VS 世界 イギリス編

イギリスというところで看板AFのカーチャン登場です。

アメリカとロシアが企業連と戦闘状態に陥っている中イギリスは冷静だった。たかが企業とはいえ宣戦布告をするほどに自信があるのなら様子見をした方が良く考えたのだ。その考えは的中し企業連相手に通常戦力は無意味である事が分かった。

「アメリカ、ロシア共に歯が立たなかったそうです」

「ならば最初からISを投入しなくては。ただしあのAFとか言う巨大兵器は数の暴力でISを押し潰す設計のようね。数が揃えられないならば圧倒的な質で補うしかない」

「しかしどうします？見たところ辺り一面を埋め尽くすほどの弾幕が予想されま  
すが……」

AFはその大ききさゆえ丸見えであった。

「察知されなければいい。幸い企業連の兵器と違ってISは持ち運びが容易、つまり展開せず敵まで密かに接近、その後ISを展開すればいいんじゃない？」

「名案ですね！早速隠密行動のプロを選び出します」

「早急にね」

幸いイギリスは島国、山も多くあの巨大兵器はまともに動けないでしょう。この勝負もらったわ！

## BFF社 side

「イギリスはまだ攻めてこないのか？」

「ええ。どうやら他国の様子を見ながらのようです」

「あれを見たんだ。恐らく最初からISが来るぞ。マザーウィルの状態は？」

「完璧です。いつでも行けます」

「ただ動けないのが辛いな。広大な砂漠とかなら良いんだろうが」

「まあ動けなくても戦闘力は変わりません」

「だな」

イギリス IS 部隊

「では出撃だ。今回の任務は隠密が重要だ。敵に接近するまでは緊急時を除いて IS の展開を禁止する。いいな？」

「了解！」

選ばれた 3 人は全員隠密が得意なパイロット、そして全員がパイルバンカーを装備しており破壊力は万全だった。彼女等は一般客を装い B F F 社のそばまで接近していた。日がくれるのを待った後……

「ここからが本番よ。敵の警戒網を掻い潜って巨大兵器に攻撃を仕掛けるわ」

「了解」

「バラバラに行動ね。では……行動開始！」

一気に散開し潜入が始まった。社内への侵入は容易だったがやはり AF 周りの警戒は厳重だった。

「なにこれ？監視員が常に見回ってる。これじゃあ近寄れないじゃない！誰かが

陽動しないと」

彼女はISのネットワークをとおうとして気がついた。

「展開出来ないから連携が取れない!? 隙を見て忍び込むしかないか」

しかし警備は厳重で常にサーチライトが辺りを照らしどう近づいても気がつかれるのは容易に想像できた。

「なら……掘るか」

彼女は装備していた小さなシャベルで穴を掘り始めた。2mほど掘ったところで

「これなら……んしょ」

穴に入り土で埋めた。普通なら生き埋めになるが彼女にはISがある。

「通信ならともかく起動だけなら土で信号を防げるはず」

彼女の予想は当たっていた。土に遮られ誰もISの起動に気がつかなかったのだ。

「マップを見る限りここら辺なら……」

上に掘り進み舗装を静かに切断しISを解除した。当然上から土が降り注ぐ。

「うえっ。でも気がついて無いようね。これなら……」

地面から顔を出すとそこには巨大な柱があった。見上げるとそれが巨大兵器の脚

の1本であることが確認できた。

「これは……デカイわね……脚を折れば壊せるかしら？ あらっ？」

どう壊そうか考えていると暗視装置に光が差した。見れば他の2人も無事潜入しそれぞれ脚のそばにいた。

「同時にISを展開、パイルバンカーで脚を破壊した後速やかに離脱。これでいこう」

小さな手旗信号でそう伝えると了解という返事が返ってきた。

「よし……いくわよ……3……2……1……今！」

それぞれが一瞬でISを展開、迎撃される間もなくそれぞれが脚の間接部分を両手のパイルで撃ち抜いた。すると……

ヴー……！ヴー……！

ISを展開したことで警報が作動、しかしもう遅かった。撃ち抜かれた3本の脚は間接から破損、手慣れた彼女等は即座に離脱……出来なかった。視界を多い尽くすミサイルの群れに襲われたのだ。

## BFF社side

それはまさに突然であった。爆発音と共に警報が鳴り響く、見ればマザーウィルの6本脚のうち片方の3本の脚が破壊されマザーウィルが傾斜していたのだ。その衝撃で皆がパニックになるもマザーウィルの指揮官は冷静だった。

「ミサイル一斉掃射！」

警備が厳しくなれば脱出が困難になるためそのままISで離脱すると読んだのだ。その読みは的中し

「きゃあああああああ！なにこれ!?!」

IS1機に数十のミサイルが食いついていた。同時に放てるのは22発程度だが連続発射されたミサイルの数は増え行く一方だった。

## イギリスIS部隊

「一応聞いてはいたけどなにこのふざけた数のミサイル！」

チャフ、フレアはその数に歯が立たなかった。後ろを見れば追尾するミサイルがどんどん増えその数は数百にも及んでいた。

「これは流石に……きゃあ！」

後ろに氣をとられ前を見ていなかった。回り込んだミサイルに被弾、硬直したところに数十のミサイルが着弾。あっけなく落ちていった。

イギリス side

「作戦は？」

「敵の巨大兵器の脚を破壊、行動不能にするも全員撃墜です」

「まあ他国を見れば善戦したほうね。これをネタに停戦までいけるかしら？」

「それしか手が無いです。巨大兵器の修復には時間と金がかかるでしょうし今のうちに……」

そう言った瞬間窓ガラスが割れた。慌てて避難し

「今のは何!？」

「分かりません。何の前触れもなく……」

そう言った瞬間軍を仕切る大臣が駆け込んできた。

「報告！何者かの狙撃により戦車含め全兵器が運用出来ません！恐らく今のも警

告射撃と思われます！」

「何ですって!？」

皆混乱していた。そこから離れた郊外では

「着弾を確認。これでどうかな？」

四脚の巨大なロボット、ネクストがいた。コジマ汚染を防ぐためPA等は展開していないが実弾の狙撃砲はその威力を遺憾なく発揮した。

「そっちはどうだリリウム」

「軍事施設の沈黙を確認。問題ありません王大人」

「見事だな。そっちは撤収しろ。私はここで降伏するまで待機だ」

「了解」

飛び去るネクストを見ながら先ほど王大人と呼ばれた彼は再び政府建物に照準を合わせた。

「しかしなんだな。小さい頃は可愛かったのに今では機械のような対応しかしてくれん。どこで間違ったものか……」

悲壮感漂う声を漏らしながら彼、王小龍は待機した。彼女を育てたのは紛れもな

い彼自身なのだが……その数分後、イギリスは降伏した。

イギリス、降伏

BFF社 side

「作戦は成功したが痛手だったな。まさかマザーウィルを破壊されるとは」

「傾斜の影響で主砲が発射不可、ミサイルも再装填不可、予想外の被害です」

「侵入の経路は？」

「恐らくIS反応を消すため穴を掘り、地中から侵入したようです」

「AFの周りの壁を地中深くまで伸ばしておけ。」

「了解」

「しかし王小龍に助けられるとは、最終手段だったんだがな」

「ネクストの実戦データも取れたので問題ありません。汚染も軍事施設の周囲に限定されているので除染機で対処可能です」

「それは良かった」

この戦闘で気が付かされたのはAFとはいえ決して無敵ではないということであ

る。ISにも反撃の兆しが見えた……かに思われた。

---

また長くなっちゃいましたね。イギリス編終了です。

## 企業連 VS 世界 ヨーロッパ編 1

オームルとインテリオルの複合部隊を相手取るヨーロッパ、さあどうなる？

「北欧は戦争に参加しないとのことですよ」

「となると……」

「ええ、我々インテリオルもそちらに加勢します」

「それは有難い。わが社のAFはイクリプスしかないもので、助かります」

「いえいえ、お互い様です。それにイクリプスは我々との共同開発じゃないですか」

「それもそうですね。ではよろしくお願いします」

ヨーロッパ side

「現状企業連と開戦した全ての国は降伏している。見たところ通常戦力はおろかISでさえも歯が立たないらしい」

「よもやISを上回る兵器が登場するとは……」

「そこで今回の作戦は海と陸の両方から強襲し、オーメル本社を攻撃する流れでいきます。通常戦力も投入しISへの砲火を減らす作戦です」

「通常戦力は囷ということか。まあそれくらいしか手段がない……か……早速部隊を編成、攻撃を開始！」

「了解！」

オーメル社周辺side

「まさかインテリオルが協力してくれるとはな」

「お陰でAFも揃えられましたね」

「だな」

彼らの見る先には海に浮かぶ巨大な水中翼船に陸には変な玉が6つ乗ったランドクラブ、飛行場には円盤が待機していた。

「流石にGAやテクノクラートよりは数が少ないな」

「あいつらがおかしいんだ。なんで量産型とはいえAFを数十の単位で用意できる

んだあいつらは！」

「物量が奴等の得意分野だからな」

用意された数は全て合わせて6機、GAやテクノクライトと比べれば遥かに少なかった。

「BFFは1機だけだったろ？」

「その1機が十分すぎる戦力だったんだよ。はてさてどうなることやら」

ヨーロッパ軍 Side

「作戦を説明します。陸海空全てで同時に強襲、敵のAFの火力が分散した隙にISでオーメル本社を攻撃する流れとなります。正直に言えば君たち通常戦力は囿です。存分にその役目を果たしなさい」

「了解！」

説明が終わった後兵士達は持ち場に戻りながら……

「けっ、上の連中は気楽でいいな。俺も女だったなら……」

「分からんでもないがそれ以上は言うな。言っても何の意味もない」

「それにあいつらは落とされても死なないんでしょ？ 訓練の時に見たけど皆笑顔でしたよ。ゲーム感覚なんでしょうね」

「死の恐怖が無いのは良いことなのやら悪いことなのやら」

女は安全に戦い、男は使い捨てられる。今までの戦闘も死者は全て男である。これが現代の戦いの常識であった。

オーメルside

「敵の進軍を確認！」

「数と方位は？」

「これは：：陸海空全てが全方位から物凄い数です！」

「ちっ、GAならともかく我々の戦力は6基のAFとネクストだけ：：：まあ余裕か、全戦力を投入、海は全てステイグロに任せろ、イクリップスは空と陸を担当しろ！」

「了解！」

ヨーロッパ海軍side

「こいつは壯観だな。フランス海軍にイタリア、ドイツ海軍まで集結か」

「これでも上は不安みたいです。何でもアメリカはこれ以上の戦力で負けたとか」「何奴等のことだ、馬鹿正直に正面から行ったんだろう。我々は全方位からだ。少しは効くだろう」

「だといいんですが……ッ！敵！正面から2機！バカデカイのが来ます！」

「攻撃開始！」

シュババババババ！

放たれる大量のミサイル、ヨーロッパ全ての海軍が集結しただけのことはあり、それはAFにも匹敵する数だった。が……

「敵の損害ほぼ無し。有効射認められず！」

「そんな馬鹿な!? 何発打ち込んだと思ってる!?!」

水上AF部隊

「何て今頃騒いでるんだろうな。こいつの装甲があんなちゃんけなミサイルで破れるかよ」

「見たところ船だけのようです。当然……」

「ああ、ブレード展開！ 凧ぎ払え！」

シューイーーン

小気味良い音と共に青く光るブレードが艦首に展開された。これがステイグロの主兵装である光波ブレードである。その威力は当たればネクストでさえも真っ二つにするほどであった。

ズガン！ズガン！ズガン！

陣形を組んでいたのが仇となり瞬く間に10隻以上の艦が海の藻屑となった。

ヨーロッパ海軍 side

「何だ！ あれは！」

そう叫ばずにはいられなかった。夢か何かだと思いたかった。信じられるだろうか？ 自分の何倍もある巨大な船が時速300kmに迫る勢いで艦隊を凧ぎはらっているのだ。

「これは悪い夢だ。そうなんだr」

ズガン！

水上AF部隊

「戦況はこちらの優勢です。後数分もすれば終わるでしょう」

「そうだな……ッ！」

「どうしました？」

「何か嫌な予感がある。警戒を強化しろ！」

「了解……これは!？」

「どうした!？」

「ISです。数は2機！速度は……嘘？マッハ3です！」

「何かの間違いなんじゃないか？」

「いえ、機械の故障はありません。現実です！」

「すぐに本社に連絡！その早さではステイグロでは対処出来ない！」

「了解！」

その瞬間音が割れた。すぐそばを音を置き去りにしたISが通過したのだ。しか

し……

「何だあれは？ 姿形が既存のISからかけ離れていたぞ？」

「まるで戦闘機みたいな形をしましたね」

それは奇しくもAFの攻略の最適解、超スピードで強襲するというものだった。

---

ステイグロ……ネクスト相手だと弱い(他と比べると)ですが水上船に対しては絶大な戦闘力を発揮しますよね。300km前後で走り回って当たれば真っ二つのブレード、恐ろしすぎる。

マッハ3のIS……現実でもマッハ3程度までなら出せるらしいのでいけるかなと。姿形はブラックグリントの登場シーンのやつを想像してください。

## 企業連 VS 世界 ヨーロッパ編 2

あんなもの登場！正直あれって母艦のランドクラブいるんですかね？エネルギーも完全に自律してるとっぼいんですが……

ステイグロが戦闘しているときオーメル社付近でも戦闘が始まっていた。陸と空からの同時攻撃である。それに対処するのは空飛ぶ円盤イクリプスである。

イクリプス部隊 side

「高度300mを維持、上下のレーザーで陸と空を制圧するぞ！」

「了解！」

3機のイクリプスはオーメル本社を囲むように配置され低い高度を保っていた。設計段階で上への攻撃が行えないという欠陥が見つかり円盤の上下にレーザー砲を配置したため低い高度であれば地上と空とどちらにも対処出来るのだ。

「敵の数は多い。風ぎ払うように放て。……てえー！」

いきなり敵が燃えた。レーザーは漫画とかだと色とりどりの派手な戦闘が見られるが現実では無音で無色、つまり見えないため非常に地味な戦闘となった。しかし威力は高いため……

「ぎゃああああ！何だ？いきなり燃えー」

「うわあああ！熱い！熱い！ぎゃあああああ！」

阿鼻叫喚地獄絵図であった。レーザーは目に見えない上弾速は光の速さ、回避など出来ない。

「思ったより順調だな。ISの反応は？」

「今のところありません。ん？」

「どうした？」

「レーダーの故障……でしょうか？マツハ3でIS反応が近づいています！」

「故障だろう。マツハ3などVOBでも使わなければ出せない。ISがそんな高速を發揮出来る筈が……」

キイイイイイン

「今のは？」

「ISです。信じがたいですがマツハ3の速さで飛んでいます！」

「すぐに本社に連絡！」

「はい！」

オーメル side

「報告！3機のISがマツハ3の速さで接近中！」

「すぐにあれを出せ！汚染は気にするな！時間はかかるが除染すればいい！」

「了解！」

「各員に通告！オーメル本社をコジマ戦闘モードに移行！」

コジマ戦闘モード、それは本社付近でコジマを使った戦闘をする際社員の汚染を防ぐため建物を完全に密閉し、中の気圧を少し上げてコジマ汚染を防ぐというものである。このお陰で本社付近でもネクストの使用が可能となる。しかし今回は：

ゴゴゴゴゴゴ！

出てきたのは1機のランドクラブ。ただし普通のランドクラブとは違い主砲を全て下ろし何やら玉のようなものを6つ載せていた。

「ソルディオス・オービット発進！」

その掛け声と共に面妖な玉が自律飛行を始めた。玉……ソルディオス・オービットはPAやQB、AAさえも備えるいわば小型の無人ネクストとでも言うべき兵器であった。放たれたオービットは本社を囲むように浮遊、来るISを待ち構えた。

### ヨーロッパIS部隊

彼女等はマッハ3という前代未聞の速度でオメル本社に強襲を仕掛けていた。「凄まじい速度ね。でもISを装備していると風圧すら感じない。まるでゲームね」「おまけに通常戦力に目がいつてほとんど迎撃も無し。やっぱりISが最強かー」「フラグを立てないで、フラグを。そろそろ本社が見える頃ね。流星にこの状態だと身動きが取れないから距離1000でページジするわよ」

「了解！」

彼女等が装備したのは大型のブースター。といってもVOBとは異なり戦闘機のような物の中にISが入り込む形となっている。身動きが取れない代わりにマッハ3という凄まじい速度を誇る。

「距離2000、1900、1800」

だんだん近づくオーメル本社

「1700、1600、1500……ん？」

距離が1500になったときにそれは見えた。禍々しい緑色の粒子を垂れ流す玉が浮かんでいたのだ。

「1400……何あれ？……きゃあああ……」

一閃。緑色の光に飲まれた彼女はそこから消滅した。絶対防御すら貫通し肉片を一片も残さず消し飛ばしたのだ。それを見るや否や

「緊急パージ！絶対にあれは回避！本社より先にあれを潰すわよ！」

「言われなくとも！」

「しかし何これ？ふざけてるの？」

「面妖な……変態技術者供めが……」

彼女等はオービットを驚異と判断。落としにかかるも……

ドヒャアドヒャアドヒャア

QBで避けられる。

「くっなら！」

ミサイルをばらまく。面制圧なら行けると判断したのだ。しかし……  
ドドドドドドヒャア

6連にも及ぶQB、パイロットがいらないからこそその芸当である。

「これなら！」

マシンガンを撃ちまくる。が……

パシユンパシユン

緑色の閃光が迸り弾丸が防がれる。

「これでどうだああああ!!」

移動先を読みブレードを構え接近する。だが振り下ろす瞬間

ドシユウウウウドッゴオオオオオオン!

AAが炸裂、また1機ISがパイロットごと世界から永久に消えた。

「何なの！何なのよおおおお！」

残された1人はパニックになっていた。仲間が瞬く間に死亡したのだ。それは

ISを纏っていても死ぬということ。生まれてこのかた死の恐怖を味わったことのない彼女が錯乱するのは当然であった。

「ウヒヒツ私見ちゃったもんね。あのでかい奴からこいつらは出てきた。しかもあんなレーザーを乱射するということはエネルギー供給を受けているはず。母艦を潰せば！」

彼女はオービットには目もくれずランドクラブに一直線。改造されたランドクラブには武装がなく破壊は容易だった。

「やったわ！これで心置きなく本社を……」

しかし忘れてはいけない。オービットはいわば小型のネクスト、コジマジエネレーターを積んだオービットにエネルギー切れはあるだろうか？そう、無いのである。つまり……

ビシュン！

声を出す間もなく彼女も消えた。

ヨーロッパside

「嘘!? ISが!?」

驚くのも無理はない。報告によればIS反応が消滅、つまり貴重なコアが失われたということ。つまりは……

「ISを使つて死んだ……ということ?」

「はい」

「私はもう止める。もし戦争を続けたい国があるなら続けなさい」

誰も手を上げない。貴重なコアを失いたくないのだ。

「なら……降伏ね。正直オーメルを過小評価してた私も悪い」

ヨーロッパ、降伏

オーメルside

「戦闘終了。オービットの活躍で本社に被害無し」

「ソルディオスの威力があそこまでは……これネクスト相手でも余裕なんじゃないか?」

「そんな気がしません。本当に味方でよかったですねトールラス」

「もし敵ならネクストの技術も奴等だけの物だし……恐ろしいな」

「まあ味方としてこれ以上の物はありません」

「だが……」

外を見れば帰り場所を失い漂うオービットとコジマの緑色が立ち込めていた。

「これは……除染に1週間はかかるぞ。きついな」

「まあ強力な物には大抵大きなデメリットが付いてくるものです」

「初運用だし仕方ないな」

ソルディオス・オービットの戦果は世界中を揺るがした。無人兵器で最強無敵のISが破壊されたのだから。それは企業連内も例外ではなかった。

あんなもの……強すぎましたかね？正直ネクストでさえもてこずる相手なのでISからしたらこんな感じかなと。次回はついにオリジナルのAFが出撃します。

## 企業連 VS 世界 日本編 1

待ちに待ったオリジナルAF登場です。

日本side

「ようやくこの日が来たわ。開戦よ。覚悟なさい有澤重工！」

日本の開戦は最も遅く与えられた猶予を使いきっての開戦であった。勿論原因は与野党の足の引っ張り合いである。いくら国会が女尊男卑の波にのって女性で溢れていても議論は全く進まなかった。揚げ足の取り合いに責任の押し付けあい。そこには日本という国の闇が色濃く出ていた。勿論報道はされなかった為国民はこの事を知るよしもない。

「はあはあ、どうして開戦前なのにこんなに疲れてるのかしら？これだから無能な野党共は！」

人はこれをブーメランという

「でもここまでこれたなら後は簡単。幸い他国の状況も分かったことだし」

他国の状況、それは彼女の予想を遥かに上回っていた。まともな戦いになったのはイギリスだけ。他はほとんど手も足も出なかったというのだ。

「取り敢えずは通常戦力は無意味、なら最初からISを使うのは確定。後は……」  
そして一番の課題、AFである。

「数の暴力ってこうも厄介だとはね。搦め手もなにもあったもんじゃない。あるとすればISを展開せず接近、強襲ってところ？」

今のところ唯一打てる手がこれであった。

「日本で陸上AFの運用は事実上不可能。とすれば十中八九水上型のはず。なら水中から強襲すれば！」

彼女は少しだけ見えた勝機を掴むため指令室に急いだ。

有澤重工 side

「今日が指定した期間の最終日だな。何も反応がないのを見るに奴等はやる気のないのだ。AFは？」

「発進準備できています。迎撃を考えるとそろそろ発進した方が……」

「だな。SOKOKURA、出る！」

「SOKOKURA、発進シークエンス開始！」

大地が……揺れた。海岸に位置する有澤重工本社が揺れ始めたのだ。すると……ドガンドガンドガン！

本社を囲むように連続した爆発音。さらに……

「偽装解除！ 抜錨！ SOKOKURA発進！」

本社ビルの表面が剥がれ落ち出てきたのは立派な艦橋。そう、有澤重工はあろうことか本社をAFに変えたのだ。爆発音と共に露になる甲板、鈍く光る素人目にも分かる重厚長大な戦艦がそこにはいた。その外見はかの戦艦大和に酷似していた。サイズ以外は。

ここで有澤重工のこうなった経緯を説明しよう。

戦争が起こることを知る

←

国民に少しでも被害が出れば勝っても負けても猛烈な批判は避けられない

← なら標的となる本社をどこかに動かせばいい

← ならAFに改造してしまえ！戦闘がこなせて日本には被害がでない。完璧だ！  
ということである。

「しかし、壮観だな。やはりデカイ船が動くというのは心が踊る」

「船と言うよりちよっとした島ですね。ここまでだと」

SOKOKURAの大きさは全長500m、全幅80mと戦艦大和のおおよそ2倍の大きさ。その巨大な船体が霞むほどの威圧感を放つのが艦橋の前に設置された2門の巨大な砲。単装砲だがその大きさのため凄まじい存在感を放っていた。160cm、小柄な大人なら入れてしまうほどの大口徑とそれに見合う長い砲身、それを支える巨大な砲塔、世界最大と言われたドーラ・グスタフ列車砲でさえも足元にも及ばないそれは大鑑巨砲主義の頂点とも言える主砲であった。

「沖合いに出たら艦首を東京に向ける。照準は東京湾の入り口と日本海を狙え。間違ってもアクアラインに当てるなよ？後が面倒だ」

「了解！」

「さてさて奴等は考えてもいないだろう。まさか既に首もとにナイフを突きつけられているなぞ」

200 km、規格外の大きさから放たれる砲弾の射程も規格外、65 mの長砲身から放たれる砲弾は本州を飛び越えるだけの射程を有していた。それが2門も搭載されているのだ。

「さあ、どこからでもかかってこい。発進したSOKOKURAは逃げも隠れもせんで！逃げも隠れも出来ないというのが正しいが……」

その巨体ゆえに速力を出せても20ノットが精一杯、通常時は15ノット程度しか出せない。

「SOKOKURAは全ての攻撃を耐えきった上で大火力で叩き潰すまさに正統派AF、さてISよどこまで耐えられるかな？」

その戦法は社長お気に入りのかチタン戦法であった。

日本IS部隊side

「作戦の概要を説明します。目標は有澤重工、有澤重工は現在超大型兵器を沖合いに展開、本社を兼ねているこれを破壊するのが今回の作戦です。真っ向からでは歯が立たない事が予想されるので目標まではISを展開せず泡の出ない軍用ダイビング装備を使用して接近、敵のどこかに穴を開け沈める流れとなります。ISの展開は直前に行い、作戦の成功失敗に関わらず即座に離脱してください」

「了解！」

「また穴を開ける装備ですが既存のパイルバンカーを改造した物を使用してください。流通している有澤重工製装甲を貫通できることが確認されています」

「了解！」

「では作戦開始！」

亡国企業side

「あつけないな、どこの国も。たかが企業と侮りすぎだ」

「ですね」

「しかし良かったです。あなた方と協力関係を築けるとは」

「いえいえ、win-winの関係という奴です。お互いに利益があるならやらない手は無いでしょう？それに過程はどうあれ我々の利害と目的が一致している以上おかしい話ではないはずです」

「しかし我々は今までやってきたことがやってきたことです。受け入れられないと思ってきました」

「ですが……分かってますね？」

「ああ、汚れ仕事は我々の仕事だ。特に表立って出来ないことは」

「ええ、よろしく願います。企業連との繋がりを強くする好機です。そちらにとっても、悪い話では無いと思えますが？」

「今のところは……な。こちらの要件も忘れないでほしい」

「それについてはお気になさらず。我々は企業です。対価に見合うだけの仕事はいたします」

胡散臭い笑みを浮かべながら企業連の仲介人は去っていった。

有澤重工がAFを作るとこんな感じかなあと。発進シークエンスは宇宙戦艦ヤマトを参考にしました。

## 企業連 VS 世界 日本編 2

毎日投稿再開です。お待たせしました。

---

発進シークエンスを終えたSOKOKURAは愛知県の沖合い40kmのところ  
で艦首を東京湾に向けて停止した。

「SOKOKURA指定エリアに到着しました」

「よし。このまま奴等が来るまで待機だ」

「了解」

艦橋の一番高いところにある艦長……社長席に隆文はいた。

「準備万端だな。何か動きがあるまで下がっておけ」

「はい」

社員を下がらせた隆文の脳裏に浮かぶのは最近連絡がとれていない息子、隆彦の  
ことだった。

「今何をやってるんだお前は。学園にもいないというし企業連に聞いても「答えられません」としか言われぬ。不安だ……」

しかし口に出したところで違和感に気がついた。

「ん？「知りません」じゃなくて「答えられません」か……真実を伝えぬ事はあっても嘘は言わない企業連だ。まあ大丈夫……だろうな」

彼の放った言葉は誰にも届くことなく消えていった。

## 日本 IS 部隊

「まさか IS でダイビングをする日が来るなんてね」

「デコイと合わせれば発見される可能性は限りなく低いわ。ただし詳細が分からない相手だから何かあったらすぐに離脱すること。いい？」

「了解です」

日本の IS 部隊は有澤重工の AF に向けて密かに水中を行動していた。彼女等の言ったデコイとは空中を高速で飛ぶレーダーの反応だけは強い無人の飛行機である。他国が超高速による強襲を行い、それが有効だったことを踏まえた作戦である。しか

し、超高速でも撃墜された例もあったためこのような作戦となった。

有澤重工 side

「敵機確認！マッハ2.5にて本艦に接近中！」

「総員持ち場に着け！対IS戦闘用意！」

カーンカーンカーンカーン

号令と共に鳴り響く鐘。それと共に閉められる戦闘に関係ない区画の隔壁。船内は一気に慌ただしくなった。

「数は!？」

「右舷から2機、左舷から5機来ます！」

「狼狽えるな！側面のガトリンググレネードを使え！」

「了解！ガトリンググレネード、自由射撃開始！」

SOKOKURAのレーダーはあまり高性能ではないため敵機を捕捉し、戦闘用意を整えた時にはかなり接近していた。

「敵機のミサイル発射を確認！」

「敵機だけを狙え！ミサイルごとときでSOKOKURAは沈まん！」

ドガガン！

音と光だけがあった。ミサイルが着弾したSOKOKURAは揺れさえ起こらず、着弾地点が少し煤けた程度であった。

「損害ほぼ皆無！」

「我が社の装甲を甘く見るな！」

ヴーーーーーー

その頃外では射程に捉えたガトリンググレネードが対空射撃を開始していた。連続で爆発するグレネードの爆炎と煙でSOKOKURAが見えなくなる程であった。

「敵機全て撃墜！増援認められず」

「よし。状況終了だ。まだISが来ていないから警戒を怠るな」

「了っ！」

「どうした!?!」

「なぜ気がつかなかったんだ？魚雷です！数は6本！左舷から来ます！命中コースで

す！」

「総員衝撃にそなえええええ!!」

ドン!

鈍く響く音は魚雷が命中したことを示していた。

「報告！」

「左舷の装甲が凹みました！他は特に異常無し！」

「ふむ……次からは気を付けろ！魚雷は最優先で捕捉、迎撃しろ！」

「了解！」

「しかしなんだあの魚雷は？凄まじい威力だった」

それもそのはず、この一週間日本は何もしていない訳では無かった。命中した魚雷は新型の魚雷でありそれは戦時中に猛威を振るったロングランス、酸素魚雷であった。電動のものよりパワーがあり、炸薬を倍近く詰められるのだ。現代技術で作られたそれは高い威力があり、あわよくば撃沈を狙ったものだったがSOKOK URAの装甲がそれを防いだのだった。

S O K O K U R A 近海、海中

「ようやく着いたわね。敵の反応は？」

「動き無し。気がついていないようです」

「杜撰な警戒ね。各自持ち場について」

S O K O K U R A には対潜ソナーの類いが一切なく彼女等の接近に気がつかなくなったのだ。通信もレーダー以外の索敵装備が無い為気がつくことは無かった。

「いくわよ？ 3、2、1……：発射！」

「『発射！』」

ズゴン！

海中からの攻撃のため鈍く、重い音と共に巨大な S O K O K U R A が揺れた。艦橋は蜂の巣を突っついたような大騒ぎとなり

「なんだ!? 今のは？」

「もうダメだ〜おしまいだ〜」

「狼狽えるな！」

隆文の一声で皆は冷静さを取り戻す

「状況を報告しろ」

固まっていた社員も動き始め

「左舷艦底より浸水を確認。隔壁閉鎖により浸水は食い止められ、注排水装置のお陰で傾斜も復元しました」

「よくやった。ここからは我々の番だ。対潜戦闘用意！」

「そんなものはありません！」

「ガトリンググレネードを海に撃ち込めばいいだろう？」

「ハッ！確かに！」

「固定観念に囚われてはいけない」

「肝に命じておきます」

一方その頃海中では

「穴は空いたけど小さすぎる。実験じゃ大穴が空いたっていうのに！」

「恐らく有澤重工が表に出しているのはモンキーモデルかと。離脱しましょう」

「くっ！」

そう言った瞬間彼女等の全身に凄まじい衝撃が襲った。大量に撃ち込まれたグレ

ネードが水中爆発を起こしたのだ。ちなみに空气中で爆発するより水中の方が威力が高まるのである。

「きゃあああああああ！」

まるで高いビルから落下したかのような衝撃に彼女等は意識を失った。

「海中の様子は？」

「ソナーが無い上に今は海中がかき回されてあったとしても探知出来ません」

「そうか、だが第2撃が無い辺り損害は与えただろう。そろそろこの茶番にも幕を下ろすか」

「茶番だなんて言わないでください。一応戦争ですよ？」

「こんなものは戦争ではない。断じてな！」

隆文は一度目を閉じると……

「主砲照準合わせ！ 目標は東京湾入り口と日本海！」

「第1第2主砲、発射！」

「うちーかたーはじめー」

ズゴオオオオオン！

S O K O K U R A の巨体が震え、後ろに下がった。

総理官邸

「IS部隊、撃破されました。自動の救難信号が出ています。恐らく操縦者の意識は無いものかと」

「そんな!? デコイを使った陽動も行ったのでしょう?」

「新開発の魚雷も効果が無かったそうで。恐らく表に出していた装甲板はモンキーモデルだったのかと」

「作戦を建て直すわ。まだISは残って」

ドガアアアアアアン!

遠くの方から爆発音が聞こえた。

「今のは!?!」

「東京湾入り口に巨大な水柱を確認。恐らく敵の砲撃かと!」

「ここからAFまで何kmあると思ってるの?」

「追加の報告！佐渡島付近に巨大な水柱を確認！」

「何ですって!?!」

本州を飛び越える長射程、実弾では考えられない射程であった。

「恐らくここも射程内です。今のはいつでも攻撃できるぞという威嚇射撃では？」

「甘いわね。ここに撃ち込んだが最後、有澤重工は日本に居られなくなるわ。奴等は撃てない」

そう言った彼女は大きく息を吐くと

「じわじわ攻撃しなさい。どうせこっちは攻撃される心配は無いのだから」

間違っていないかった。しかし……

1 週間経過……

「まだ沈まないの!?!」

「何分規格外の装甲でして、肉薄すれば凄まじい弾幕が襲いかかりどうにもなりません」

「いつかは資材が尽きる筈よ。それまで持ちこたえれば」

「お言葉ですが国民の批判が殺到しております。野党も連日批判を続けており、支

持率も低下しておりまして……」

「何よ！たかが1企業に屈服しろと言うの？」

「他国の例を見るに企業は国を乗っ取ることはせず、むしろ国の発展に勤めているとのことで国民からもさっさと企業に降伏しろとの声も……」

「だったら自分でやってみなさいよ！そもそも戦争には賛成だったくせに！」

「国民は有澤重工が敵であるだけ知らされ、野党はずっと反対していたのを強硬採決したんですがね……」

「何か言った!?!」

「いえなにも」

「まずいわ！このままじゃあ！」

不安は的中した。総理は猛批判を浴び、総辞職することとなった。その後次の総理から降伏するという宣言がなされた。

日本、降伏

ひとまず企業連 VS 世界は終了です。ここから完結まで一気にいきますよ！

---

## IS 学園襲撃

AC ネットでこれは外せないです。

それと突然ですが名前を変えました。詳しくは活動報告を見てください。

---

俺の名前は有澤隆彦。現在オールドキングと共にネクストを纏いIS学園に向かっている。まずはここに至るまでの経緯を話さないといけないな。あれは企業連が世界と戦争を始める前の話だ。

「君にAMS適正が確認された。既にISを所持している都合上本来は与えられないのだが、もしある任務を受けてくれるなら君専用のネクストを用意するんだがどうかな？」

「お願いします！」

そして企業連からの任務は……

「おい、相棒。そろそろ学園が射程圏に入る。てめえのデッカイ大砲用意しな」

「了解」

俺は指示通りにISサイズではない本来のバカデカイOIGAMIを展開する。

「まずは一発でかいのをぶちこむ。てめえの火力は頼りになる。引き込んで正解だった」

そう。俺は企業連が要注意人物としているオールドキングと行動している。なぜなら……

「フッフッフッフ、世界を変えるのに国と戦争？この騒ぎの根幹はここにある。ここからあんなクソアマがどんどん出てくるんだ。早いうちに潰すのがいい」  
こいつの監視だ。もし企業連の不利益になりそうなら即刻始末しろと言われている。悲しいかなネクストはノーマルとコジマジエネレータにコジマブースターがあれば誰でも作れる。AMS適正と腕があれば企業連の廃棄物からネクストが作れるって寸法だ。だからこんな奴がネクストを所持出来るんだ。

「頃合いか。撃て」

「精度は期待しないでくれよ？」

ドガン！

俺が放ったO I G A M IはIS学園の手前の海に着弾した。だが威力は凄まじく軽い津波が学園を襲うことになった。

「すまんオールドキング。弾がフォークしちまった」

「気にすんな。そんなデカイ大砲だ。精度は期待してねえ。まさか学園に当たりすらしないとかわらなかつたがな」

「次弾装填中だ。どうする？」

「俺が突っ込む。あんなガキ共に苦勞することはないだろう。てめえはさっさと装填を済ませろ」

「了解」

俺は照準をオールドキングの無防備な背中に合わせた。

オールドキング side

こいつを引き込んで正解だった。なんだ？あのトチ狂った火力は？軽い津波が起こってるじゃないか？敵対はしたくねえな。

「てめえはさっさと装填を済ませろ」

そう言い捨てる俺はショットガンを構えて学園に突っ込んだ。中古品だが性能は折り紙付きだ。上手く同情を誘ったガキはちゃんと仕事をしてくれる。精度が思った以上に悪いが誤射の危険はないだろう。念のため味方登録はしてないがロックオンアラームも無い。いけるぞ！

そう思い突っ込んだオールドキングに突如衝撃が走った。気がつくとも海に墜落し纏っていたネクストは大破、かろうじて動くものの戦闘続行は不可能だった。

「畜生、一体何が！」

「騙して悪いが仕事なんでな」

味方のはずのガキだった。

「て、てめえ。裏切ったのか!? 味方じゃ無かったのか!? だがロックオンアラームは鳴らなかった筈だぞ!？」

「そう言う時点で最初から俺を疑ってたらしいなオールドキング」

「当然だ。俺は疑い深いからな。まさかこのタイミングで裏切るとは思わなかった」

「お前を確実に始末し、尚且つ企業連の株を上げる絶好の機会だからな。元々お前は企業連にマークされてた」

「だがあの時のためえは嘘をついてる目じゃなかった。どういうことだ？」

俺がそもそもなぜこいつの仲間になったのか？それは学園生活一年目が終わリネクストを手にした時にこいつが接触してきて

「俺と一緒に刺激的な革命を起こそうぜ？」

胡散臭いオールドキングについて行き話を聞くとこいつが女性に恨みを持っていること。所属している亡国企業のやり方に不満があること。なぜ女性に恨みを持つようになったのかの経緯を事細かに説明された。俺は聞き入っていると

「なあ有澤隆彦、いや相棒。俺と一緒に来い。お前は学園に詳しい。俺が一人でやるより無駄な犠牲者も減るぞ？」

大方感受性の高いガキだからと侮ったのだろう。行くと答えた俺をこいつはすんなり受け入れた。

「実はなオールドキング。俺は得意なことがひとつある。妄想だ。こいつは凄いで？俺はこうなんだと思ひ込むと言動がそれっぽくなってその道のプロでも見分けるのに苦労するらしい。見事に騙されたんだよ、お前は」

それを聞いたオールドキングは悟った声で

「なるほど。確かにてめえ以上に適任はいねえな。油断を誘いやすいガキで俺が仲間にするメリットがあり、不意討ちがバレにくい実弾兵器に一撃必殺か……なあ、俺をどうする気だ？ 殺すか？」

「いや、お前は殺さない」

「けっ。善人ぶりやがって」

「お前はここで殺さない。公の場で我々企業連の宣伝に付き合って貰おう」

「俺と言うテロリストを始末した偉大な企業連ってか？ 戦争で大勢殺してるくせによく言うな」

「戦争で死んだものは全員戦闘員だ。お前が殺そうとしたのは戦う術を持たない無害な生徒達だ。もし本気で女性を殺す気なら世界大会にでも殴り込めば良かっただろう？ 自分より弱い奴を蹂躪しようとした時点でお前はその程度ってことだ」

「善悪なんざ人によって違う。俺にとっちゃあ世界中の女、特にこんなクソツタレな世界の原因となった束とかいう天才が悪だ。俺は正義だ」

「何を言っても無駄らしいな。拘束させてもらおう。言っておくがお前がしようとしたことはただの大量殺人だ。世界の誰も同情はしないだろうさ」

「そいつはどうか？」

こうして学園襲撃は未遂に終わった。被害も学園を軽い津波が襲った程度でほとんど皆無、世界はこのまま平和へと突き進む……答だった。

騙して悪いがは最早伝統ですね。無理にロックオンの必要がなく、一撃で決まる。グレネードキャノンは暗殺兵器だった!?



## 束の間の休息

戦いばかりでは疲れるので日常編も挟みます。まあ次回からまた闘争が始まるんですけどね！

---

無事にオールドキングによるテロ行為を未然に防いだ企業連はこれを大々的に公表した。企業連という正義が亡国企業という悪を打ち破ったのである。任務を終えネクストを入手しホクホク顔で学園に戻った隆彦を迎えたのは……

### IS学園自室

今俺は経験したことの無い窮地に陥っている！というのも……

ゴゴゴゴゴゴゴ

あるえく可愛い笑顔を浮かべている簪さんから黒いオーラが見えるぞお？あつ足が痺れてきた。ちよつと崩S

ニコッ

あっこれアカンやつや。大層ご立腹のご様子。おかしいなあ怪我とかしてないの  
に

「ねえ、有澤君。今まで……どこで何してたの？」

「それは〜その〜」

やっべえええ！そーういや簪には伝えてなかったっけ！

「実は……」

全てを話した俺は黒いオーラが一層増したのを感じた。

「ねえ、私何て言ったか覚えてる？危ないことしないでねって言ったよね？」

「怪我をするなどは言われたがそんなことは言われt」

ニコッ

「アツハイ、ソウイェバイワレテマシタ」

怖ええよ！脅迫じゃないか！ん？

「ずっと……心配してたんだからああああ！」

怒り顔から一変。涙を浮かべ抱きついてくる簪を俺はしっかりと受け止めた。

そっか、心配してたのか、当然だよな。

「すまない。心配かけた。でも怪我は一つもしてないぞ？」

「ネクスト、コジマ粒子、寿命」

簪の口から放たれた言葉に俺は思わず固まった。何故それを知っている？ 沖合いで戦ったから姿は見られて無いはずなのに？

「実はね……企業連に言ったときに大好きなトールラスと関係を持ってね。聞いちゃったんだ。ネクストのこと。コジマ粒子のこと。ねえ、ネクスト……使ったよね？」

嘘は……言えないな。

「ああ、使ったさ。でもすぐに除染機使ったし俺は若いから影響は少ないって……」

「でも影響が無いわけじゃない！……ねえ、約束してよ。もうネクストには乗らないって。コジマ粒子に関わらないって。君が先に死ぬのは嫌だよ……」

まあ俺にはISがあるし、ネクストはISと違って戦う事だけを目的とした物だ。平和な世界では不要か……

「ああ、二度と使わないと誓おう。ただし、やむを得ない使用は許してくれよ？」

「……分かった。でも本当にやむを得ない時だけだからね！」

こうして俺は久々の簪との会話に花を咲かせた。幸い学園への説明なんかは全部企業連がやってくれたお陰で特に呼び出されたりとかは無かった。

### 企業連 side

「さて、我々企業連は一応全世界の統治権を手にした訳だが依然として企業連への反対勢力も存在する」

「一部の女性達と過激すぎる思考を持った復讐したいと願う男性集団ですか……厄介ですね」

「それとこれは証拠が無い為に噂に過ぎないのだが、ネクストの製造に欠かせないコジマジエネレータといったパーツがいくつか紛失しているらしい。ただの紛失ならいいのだがもし外部にネクスト技術が漏れたとなれば企業連の管理責任が問われる。以降管理を厳重にするように。実際オールドキングも中古部品のネクストを運用していたとの報告がある」

「では企業連内部に内通者がいると？」

「恐らくな。そして今までバレなかったんだ。見つけ出すのは困難だろう」

「恐らく敵の目標はIS学園です。殺しやすく、効果的ですから」

「大至急IS学園に対コジマ戦闘設備を設置しろ。最悪あれを使う事になるかもしれない」

「しかし、あれは周囲への被害が……」

「分かっている。ただし万が一ということもあるからな。備えあれば憂いなしだ」

「了解です」

「他に何かあるか？」

「他のAFもいくつか回しましょう。有澤重工のAFなら防衛にピッタリでしょうし」

「あのキチガイじみたAFか、あれは移動に時間がかかるからな。今すぐ学園に向かうように伝えてくれ」

「了解しました。それと取り敢えず他の水上型と空中型も配備します」

「ああ、そうしてくれ」

「さて、我々の役目はここまでか、後は憎まれ役が舞台を去るだけだな。これでよかったか？」

「ええ、シナリオ通りです。しかし、よかったですか？こんな最後で」

「ああ、我々の当初の目標は企業連が成し遂げてくれた。行き先が混乱している今の亡国企業は潰れた方がいい」

「自分で作った組織なのに随分とあっけない。愛着は無いのですか？」

「無いな、思えばオールドキングだ。あいつが来てから狂い始めたんだ。あいつは煽動が上手いからな。大勢があいつに付いていったさ」

「いつの世も過激な思考の者ほど煽動が上手いものです。かのナチスも煽動が上手かったらしいですよ？」

「だがオールドキングはもういない。後は崩れるのを見るだけだ」

「だといのですか……」

「やれやれしくじっちゃったが終わり良ければ全て良しってな」

男の目の前には複数のネクストがハンガーに立っていた。

「お前ら、準備はいいな？」

「「おう！」」

いい返事だ。さてお前も万全みたいだな。リザ。

傷ひとつない特徴的な逆足ネクストを見上げた男は

「あいむしんかーとうーとうーとうー」

音痴な鼻唄を歌いながら去っていった。

---

最後のは一体誰なんですかね？（すつとぼけ）



## 大決戦前夜

さてさてようやく戦いらしい戦いを見せられます。

それはある日曜日のことだった。長期休暇で自室で眠っている隆彦は

「ん？なんだ？外が騒がしいな」

騒がしい物音で俺は目を覚ました。まったく朝っぱらから何をやってるんだ？

そう思いつつカーテンを開け放つとそこには

カンカンカン、ギュイーン

何やら大工事が始まっていた。

「なんじゃこりゃー！聞いてねえぞ!!」

「んー、うるさいなあ。どしたの？」

どうやら今ので簀を起こしてしまっただけらしい。

「なんか大工事が始まってるとんだ！俺はこんなの聞いてないぞ!!」

「うーん。重要なことなら放送があるだろうし、それがないなら気にする必要がない。もしくは知らない方がいいってことでしょ？」

「確かにそうだな」

暫く寝起きの頭でボーッとしていると

ピンポンパンポーン

『9時より緊急集会を行う。学園に残っている生徒達は着替えて講堂に集まるように』

「どうやら重要なことらしいな。行くぞ」

「うん」

講堂に行くとき普段のおよそ5分の1位の生徒が集まっていた。ここの長期休暇は家に帰っても良し、寮に残っても良しということだけでだいたいこれくらいは学園に残るのだ。帰らない理由は人によって様々だ。壇上には織斑先生が立っていた。何で学園長じゃないんだ？

「集まったようだな。今日緊急で集まってもらったのは他でもない。現在このIS学園にリリアナを名乗るテロリストが襲撃を企てているとの情報が企業連からもたら

された。彼らの目的は貴様らの殺害らしい」

それを聞いたとたん講堂は悲鳴で包まれた。が……

「説明中だ！騒ぐのは後にしろ！」

織斑先生の一言で静まった。

「続ける。貴様らも気がついていと思うが現在この学園は企業連によって最高の防衛システムが構築されつつある。そして何故これを話したかだが……」

暫くの間を開けたのち苦虫を噛み潰した顔で

「率直に言おう。企業連は学園に残っている生徒達を囷として使うことにしたらしい。下手にテロリストが分散せず、防衛システムが完成すれば世界のどこよりも安全だから生徒に被害は及ばないとのことだ。質問がある者はいるか？」

「はい」

「なんだ。有澤」

「今回何も聞かされていませんでしたが企業連が言うのです。生徒達は安全と判断していいでしょう。では何故先生はそのような顔をするのですか？今の話は生徒達には特にデメリットは無いようですが？」

「ちょっと待て」

そう言うと先生はどこかに電話を始めた。暫く経って

「企業連から許可が出たので話すとする。今回の戦闘においてテロリストはコジマ粒子を使用することが想定されているようだ。万が一そうなれば戦闘が終わっても数週間、場合によっては数ヶ月建物から出られないそうだ。幸い学園の設備を改装して全ての建物を地下で繋ぐといった対応をしているらしい」

「先生！コジマ粒子って何ですか？」

その質問が飛んだ瞬間先生がこちらを向いた。あれは要らんことは喋るなという目だな。

「人体に悪影響を及ぼす放射能のようなものと思ってくれればいい。放射能と違って目に見えるし建物を貫通することは無いらしいがな。話せるのはここまでだ」  
なるほど。企業連が許可したのはそこまでか。

「では解散とする。各自今後は放送を聞き、その指示に従うように！それと有澤と更識は残れ」

生徒がいなくなった講堂で俺は簪と一緒に織斑先生と向き合った。

「まず聞くが今回の事は貴様らは何も聞いてないのだな？」

「はぐ」

「ふむ……私が聞かされたコジマ粒子の危険性は喋った内容だけだが戦闘経験のあるお前に聞こう。本当に生徒達に被害は出ないんだな？」

真っ先に聞くのがそれか、教師の鏡だな。

「はい。それにお忘れですか？企業連には東博士がいます。あの方があなたに被害が出るような作戦を黙って見ていると思いますか？」

すると納得した顔で

「それもそうか。昔のあいつなら私だけ無事ならいいとか思ってたけど最近のあいつは変わった。なんとというかマトモになったとかうかなんとかいうか」

先生、多分自分よりヤベー奴に出会って考え方が変わっただけです！

「引き留めて悪かった。聞きたいことはそれだけだ。それと……」

「ん？何ですか？」

「これはお願いだ。自分に被害が出ない範囲でいいから万が一のときは手を貸して

くれ」

「お安いご用です」

「それは良かった。では貴様らも部屋に戻れ！」

「はい！」

### IS 学園敷地内

「まじでこいつを使うのか？」

「いや、使わんならそれに越したことは無いらしい。万が一のためだそうだ」

「使わんといいが……」

作業員は学園の中心に設置されたバカでかい骨だけの傘を見ながらそう言った。

「しかし、テロリストはどんな規模なんだ？海を見てみる」

海には有澤重工製AF、SOKOKURAにGA社製AFギガベース、インテリオル製AFスティグロといった水上型AFが並んでいた。

「ネクストを相手にするんだろうな。じゃなきゃ学園の建物に対コジマ戦闘設備を着けたりしないさ」

「ネクストをテロリストがか……恐ろしいな」

「噂じゃ IS を赤子みたいに捻り潰せるらしいからな。だとすればこの重装備も頷ける」

「おい！何をサボっている!? 作業はまだまだ山積みだぞ!？」

「いっけね。作業に戻るぞ！」

「おう！」

作業は急ピッチで進められていた。生徒達が住む寮と校舎を最優先に対コジマ戦闘設備が増設されていく。元々要塞のようだった学園は完全な要塞に生まれ変わりがつあった。それはひとえに文句を言うであろう国々を戦争で黙らせたお陰である。

リアナナside

「不味いです。IS 学園が急ピッチで改造されているそうです」

「チッ。企業連め。邪魔をしゃがって」

「どうしますか？」

「奴等の事だ俺達が出撃するよりも改造が終わる方が早いだろう。だがやりようはある」

「ああ、そう言えば奴等がいましたっけ？」

「ああ、奴等がいるから俺たちはここにいる。奴等がいるから企業連相手でも勝ち目がある。恐れることはない」

「では俺たちはやるべき事をやりましょう」

「だな」

恐らくこれが最後の戦いになるであろう。今までのどの戦いよりも過激な戦いに……

---

原作ではクレイドル21を占拠したりリアナですが今作ではIS学園を襲撃するそうです。彼らの自信は一体どこから来るんだ？

## 大決戦 その1

AFが大量に集まるとなんだか大怪獣決戦みたいですね。

リリアナside

「いよいよ決戦のときだ。装備のメンテナンスは済ませたな？ 肝心なところでトラブったら洒落にならないぞ？」

「問題ありません！」

「そいつはよかった。じゃ、行こうか」

すると彼らが背負った巨大なブースター、VOBに入ると瞬き一つする間に音速まで急加速、IS学園目掛けてあっ飛んでいった。

IS学園近海

「壮観だな。やはりAFはいい」

そう呟く社長、有澤隆文の前には企業連が保有する全ての水上、飛行型AFが集結していた。その数イクリップス2機にスティグロ2機、SOKOKURAの計5機。その中でもずば抜けて巨大なSOKOKURAが旗艦となっていた。

「レーダーはどうだ？」

「レーダーに未だ感無し」

「敵はいつ来るか分からん。交代しつつ常に嚴重に警戒しろ」

「了解」

索敵能力が乏しいSOKOKURAは警戒中のスティグロとデータリンクを行い警戒していた。レーダーのデータはSOKOKURAに送られるためスティグロはただ走り回るだけで良いのだ。

「今日はもう来ませんか？そろそろ日が暮れますよ？」

「夜襲もあり得る。警戒を怠るな！疲れたなら交代しろ」

「了k……むむ！」

「どうした!？」

「奴さん来やがりました。数は10機！恐らく速度的にVOBを使用しているもの

と思われます！多分10機共ネクストです！奴さんどっから調達したんだ!？」

「今はそんなことはどうでもいい！迎撃開始！」

主砲を前方にしか撃てないSOKOKURAは2門斉射ののち転進、横っ腹を向けてガトリンググレネードを放ち始めた。サイドスラスターのお陰で転進は案外早いのだ。それに続くように

イクリプスのレーザーが……スティグロのミサイルが……敵に襲い……かからなかった。

「どうなってる!？」

「報告！イクリプス及びスティグロの全兵装がロックされているようです！」

「何だと!?!しかし何故SOKOKURAは無事なのだ?」

「恐らく全てコンピューター制御のイクリプス等と違いSOKOKURAは兵装は全てマニュアル制御なのが原因かと」

「機械任せにするからこうなる！役立たずは下がらせろ！沈むと高くつくぞ！恐らくSOKOKURAだけでは防ぎきれん。最終兵器を起動しろ！あれの起動には時間がかかるぞ！足止めにネクストを出せ！」

「了解！」

## IS 学園

『緊急放送、全生徒及び職員は屋内に退避してください。対コジマ戦闘設備を起動します。繰り返しします。全生徒及び職員は屋内に退避してください。対コジマ戦闘設備を起動します』

元々屋外にいる人はAFが戦闘を開始したのを知るや否や退避していたためすんなり準備は整った。建物の窓にシャッターが降り、全ての出入口、通気孔は封鎖された。完全に密閉されたことが確認されると、

ガシャンガシャンガシャン

学園の道路が割れ、

「ステイシス、出る！」

「アンピエント、出撃します」

「レイテルパラッシュ、出撃する」

「フィードバックだ……」



く。ただし最優先事項は建物への被害を出さない事だ。さて、お互いリンクスだ。一部を除いて連携も糞も無いだろう。同士討ちにならないようにしつつ各自自由に行動しろ」

「了解！」

リンクス：それはネクストと繋がる者という意味から付けられたネクスト乗りの総称だ。ネクストはそれ一機が莫大な戦闘力を誇る一方連携が難しい。万が一誤射しようものなら大事になる。それを踏まえての自由行動である。

リアナ side

「見えてきたぞ。IS 学園だ」

「AFがあんなに沢山：：大丈夫なのか？」

「気を付けるべきはあのバカでかい戦艦だけだ。他は置物だ。全く奴等は有能だな」  
「それは良かった」

「油断するなよ？それとあの戦艦は無視だ。呆れるほど硬いらしいからな。ネクストと言えど沈めるには3日はかかるだろう：：：回避行動！」

彼が叫んだ瞬間彼らの前に巨大な火の玉が2つ現れた。回避が間に合わなかった一人がそれに巻き込まれ、消えた。

「バカな……PAごとぶち抜かれたのか？」

「動じるな。必要な犠牲だ。あんな火力だ。連射は出来まい。今のうちに突っ込むんだ」

「くっ……了解！」

「次が来るぞ。とんでもない連射速度のガトリンググレネードだ。……こいつあすげえな。まるで火の壁だ」

「呑気に言ってる場合かああ！」

「落ち着け、さっきのより火力は低いし精度も悪い。爆風だけならPAで防げる。ただケツから打たれ続けるのは不味いな。一人が囷で残れ。可能な限り撃たせて弾切れか兵装を破壊してガトリンググレネードを黙らせろ」

「俺が行きます。後を頼みます」

「頼んだぞ」

「よし！VOBページ！行くぞおおおおお！」

## IS 学園

「やはり撃ち漏らしたか……数は8……少しは減ったが想像以上に残ったな。こっちで戦える前衛は11機、数では有利だが下手に戦って建物に被害が出ると不味いな……全くやりづらい」

そう呟いたオツツダルヴァはレザライを構え

「任務は時間稼ぎだが、別にあれを倒してしまっても構わんのだろう？」

そう言い残し防衛網を突破しVOBをパージした敵ネクストに向かってOBを起動した。

うーんこの死亡フラグ。どうしても最終兵器を使いたいので企業連のネクストの任務はあくまでも足止めです。まあ聡明な読者なら最終兵器が何なのかもう予想が

ついでに、思っています。それと最後のは中の人繋がりです。こういうの嫌いな方が居たらごめんなさい。



## 大決戦 その2

戦闘描写難しいです。

ドヒャアドヒャア!

学園のあちこちで響き渡るQBの音。

カアオカアオ

そこに混ざるレーザーライフルの音。学園は既に戦場と化していた。現在不利なのは学園側である。何かを守りながら戦うというのは一番難易度が高い。

シュガン!

「くっ!もうPAが持たないぞ!?!」

リアナは徹底的に学生寮を狙っていた。目的は生徒たちの殺害なので無理に企業連と戦う必要はない。そして強化されているとはいえ所詮は一般的な建物であり、ネクスト級の火力には耐えられない。故にこうしてステイシス自身の体で攻撃

を防ぐ羽目になっているのだ。ステイシスは高機動機体のため装甲は薄い。徐々に追い詰められていた。そして企業連の中でもトップクラスの実力者であるオッツダルヴァを追い詰めているのが、敵の中でも群を抜いて上手な逆脚にショットガンのネクスト、オールドキングのリザであった。

「くそっ逆脚は厄介だ！」

「ほう、なかなか上手く守るもんだな。そんなガキ共放っておけばいいだろうに。そんなんじゃ俺を殺せないぞ？」

「まさか抜け出してすぐに襲撃に来るとは、準備は済んでいたらしいな」

「理解が早いな。ああ、俺は最初からこうなることを見越してたんだ。じゃあ、オールドキングはオッツダルヴァに接近し

「死ね」

ショットガンを放とうとした。至近距離でのショットガンは絶大な威力を誇る。しかし、

ズガガガガン

「ぐああ！」

突然オールドキングに大量のミサイルが着弾する。

「大丈夫ですか!? オツツダルヴァー!」

「その声は…: エイ・プールか。ああ、助かった。だが今のでメインブースターがイカれたらしい。飛べん。すまないが離脱する」

「了解」

飛べないオツツダルヴァーは建物で射線を切りつつ離脱した。それを見届けたエイ・プールは

「今日ばかりは出し惜しみはしないわ! 弾薬費が怖くてASミサイルが使えるか!」  
大量の、比喩表現なしに視界を埋め尽くすミサイルを放った。

### IS 学園近海

「敵は撃墜しました。が、学園への援護は出来ません。下手すると学園が消し飛びます」

「くっ、ここに来て大火力が仇となるとはな。状況は?」

「劣性です。敵は学生寮だけを狙っており、庇ったネクストが一機落とされました」

「ふむ、仕方ないな。私が出よう。ネクストを準備しろ」

「しかし社長！あそこは戦場です。もし万が一のことがあったら……」

「喧しい！我が社のネクストは社長が乗れんほど脆いと言うのか！」

「……いえ、ですが気を付けてください」

「分かっている。後は任せた。もうSOKOKURAの出番は無いだろう。私が発進したら離脱しろ」

「御武運を」

## IS学園

「くそっ！このままでは守りきれん！」

タフなGA製ネクストが弾受けを担当するがいかんせん数が足りない。

「くっ、そこまで動きはよくないが連携が上手いな。一機も落とせん」

武器腕バズーカを放ちつつローディはそうぼやいた。たった数機のネクストだが絶妙な連携でまだ一機も落ちていなかった。誰かを撃とうとすれば他の誰かが撃ってくる。そうこうしていると……



PAはとうに剥がれている。しかしその分厚い装甲が抜けない。しかも、

「ふん！」

ドゴオオオオン！

建物を背にしているお陰で遠慮なくグレネードをぶっばなす。直撃した一機がまたバラバラになった。

ー残り敵6機ー

「む!? いかん！」

しかし鈍足のタンク脚、守れる範囲は狭く、数機が雷電を無視し、建物の裏側へ飛ぶ、だが、

「笑止」

ザガン！ザガン！

そこには数少ない接近戦のみを想定したネクスト、スプリットムーンこと真改がいた。手には青く光るレーザーブレード、月光が握られている。

ー残り敵4機ー

味方がやられるのを見た敵が一機逃げ出した。一目散にネクストの機動力を存分

に生かして離脱しようとした。生き残れば次がある。建物の護衛に必死な前衛のネクストは誰も気がつかなかった。しかし、

ズッゴォォォン

「そろら、直撃だ。生き残れんぞ、そんなんじゃ」

後衛のネクスト、月輪のアサルトキャノンが命中する。

「出番があつてよかつたのお。こいつは敵味方が入り乱れる戦場じゃ使えんからな」

ー残り敵3機ー

だが何も落とされるのはリリアナだけではない。

フィードバック、メリーゲートといった弾受け要員は勿論、後衛も何度か攻撃を受け企業連側のネクストも半数まで減っていた。

「恐れるな！依然として数はこちらが優勢だ！」

落とされたオツツダルヴァに変わり、ジェラルド・ジェンドリンが指揮を取っていた。

「頭の逆脚を狙え！奴が司令塔だ！」

「おおっと。そろそろ頃合いか、来い」

味方が減り、自分に砲火が集中するのを感じたオールドキングはとっておきを投入することを決めた。

ズモモモモ

海岸から何やら黒い虫のようなものが出現した。

「AFは何もお前らの専売特許じゃねえんだよお!! ジェット! 蹂躪しろ!」  
ヴン

ジェットと呼ばれたAFはその体から何本ものレーザーブレードを展開する。側にあった警戒用の見張り台がまるで熱したナイフでバターを切るようにスパッと切れた。

「まさか奴等もAFを準備していたとは……どうすれば!」

その時ジェラルドの無線に企業連の職員から

「企業連最終兵器アンサラー、出撃準備完了です。避難を!」

「待ってたぞ! よし、全員撤退!」

その号令と共に企業連のネクストは全機撤退した。それを見たオールドキングは

「何をおっ始めるつもりだ？まあいい、攻撃を続行だ！」

3機に減ったがネクストの火力は十分すぎる。だが彼らは思わず足を止めた。彼らの目に飛び込んできたのは

ズズズーーン

巨大な傘が、全身に緑色の粒子を纏い、生理的嫌悪感を抱かせる重い、名状しがたい音を響かせながらこちらに向かって来る姿だった。

---

急遽ジェットも出しました。その方が盛り上がるので。



## 大決戦 その3

アンサラアの絶望感上手く表現出来たかな？それと最初は前編、中編、後編の3つにする予定でしたが、思いの外文字数が嵩んだのでその1、その2としました。

ズズズーーン

「なんだ!?!このコジマ濃度は!?!閉鎖空間じゃねえんだぞ!?!」

みるみるうちに上昇するコジマ濃度を見たオールドキングは思わずそう叫んだ。「コジマ汚染がひどい! PAの自然減衰に気を付けろ! あんなデカイのが浮いてるんだ。無理をしてないはずがねえ。あいつを破壊すれば凄まじいコジマ汚染が起こるだろう。建物の破壊はジェットに任せて俺たちはあれを落とす!」

減り行くPAを見ながらオールドキングを含む3機のネクストはアンサラアに向けて突撃した。一人がミサイルを放つもアンサラアの手前で爆発し届かない。

「なんだありゃ? 迎撃システムか? 厄介だな。接近して羽を壊せ! 遠距離武器は

効かねえぞ！」

ミサイルが迎撃されたのを見たオールドキングはショットガンを構えOBを吹かして接近しようとした瞬間

「なんかやべえ！引け！」

叫びながら後ろへQBを吹かした瞬間

ズッゴオオオオン！

辺りがコジマの光で包まれた。

## IS 学園

「何なんだ……あれは、あんなものを学園のど真ん中で運用するとは。目で見て分かる高濃度コジマ汚染じゃないか？」

千冬は遠目にアンサラーを見ながらそう言った。慌てて企業連に連絡を取り

「何てことをしてくれたんだ!？」

「はて？何か問題でもありましたかな？」

「とぼけるな！なんだ！あのコジマ汚染は！」

「ああ、あれですか。正直ネクストの戦闘で少なからずコジマ汚染が進んでいますから今さら少々汚染が増えたところで問題ありません」

「あれが少々だと!?笑わせるな!」

「あなたは立場を分かっているらしい。元々IS学園は企業連が運営しています。今のあなたはたかが教諭に過ぎません。下らないことで連絡しないでください」

「おい!まだ話は終わってn」

ブツッ

今にも電話を握りつぶしそうになりながら千冬は

「これほど教諭になったのを後悔したのは初めてだ。無力だな。私は」

オールドキング side

「不味いな、こいつは」

後ろに飛び、落ち着いて周りを見たオールドキングは思わずそう言った。いたはずの2機の味方ネクストは姿を消し、ジェットは半数まで減っていた。

「遠距離はダメ、接近してもダメ、八方塞がりかよ!畜生!ここまで来て!」

思わず側に転がっていた瓦礫を投げつける。ネクストのパワーで投げられたそれはアンサラーに当たり、落ちた。

「ん？なぜ当たった？迎撃に値しないからか？いや、もしかすると……」

オールドキングはオートロックオン機能を停止し、手動照準でライフルを撃つとガン！

「当たるか……もしかしてあの迎撃システムはロックオン信号で稼働してるのか？」

オールドキングの予想は当たっていた。対ネクスト、IS用に作られたアンサラーはその脆弱さが問題となっており、それを補うために迎撃システム等を搭載していた。ネクストもISも狙うときにはシステム補正がかかるのでレーダーで迎撃するより確実だった。が、それも補正をオフにすると言う考えられない状況では稼働しなくなる欠点があった。

「いける！だが俺単機でやらないといけなのか。やれるか？いや、やらないといけねえんだ！」

先程のAAを見たオールドキングはAAの射程ギリギリで戦い始めた。

「射程ギリギリで戦えば……」

アンサラーはAAを放ち……

「AA直後はPAもない。隙も大きい。いけるぞ！」

徐々にダメージがたまるアンサラー、遂に羽が一枚脱落する。

「はっはっは、傘の下はレーザーまみれだが上はそうでもない。さて、ジェットのはうはどうだ？」

少し余裕が出来たオールドキングの目に飛び込んだのは建物を蹂躞するジェット……ではなく

「好き勝手やってくれたな……」

黒焦げになったジェットと父、有澤隆文の雷電とよく似た、オールドキングには見覚えのあるタンクタイプのネクストを纏った

「ここで確実に貴様を仕留める。生きて帰れると思うなよ！」

発射したばかりなのだろう。肩のOIGAMIから発射煙をたなびかせながら有澤隆彦がこちらに向かってくる姿だった。

## 数時間前

IS 学園の地下ガレージは損傷した企業連のネクストで溢れていた。どれも無傷の機体はなく、とてもオールドキングの攻撃に間に合いそうになかった。ガレージには有澤隆彦もいた。

「簪にはもう乗らないって言ったのにな……」

万が一の時には自分も出て学園を守るようにネクストは準備済みであった。その時、

「アンサラー損傷拡大！羽1枚脱落！」

慌てた声の放送が流れた。アンサラーはコジマ技術の塊である。もし学園の中央で破壊されようものなら大規模コジマ汚染は避けられない。

「どうする？」

「まだどのネクストも直りきってないぞ！」

「これで地上に出たらコジマ汚染で戦えない！」

ネクストはPAを張ることで防御力の大半を賄う。ただし、今回のような高濃度のコジマ汚染状況下では、PAは自然減衰し、PAが無くなればコジマ粒子によって

ネクスト本体も損傷が進み、最終的には破壊されてしまう。

「今、まともに動けるのは……」

このガレージにおいて無傷のネクストは隆彦のだけであった。

「子供に行かせるのは不本意だが……」

それを聞いた隆彦は

「俺が行きます。元を正せば仕留めなかった俺の責任です」

即答であった。

オールドキング side

「ちっ！出てこねえと思ってたら温存してやがったのか！あのガキ！」

だがオールドキングは自分の状況も冷静に把握していた。

「PAはもう無い、リザの損傷も増えてきてる。アンサラーだけならまだしもあのガキも相手取るのは不可能だ。ん？」

オールドキングは見た。黒焦げのジェットのリザーブレードがまだ光を失って無いことに

「ワンチャン行けるか？これに賭けるしかねえ！」

アンサラーに背を向けて隆彦に突撃するオールドキング。隆彦はそれを破れかぶれの突撃だと判断した。実力はあってもこういった戦闘経験は不足していた。だからこそ隆彦はOIGAMIを構え、

ザガン！

「！」

下半身のタンクをジェットのレーザーブレードで切り裂かれた。ISと違い巨大なネクストは下半身のタンク部分には生身が無い事が幸いした。だがブースターが内臓されたタンクを切り裂かれたことで飛べなくなり隆彦は無様に地面に転がることとなる。

「残念だったな。ジェットはかなり実弾防御性能が高い。まだ動けたんだよ。まあレーザーブレードを動かすので精一杯で自身は動けないらしいがな」

隆彦は目の前に突きつけられたショットガンを見ながら

「ああ、流石の俺もここまでか、いくら装甲が分厚かったってこの距離のショットガンは耐えられん。ジェットもまだ健在だ。装甲を過信して油断したなあ」

「すまん、簪」

なぜ原作ではロケットが当たるのか考えた結果こうなりました。



## 大決戦 決着

遂に決着です。書きながらストーリーを考えているので矛盾とかが怖いです。

「すまん、簪」

経験不足だった。カッコよく登場したのに即刻退場とは、カッコわりいなあ。俺は死を覚悟した。だが天は俺を見捨ててなかったらしい。

「有澤君に……手え出してんじゃねえぞ!!」

聞きなれた声で、でも聞きなれない喋り方でそう聞こえた瞬間

ズゴン

「ガッ!」

恐らく衝撃ミサイルだろう。凄い勢いでオールドキングが吹っ飛んだ。

「畜生、誰g」

ズッゴオオオオオン

言い終わらないうちに追い討ちとばかりに降り注ぐコジマミサイル、ってコジマ!?

振り替えればさっきまでレーザーブレードを振り回してたジェットも沈黙している。

「一体何が!？」

思わずそう叫んだ。すると

「有澤君無事!？」

目の前に天使が舞い降りた。俺を死から救ったのは

「簪、その格好は……」

ネ・ク・ス・トを纏った簪だった。

「流石のISでもコジマ汚染環境下では活動出来ないって言われてね。企業連の人曰く、「こんなこともあるのかと」だって」

その姿は無骨さの塊のような通常のネクストとは違い、体こそ露出していないがISのような美しさも兼ね備えたフォルム。青を基調としたカラーリングに天使の羽のようなスタビライザー。打鉄式式では腰にあった荷電粒子砲が手に握られ、両肩

にミサイルコンテナが装備されている。

「綺麗だな」

思わずそう呟くと

「そう、ありがとう」

短く返した簪はコジマミサイルが着弾したオールドキングに視線を移し、

「ちょっと待っててね。あいつ消し飛ばして来るから」

顔は見えないが分かる。大層ご立腹だ。俺のためにここまで怒ってくれるとは：

……

「ねえ、オールドキングって言ったっけ？」

ガラガラ……

「あ？」

瓦礫を押し退け、ボロボロで满身創痕のオールドキングが這い出てきた。自慢の逆脚からは火花が散り、手に持っているショットガン以外のめぼしい武装は軒並み壊れていた。

「なんだ？ 誰だ、てめえ」

「これから死ぬ人に……名乗る名前なんて無い！」

放たれる大量のミサイル。だがネクスト戦に慣れたオールドキングと慣れていない簪ということもあり、

「どうした？ そんなんじゃないや当たたらねえぜ？」

ぎこちないがかるうじて直撃を免れるオールドキング

「くっ、扱いが、難しい！」

要求される技量がISより高いネクストはタンクタイプならともかく普通の軽二機体では動かすのでさえやっとな、先程のミサイル攻撃もじっくり狙う時間があつたから当てられた訳で、

「ん？ おめえもしかしてニュービーか？ 声からしてさしずめそいつの彼女って訳か」

「それが……どうした！」

「ふん、お前を先に殺せばあいつはどんな声で叫ぶのかなって想像しただけさっ！」

急接近するオールドキング、構えられたショットガンは正確に簪をとらえている。

「取った！」

「くっ……邪魔だああああ！」

簪は手に持っていた荷電粒子砲を投げ捨て、

「ふん！」

ドヒャアドヒャア

横と前にQBを吹かしながら腰に差してあった薙刀を抜き、

カシャンカシャンカシャン

小気味良い音と共に格納されていた柄が伸び

ヴォン！

一閃した。

「へっ、なかなかやるじゃねえか、火事場の馬鹿力ってやつか？」

逆脚が切断され、オールドキングは地面に倒れ込む。簪は大地にひれ伏すりザの胸当たり、オールドキングがいるコックピットの所に薙刀を添えた。

「いいのか？このままじゃあおめえは人殺しだぜ？」

「構わない。有澤君のために、世界のために、ここで死んで。オールドキング」

「はっ、ここまでか。悔いはねえ。殺そうとしたんだ。殺されもするさ」

ヴォーン！

赤く染まる切断面。オールドキングはコジマ汚染の中、息絶えた。そしてこの瞬間、世界中を巻き込んだ戦いに終止符が打たれた。

IS学園side

「敵ネクスト、全機沈黙！」

「直ちにアンサラー、及びネクストのコジマジェネレーター停止！ありったけの除染機を投入しろ！」

「了解！」

「急げ、もし海に汚染が広がってみろ。取り返しがつかなくなるぞ！」

「全除染機正常に稼働中、コジマ濃度徐々に低下中」

「こんなこともあろうかと、学園中にあらかじめ除染機を設置していて正解だったな」

企業連は対コジマ戦闘設備を整備する傍ら除染機を大量設置していたのだ。

「出撃していた有澤及び更識帰投します！」

「出迎えの準備を！それと少なからず損傷している。整備班！準備しとけ！」

下半身を持っていかれて動けない隆彦は簪に所謂お姫様抱っこされて帰投した。

「解せぬ、逆だと思ふのだが……」

「有澤君は動けないんだからおとなしく運ばれなさい」

「すまん。よろしく頼む」

帰った隆彦を出迎えたのは

「この馬鹿息子が！心配かけさせおってからに！油断するなど前々から言っておっただろうが！」

父、有澤隆文の説教だった。

「まあまあ、帰ったばかりで疲れてますから。説教は後にしてください」

簪の助け船のお陰で説教は一時的に免れたが、

「落ち着いたら来い」

「はい」

単に先伸ばしになっただけだった。しかも

「ねえ、有澤君。ちょっとお話しよっか？」

どうやら説教が増えてしまうようだ。まあ死にかけたんだ。甘んじて受け入れよう。

---

簪のネクストは完全オリジナルです。読者思い思いの機体を想像してください。

## 兵器解説

登場する兵器の解説です。

### コジマ粒子

原作においては詳しい人体への影響は書かれていないので筆者の独自設定です。色は緑色で放出されると大気中に1年ほど漂い消える。コジマ粒子にある一定の電圧をかけてやると無限に増殖する。コジマ粒子を人体が取り込むと発ガン、皮膚の変色、全身の激痛と出血が確認されている。発見者の小島博士はこれで亡くなった。研究中のトールラスも完全隔離、遠隔操作で実験を繰り返している。既に数名研究者が死亡している。また小島博士の偶然の産物で生まれたためもし増殖を止めて全てのコジマ粒子が消えた場合再現できるものがない。周囲のありとあらゆるエネルギーを吸収する性質があり。コジマ粒子に弾丸等が当たると運動エネルギーを吸収し無効化する。何かの物質に触れると原子と原子がくっつくエネルギーを吸収

するので劣化が速くなる。何かのエネルギーを吸収したコジマ粒子は消滅する。電流を流して粒子の制御が可能。空気より重いため下の方に溜まっていく。増殖の際に莫大なエネルギーを生む。トーラスの努力により除染機と無害化コジマ粒子が完成したものの無害化コジマ粒子に関しては性能が大幅に落ちており移動位なら可能だが戦闘行為はネクストの強みを一切発揮出来ない。コジマ汚染は専用の除染機で対処する。

## ネクスト

コジマ粒子によって運用される人型兵器。AMSと呼ばれる精神接続によって制御され適性がないと動かせない。大きさは高さ10m程でおよそISの2倍の大きさ。コジマ粒子の莫大なエネルギーを利用しクイックフーストオーバードフーストQBやOBといったブースターを使うことで常識を越えた機動性を誇る。またブライマルアーマーPAと呼ばれるコジマ粒子の幕を張り射撃武器を無効化する。他にもPAを反転させ周囲を風ぎ払うアサルトアーマーAAも備える。既存の兵器を容易に蹂躪するほどの戦闘力を誇る反面、戦闘時にはコジマ汚染が避けられず、もし無害化コジマ粒子のみで戦闘を行った場合PAやQBが使えずただの大きな人型兵器となり一般的な兵器で破壊される。

AF(アームズフォート)

多くの凡人で運用される、ISによる力の個人性に危機感を抱いた企業連が開発した超巨大兵器。量産型とフラッグシップが存在し、そのどちらも大きさは数百メートル規模である。圧倒的な物量でISを押し潰す事が目的であり、その大きさから日本やイギリスといった小さな島国での陸上型AFの運用は不可能である。

ギガベース

最初に建造が完了したGA社の量産型AF。水陸両用であり、主兵装は中央の大型レールガンと大型実弾砲。副兵装に回りに取り付けられた速射砲がある。レールガンは精度と射程に優れ狙撃も難なくこなす。設計上電磁推進なので、水上移動時はレールガンが使用できない。

ランドクラブ

GA社の量産型AF。多脚式の駆動方法で足先のキャタピラでも走行可能。4つのターレットがありそこに3連装砲を装備している。拡張性が高く他社にも提供されておられAFの中で最も運用数が多い。

グレートウォール

GA社のフラッグシップAF。列車型でその長さは編成によって異なるが一番長いものだと16kmにも及ぶ。車両は動力車、輸送車、武装車に別れており武装車は大型ミサイルコンテナを装備したものと有澤重工製のガトリンググレネード2基を装備したものの2種類がある。

その特徴は豊富な火力、重厚な装甲、桁外れの積載量にありISはおろかネクストでさえも退けると言われている。まさに地上最強。

スピリット・オブ・マザーウィル

BFF社のフラッグシップAF。6本の脚で駆動し移動速度は極めて遅い。その代わり悪路でも機体を安定させて移動が可能。武装は6枚の羽の先に装備された計22門のミサイルコンテナ、大量の近接火器、大型の3連装砲が2基である。主砲である3連装砲の精度と射程は凄まじく大抵の敵は接近すら許されない。6枚の羽は飛行甲板でもあり大量のノーマルや戦闘機を運用できる。

ステイグロ

インテリオルユニオンのAF。珍しい水上型のAF。フラッグシップと言うには数が多く、量産型と言うには数が少なく戦闘力が高い。水中翼船のようだが停止中も

沈まない。艦首に装備された大型のレーザーブレードは何であろうとバターのよう  
に切り裂く。装備位置の都合上有効範囲は水面に限定される。また大量のミサイル  
コンテナも装備しており空中の敵にも対処できる。装甲もグレートウォール程では  
ないが施されており生半可な攻撃では沈まない。

### イクリプス

インテリオルとトーラスの共同開発で作られたAF。珍しい飛行型で円盤状の機体  
には360度旋回するレーザー砲が上下2基装備されておりその火力は絶大。ま  
た飛行型の利点を生かして爆撃等もこなす。

### ソルディオス・オービット

トーラス社のAF。ランドクラブをベースに自社開発のソルディオス・オービッ  
トを6機装備している。ソルディオス砲は自律式でネクスト技術を生かしたPA、  
QB、AAを装備しておりオービット1機1機がネクスト級の戦闘力を持つ。また主  
砲であるソルディオス砲はネクスト相手でも数発の被弾で落ちるほど強力。ただし  
兵器の都合上コジマ汚染は避けられない。

### カブラカン

アルゼブラ社の輸送型AF。機体前面の大型のチェインソーとキャタピラでありとあらゆる場所を走破し輸送する。輸送型だけあり火力は乏しいがその代わり重厚な装甲を持ちその装甲はグレートウォールにも匹敵するほど。キャタピラもスクーターアーマーで保護され地雷等にも強い。輸送コンテナに自律兵器を積むことで多少は戦闘もこなせる。

## S O K O K U R A

有澤重工のフラッグシップAF。日本で運用するため水上型となった。デザインは戦艦大和に似ているがその大きさは大和が可愛く見えるほど巨大。160cm単装砲を前部に2基搭載。副砲にグレートウォールにも採用されたガトリンググレネードを艦周囲にびっしりと装備する。仰角を60度まで取れ対空戦闘も可能。ガトリンググレネードの火力はグレートウォールよりも高くその弾幕は艦全体が爆炎で外から見えなくなるほど。主砲の発射速度は分間1発、射程は200kmに及び着弾時のクレーターサイズは深さ、幅共に20mに達する。射角は左右20度取れある程度の照準は可能。仰角は45度まで取れるが再装填のためには砲を水平に戻す必要がある。水平時は砲が艦に収まる為射撃可能な角度は10度から。そのた

め近くを射撃することが出来ない。装甲は輸出用を使うグレートウォールよりも頑丈でその厚さはグレートウォールの2倍にも及ぶ。大鑑巨砲主義の頂点であり実弾兵器の中では文句なしの最強である。

#### アンサラー

企業連のフラッグシップAF。コジマ技術を詰め込んでおり動くだけで周囲に甚大なコジマ汚染を引き起こす。新開発の迎撃システムにより射撃武器を無効化し、近接用に大型のAAも備える。武装は大量のコジマキャノンとコジマミサイルで当たればネクストでさえも耐えられない。また撃破されると他のコジマ兵器とは比べ物にならないコジマ爆発が起こり周囲に深刻なコジマ汚染をもたらす。その特性から稼働するのはごく稀でありこれが稼働するというのはすなわちその行為が企業連の答えである。

#### ジェット

リリアナが運用したAF。他のものより小型で（それでも大きい）運用コストは安く（他と比べて）武装はレーザーブレードのみだが分厚い装甲に守られ、撃破は困難。対施設用に開発されており、水面下に潜むことが出来る。そのレーザーブレー

ドは例えガチタンであろうと容赦なく切断する。

---

原作と所々違うところ（イクリップスの強化）があります。今作オリジナルのSO KOKURAは筆者の欲望を詰め込んだ一品です。

## 事後処理

気がついたら最終話間近！やべーです。

オールドキング率いるテロリスト、リアナのIS学園襲撃から3日。だいぶコジマ汚染も落ち着いてきたところで企業連が記者会見を開いた。その内容は……

「現在企業連は全世界を勢力下に納めている。だが、我々としても永遠にこのまま世界を支配し続けるのは不可能だ。そこで次の計画の達成をもって我々企業連は制圧した国々の主権を返還することをここに発表する」

「その計画とは全世界の武力の完全管理と有効利用である。企業連はより良い世界を目指しておりその世界に武力は不要であると考える」

「手始めに世界を支配している最大戦力、ISについてだがここからは彼女に説明を頼もう。ISの開発者、篠ノ乃束博士だ」

その発言に全世界が驚愕した。ISを世に放って以降人前に一切姿を見せず、死

亡説も出てくるくらいであった。

「ハロハロー、皆のアイドル、東さんだよ」

開口一番かなりフレンドリーな言葉が飛び出す。が、

「皆色々思うことはあると思うけどさ、まず聞きたいことがあるんだ」

すると今までの笑顔が一変した。無表情になり

「私がさ、最初に何て言ってISを発表したか覚えてる人どれくらいいる？」

ざわ……ざわ……

どよめく会場。そのなかで一人手を挙げた者がいた。

「我々女性の地位向上です！」

言い切った女性の胸元には女性利権団体のバッジが付いていた。それを聞いた東

は一気に不機嫌な顔になり

「それは結果論だよな？ 皆には言って無かったっけ？ 今のこの世界はね、私が望んだ形じゃない。むしろ大嫌いだ」

その言葉に驚愕の表情を浮かべる女性達。会場の約半数がそう思っていたらしい。

「最初に発表したときね、私こう言ったんだ。人類が宇宙に羽ばたける翼だって。IS、インフィニット・ストラトスの意味知ってるよね？無限の成層圏って意味なんだ」

「今の世界さ、どうなってる？兵器としてしか使われてないじゃん。おまけに宇宙に行けないような規則まで作っちゃってさ。中には白騎士事件起こした張本人が何を言うって言われるかも知れない。でもさ、白騎士事件だって降り注ぐミサイルから人々を守るためにISを使ったじゃん。戦闘機を落とした？攻撃されたら反撃するのが道理でしょ？」

誰も何も言えなかった。正論だからだ。さっきまで生き生きしていた女性も下を向いてうなだれている。

「そこでね。今回いっそのこと全世界のISを軍事利用出来なくしちゃおうと思っただんだ。別にいいでしょ？戦う為だけならノーマルもネクストも、AFだってあるじゃん。そこで全世界のISを持つてる国々に要請します」

「現在保有している全てのISを一旦企業連に預けてください。全てです。出回ってるコアの数は把握しているから隠しても無駄です。私からは以上です。質問は受

け付けません」

言い切るや否やさっさと退場する束。会場はどよめき

「どういうことですか!？」

「それでは女性の権利が！」

騒ぐ人々をそのままに

「以上で企業連の記者会見を終了します」

記者会見は終了した。

数週間後

「これで全部？」

「はい。ヨーロッパで失われたコアを除く世界に散らばった全てのISコアです」

「ありがとう。もう出てっついていいよ」

「はい」

企業連の専用研究所には全てのISコアを前に母親のような笑みを浮かべる束がいた。

「もう戦わなくていいんだよ」

手元のキーボードを叩くと一瞬だけコアが光った。まるで返事をするように……数日後、ISコアが返還された世界は混乱した。なんとISが重火器といった兵器を一切装備出来なくなったのだ。装備出来るのはプラズマキャタリーといった救助活動に使える装備だけ。ISは兵器としての性能を完全に失った。残された装備を使って戦闘行為をしようとする強制的にISが停止する機能も追加されていた。戦えなくなったため世界大会は形を変え、今までの戦闘からレース等に使われるようになる。だが一番混乱したのは……

「今日の授業は目の前の倒壊したビルから負傷者を救助する訓練だ！」

IS学園である。今までブレードや銃を使った戦闘訓練から救助といった訓練に移行した。数多くあったアリーナもピットが撤去された。そこには

「うおおおおお！不整地どんと来いやああああ！」

瓦礫を踏み潰す隆彦の姿もあった。戦闘以外でもタンクの高い安定性は存分に役立っているらしい。OIGAMIの代わりに巨大なクレーンを背負ったその姿は助

けを待つ者には高い安心感を与えるであろう。

「間違っても救助者を踏み潰さないでね?」

それに続くのはミサイルコンテナの代わりに医療キットを装備した打鉄式を纏う簪。

「ハイパーセンサーがあるんだ。そんなヘマはしないさ……あつ」

ぐしゃっと救助者人形が潰れる。恐らく現実だったら即死であろう。

「ハイパーセンサーが……何だって?」

「……以後気をつけます」

「大雑把なのが有澤君の悪い所だよ?」

「……ぐうの音も出ない!」

銃声の代わりに響く工具の音。平和そのものであった。

何も賑やかなのは地上だけではない。今まで規則で不可能だった宇宙空間でもISは使われている。数年経ってようやく正しい使われ方をされたのだ。劣化がひどく、工事も困難を極めていた国際宇宙ステーションも格納領域に資材を詰め込み、

自由自在に移動できるISが活躍し、大幅に工期は短縮された。

「凄いわね。宇宙にほぼ生身で来れるなんて。これがISの本来の使い方か……」

「シールドのお陰でお腹とか露出してても平気だしね。というか無重力って楽しい！」

いちいちロケットを打ち上げる手間も無くなり大幅に宇宙開発は進んだ。

では今までISが担ってた軍事はどうなったか？昔は核、今はISが抑止力となっていたが今は企業連が平和を保っていた。というのも

「○○国で戦闘準備の動きが……」

「ランドクラブを向かわせる」

コジマを使わないAFが戦いが起こりそうな地域に配備され、戦闘行為を防いでいた。そのお陰か小競り合いが少し起こる程度で世界を巻き込む戦争は起こらなくなった。現在のパワーバランスは

通常戦力  $\frac{AF}{AF}$  ノーマル  $\frac{AF}{AF}$  ネクスト  $\parallel$  AF

となっている。このうちノーマルとネクストとAFは全て企業連が管理している

ため平和の実現だけでなく、平和の維持も企業連が担っている。主権を返還したとはいえ依然として世界は企業連に支配されていた。

---

次が最終話（の予定）です。

## 未来への翼

すいません。二年、三年は物語を知らないもので全てオリジナルでただらだら書くよりはもう終わらせた方が良くと判断しました。

激動の一年目の後の二年の学園生活は至って平穏だった。朝起きて、授業を受け、簪とイチヤイチャして周りに砂糖を撒き散らす。そんなこんなで卒業まではあつという間だった。だがどんなに愛し合っていても進路が違えば会えなくなる訳で……「もう会えないのか……寂しいね」

「仕方ないさ、俺は会社を継がないといけないうし、簪は別にやりたいことがあるんだろ？何だっけ？」

「IS警備部隊。もう、あんな思いはしたくない」

IS警備部隊とは警察の中にある部隊の一つでISを用いた今で言うところの機動部隊のようなもの。人を傷つけず鎮圧する目的ならばISは問題なく使用できた

めこのような部隊が編成されたのだ。

「やっぱり忘れられないよな。あれ」

「うん。世界のために、なんて大義名分があったって忘れられないよ。人を殺した  
感触は」

「ごめん。俺が油断せずちゃんとしてれば……」

「その事については気にしないでって言ったじゃん」

「そう……だな」

隆彦の表情は優れない。あれから二年になるが、ほぼ毎日自責の念に駆られてい  
る。あの時油断してなければ、あの時とどめだけでも刺していれば、後悔は絶えな  
い。そのとき

「ねえ、実はね、最後にやりたいことがあるんだ」

「やりたいこと？」

すると簪は少し頬を赤らめながら

「実はね、先生に無理言って許可取ったんだ。宇宙活動の」

IS 学園では例の一件の後に宇宙での実習も行われていた。手続きこそ面倒極ま

りないが、ISを使えるものにとって宇宙に行くというのはとても簡単である。V OBを改良したようなロケットブースターで宇宙に行き、帰りはブースターを格納しそのまま落下すればいい。大気との摩擦熱はシールドが防いでくれる。

「宇宙？確かに俺も簪も専用機があるし行くのは簡単だが……何故？」

「それは着いてからのお楽しみ。さ、行こ？」

既に簪はISを展開し、ブースターも装備していた。

「何だか知らんが行きますか。確認するが先生とかにどやされる心配は？」

「疑ってるの？」

「……愚問だったな」

そういうと隆彦もISを展開し、学園に新たに設置された打ち上げ場にあるカタパルトに機体を固定した。

「打ち上げお願いします」

「こんなことにカタパルトを使うのは多分後にも先にもあなた達だけですよ？」

管制室の先生がそう言った。

「えっ？それってどういう……」

『発進します』

シユゴオオオオオ

ブースターの吐き出す火と煙を見ながら

「あーあ、早く私も出会いが欲しいなあ。若いっていいわねえ」

管制室の先生は一人寂しく呟いた。

### IS学園宇宙ステーション

そこは宇宙の静止軌道に漂うIS学園専用の宇宙ステーション。実習も兼ねて生徒達の手で、束監視の元いち早く建造されたものである。

「で、宇宙にまで俺を連れ出して何がしたかったんだ？」

「それはね、何度か授業で来ることはあってもこうして落ち着いて地球を見るのは初めてでしょ？」

「それはそうだが、何も無理言っただけで来るほどのことじゃあ」

「外出よ、居られる時間は限られてるしやりたいことをさっさと済ませよう」

「簪のやりたいことって？」

「外出たら分かるよ」

パシユン

エアロックを抜け、俺は簪と宇宙空間に漂っていた。

「ははっ。いつ見てもタンクが宇宙空間に漂うのってシユールだね」

「それは言わない約束だろ？で、やりたいことって？」

「うーん、それは……ええい！」

なぜか顔を真っ赤にした簪が俺の前に来ると

「今ほどISにフルフェイス装備が無いことに感謝したことはないよ。でも有澤君には付いてるんだよね。それ取ってよ」

「ん？いいぞ？」

言われるがまま頭装備だけを解除した隆彦ははっとした顔で、

「おい、やりたいことってまさか！……」

チュ

簪は俺のタンクの上に膝立ちになって短いが、しっかりとしたキスをしてきた。

「ねえ、はつきりと言ったこと無かったよね。私、更識簪はあなた。有澤隆彦のこ

とを愛してます。結婚を前提に付き合ってください！」

普段では考えられないほどはつきりとした口調でそう言い切った。思えば好きだ、好きだと言いながらそこで終わっていた。その言葉にこちらも顔を真っ赤に染めた隆彦は

「うう、不意打ちとは卑怯な……ふう、喜んで！」

一世一代の、今後誰もやらないであろうプロポーズを済ませた二人は帰る準備をしながら

「ところで何でわざわざ宇宙で？別に地上でやっても良いだろうに」

「隆彦はもう少し別のロマンを求めた方が言いと思うな？誰にも見られたく無かったし」

プロポーズで吹っ切れたのだろう。下の名前で呼ぶようになった簪は、

「それにさ、隆彦って宇宙好きでしょ？実習のときいつも目をキラキラさせてたじゃん」

「うぐっ、バレてたのか。ああ、とても嬉しくて、記憶に残るプロポーズだったと

も！」

「私もだよ！」

地上に戻った俺達を迎えたのは非常にイイ笑顔を浮かべた管制室の先生。

「ねえ、知ってる？安全管理のために学園の宇宙ステーションには外側にも監視カメラが付いてるんだよ？」

「えっ、それってもしかしなくても……」

「うん、バッチリ撮られてるだろうね！」

「あああああああ……」

悶える二人であった。

その後進路の違う二人は別々の道に進む。二人が再び出会い、二人で一つの人生を歩むことになるのはまた遠い未来の話である。

これにて「IS×AC ガチタンが行く」完結です。これまでの後愛読ありがとうございます。ございました。またいつか別の作品でお会いしましょう！まあ他に知ってるロボットが出る作品を知らないのもACとのクロスオーバーは出来ませんがね。次はいつになるか分かりませんがSAOを書こうと思っています。

## IS × AC ガチタンが行く

---

著者 ガチタン愛好者

発行日 2020年3月29日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/208385/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---